
魔法少女リリカルなのは～ツインズ～（改訂版）

光闇雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはツインズ（改訂版）

【Nコード】

N1814P

【作者名】

光閻雪

【あらすじ】

主人公ははやての親戚の男の子となのはの妹（双子）の女の子

男の子は曰くありげな転生者。 A・s以降の知識しかない。 女の子は魔法が使えない普通の女の子。 しかし、ある事件により・・・

この主人公達が織りなす魔法少女リリカルなのはの世界をお楽しみください

第一話 「人生の終わり、そして……」 (前書き)

雪

「さて始めました。魔法少女リリカルなのはツインズ(改訂版)!!」

「作者さん。(改訂版)って何なの？」

「そうだ。一体、何なんだ？」

雪

「これは最初に投稿した魔法少女リリカルなのはツインズの改訂版だからです!!」

&

「「そうなの(か)?」」

雪

「はい!! では、本編をどうぞ」

第一話 「人生の終わり、そして……」

『う、ううん……』

俺が目を覚ますと、そこには何もない空間が広がっていた

『（ここは何所だ？ 何故、俺はここに？）』

辺りを見回していた俺は、何故こんな場所に寝ていたのかを考えていた

『えっと、確か……A・SのDVDを買いにアニイトへ行って……』

……回想……

【ウィーン】

『はあ、A・SのDVD売り切れてたよ……』

やっぱ、予約してた方が良かったかなあ……

アニメイトを後にした俺は家に帰ろうと街中を歩いていく。そして、交差点に差し掛かった時、信号が赤になったため立ち止まった

『……………（家に帰ったら取り寄せなきゃ）』

待っている間、俺は家に帰ってたからのことを考えていたが

【キキイーンッ！！ ドーン！】

という音とともに俺の意識は途絶えてしまう……………

……………回想終了……………

『ああ、俺は死んだのか……………ということは、ここは天国なのか……………？』

「当たらずといえども遠からずといったところだな」

『……………』

そう呟いていると、急に後ろから声がかかったため驚いてしまう。振り返ると、そこには初老の男性が立っていた

『……………貴方は誰だ？』

「私かい？ 私は創造神をやっているトウムという」

『ふん』

「・・・・・・・・驚かないのだな」

『まあな。俺は車に轢かれて死んだんだろう？ それに死んだはずなのにここにいること自体おかしいからな。神がいたとしても驚かないよ』

「そうか・・・・・・・・」

『で、その創造神が俺に何の用だ？ まさか、この死は間違いだということと言っんじゃないだろうな？』

「・・・・・・・・そうだ」

『そうだろう。この死が間違いだったら、この俺が って何ー
ー！っ！？』

はあ！？ 一体、どういうことだ！？ いやいや、落ち着け、俺・
・

『・・・・・・・・それは、どういう事だ・・・・・・・・？』

「正確には故意に死なせたと言った方が正しい・・・・・・・・あの者が
な・・・・・・・・」

『あの者？』

トウムとかいう神が指差した方を向くと、そこには鬼のような表情で一人の男性を袋叩きに行っている女性がいた。こ、怖ええ……

『…………え、えつと、あれは？』

「ああ、ジンが^{あの男}お前を死なせた張本人だ。それで、^{あの者}エリスが折檻しているところだ……………」

『そ、そうか……………』

「…………少年よ。本当に申し訳ないことをした」

『いいよ。で、俺はこれからどうしたら良いんだ？』

「ああ。本来なら天国に行ってもらわないといけないんだが……今回はこちらの落ち度だからな。別世界に転生してもらう……………」

『はあ……………』

俺は何だか狐につままれたような感覚に陥ってしまう。えつと、別世界と言うことは……………

『元の世界には戻れないのか?』

「ああ。同じ世界に転生させるというのは私達、神の理に反することだからな」

『そうなのか……』

「本当に申し訳ない……」

『いや、良いんだけどな……。それで何所に転生させてくれるんだ?』

本当は元の世界に戻ってやり残したことをしたいんだけどな（苦笑）
できないと言われたら仕様がな

「うむ。今回は特別に少年の希望の世界で良いぞ。漫画やアニメなどの世界でも、何所でも言いなさい」

『本当か!? な、なら“魔法少女リリカルなのは”の世界で頼む!?!』

「分かった。その世界に送るとしよう（スッ）」

神様がそう言って手を掲げると、俺の目の前に扉が現れた。な、何か凄えな……

「……よし、この扉を潜れば少年が望んだ世界だ。あと、能力3つとデバイスというものを授けよう」

『え！？ 良いのか！？』

「ああ。 何度も言うが、こちらの落ち度だから」

『ありがとう』

「礼はよい。 能力とデバイスについては転生先で伝えるからな」

『ああ』

俺が立ち上がると扉に近づきながら、神様にお礼を言つと神様は苦笑してそう言つた

「あ、言い忘れていたが、赤ちゃんからのスタートだ。 良いな？」

『ああ、分かった』

俺は頷いて扉を潜る。すると、目の前が真っ白になり、意識が途絶えた

……トウムSIDE……

「行つたか……（シュッ）」

少年が消えたのを確認して扉を消しながら呟く。そして、後ろを向くとジンを折檻していたエリスが立っていた

「行きましたか？ トウム様」

「ああ、ジンの奴はどうだ？」

「はい。反省はしているみたいです」

「そうか……………（これで何もしなければ良いが）」

「トウム様？」

「何でもないよ。さて、仕事に戻るとするか……………ジンは百日間の謹慎だ。そう伝えといてくれ」

「はい」

私はエリスにそう言うと言つと自分の執務室に戻る。その途中、私は少年について思い出した事があつた。少年の祖父が だつたということ……………

「運命の巡り合わせというものは、時々私たちの想定の外を動いているか……………はは、それも面白い……………」

私はそう呟くと執務室のドアを開け、中へと入っていった

……SIDE END……

第一話 「人生の終わり、そして……」（後書き）

雪

「作者の光闇雪です」

「主人公その一、
です」

「主人公その二、
だ」

&

「……………」

雪

「あれ？ 二人ともどうしたんですか？」

&

「何で、名前が伏字なの（なんだ）！？」

雪

「だって、まだ名前は出してないですしね」

「あ、そっか」

「それじゃ、仕方がないな」

雪

「はい。あと、しばらくは 視点で送りいたします」

「ほう……………」

「私は？」

雪

「予定としては四、五話目で登場します。ではこの辺で後書きを
終わりにします。感想&ご質問等あれば あったらいいなあ
」

&

「「(コケッ)と、途中で言葉を切らないで(切るなよ)……………」
」

雪

「「ごめんなさい(汗) 感想・ご質問等あればお送りくださ
い」

&

「「お願いします(お願いする)!!」「」

第二話 「転生、そして……」(前書き)

雪

「第二話、更新しました」

「今回も私、出番なしなの……」

「まあまあ、そんなに落ち込むなよ」

雪

「では本編をどうぞ」

第二話 「転生、そして・・・」

う、うゝん・・・・・・・・ここは？ 気がつくところには知らない天井があつた・・・・・・・・

『あああうー・・・・・・・・あう？（知らない天井だ・・・・・・・・あれ？）』

上手く喋れないな・・・・・・・・ああ、確か赤ちゃんからのスタートだつて言つてたな。それじゃ、仕方がない

「あら、起きちゃったの？」

『（うん？）』

俺が天井を見つめたまま、ボーっとしていると聞き覚えのある声がした。あれ、何で母さんの声が・・・・・・・・ここは“魔法少女リリカルなのは”の世界だよな・・・・・・・・？

「信慈、おはよう」

そして、目の前に現れた女性を見て驚いてしまった。この人の顔が母さんそっくりだったからだ・・・・・・・・

「もう、可愛いわね」（スリスリ）」

母さんらしき女性（母さんで良いか）の顔をまじまじと見つめてみると、母さんが俺を抱き上げて頬をスリスリしてきた。非常にくすぐったいが、俺はそれどころではないので母さんの横顔をまじまじと見つめる……。本当に母さんなのか……。？ 俺の母さんは実年齢よりも容姿が若いと評判だったが、この人は母さんよりも若く見える

「お母さんはお父さんを起こしに行きましょうね」

『あ、あう〜』

母さんはそう言つと俺を抱いたまま、部屋を出て寝室らしき部屋へ入っていく。で、ベットには男性が眠っていた……。うん、父さんだ……。どうなってんだ？ ま、考えても仕方がない……。後で神様にでも聞いてみよう。説明に来るって言つてたしな

「お父さん、朝ですよ 信慈はもう起きてるんですから」

「ん、ううん？ ふわあ〜。おはよう」

「おはよう」

『うわぁ（おはよう、父さん）』

「お、偉いな、信慈。 挨拶できるなんて（ツンツン）」

「もう、お父さんったら」

父さんは俺を抱き上げると指で頬を突いてくる。 何か、和むなぁ

「・・・・・・・・・・・・・・・・（退屈だなあ）」

朝食後、俺は寝ながら天井を見つめていた。 うん、何もできない
というのは退屈で仕方がないな

「・・・・・・・・少年」

『あう？（神様？）』

「・・・・・・・・ああ、喋らなくても大丈夫だ。心の中で思ってくれば良い」

『（そう・・・・・・・・これで良いか？）』

「ああ、それで能力の説明を」

『（あ、その前に聞きたいことがあるんだけど・・・・・・・・）』

「ん、何だ？」

疑問に思っていたことを口にしようと神様の言葉を遮る

『（こっちの母さんと父さんんだけど・・・・・・・・顔が俺の母さんと父さんにそっくりなんだけど・・・・・・・・？）』

「ん？ ああ、それは転生前の少年の両親と同じ魂を持っているからだ」

『（同じ魂？）』

「ああ、そうだ」

『（へえ〜）』

「もう質問はないか？」

『（ああ、ないよ）』

「そうか。では能力の説明をするぞ」

『（ああ）』

能力は何だろう・・・

「能力はお前が頭の中で考えていたものを与えたぞ」

俺の頭の中？ 俺、何を考えていたっけな・・・？

「一つ目は織ロー・アイアス天覆う七つの円環。これは光でできた七枚の花弁が展開され、魔法攻撃を防ぐ事ができる。また魔力量で防御力が変化ルネ・アイヴするから、後で確かめてくれ。次に二つ目は矛を受け止めし堅き盾アイヴ。これは物理的攻撃を全て受け止めることができる。だが、前にのみ展開が可能だから注意が必要だ。そして、三つ目は万年ブラの霊甲ツク・トース・玄武。これは玄武の甲羅を模した盾から聖水の霧が現れて自分や味方を包み込み、あらゆる攻撃を無効化することができる。だが、これは一日二回しか使えんから注意してくれ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ん？ どうした？」

『（いや、防御ばかりだなあと思っただけ・・・・・・・・能力の件

については了解した）
『

「そうか……で、この能力はこの世界で言うところの稀少^{レアス}技能^{スキル}ということになる。で、この能力だが、しばらくは封印しとくぞ」

『（封印？）』

「ああ、お前はまだ赤ちゃんだからな。封印を解く時期は」

神様はそこで句切ると、手の平から一つの腕輪を出す。腕輪には小さい宝石（銀色）のような物がついていた

「こいつが決めてくれるだろう」

『（これはインテリジェントデバイス………？）』

「ああ。お前の一歳の誕生日にプレゼントとして贈ろう、それまでに名前を考えておいてくれ」

『（………分かった）』

「ではな。この世界で幸あらんことを祈っているぞ」

『（ああ）』

そう言って、神様は消えてい

「あ、そうそう」

かなかった

『（どうしたんだ？）』

「お前の名前を言うのを忘れていたな。 お前の今の名前は五神信慈ごがみしんじという」

『（ごがみしんじ……どう書くんだ？）』

「名字は漢数字の五に創造神の神、名前は信仰の信に慈しむだ」

『（五神信慈ね。 了解した）』

「ああ。 それではな」

そう言って神様は今度こそ、天界へ戻って行った

こうして、俺の新たな人生が開始されたのである……………

第二話 「転生、そして……」（後書き）

雪

「作者の光闇雪です」

「主人公その一、
です」

信慈

「主人公その二、五神信慈だ」

雪

「
はまだ出てないので伏字です」

「まだかなあ」

信慈

「さあ？」

雪

「では、感謝コーナーからです」

「マーボーさん、ヒョウガさん、感想ありがとうございます」

信慈

「ありがとうございます」

雪

「では、座談会を開始します」

& 信慈

「「うん（ああ）」」

雪

「ここで信慈の設定をば……………」

名前：五神信慈

容姿：

白髪のポニーテールでつり目のイケメン。バリアジェケットは赤い軍服

性格：お人好し、悪戯好き

能力：

ロー・アイアス
織天覆う七つの円環
ルネ・アイヴァー
矛を受け止めし堅き盾
ブラック・トータス
万年の霊甲・玄武

魔力量：SSS

雪

「こんな感じです」

「へえ、信慈君凄いね」

信慈

「ああ、そうだな……ところで、これはいつの話だ？」

雪

「九歳の時ですね」

信慈

「ふん。で、原作開始はいつになるんだ？」

雪

「えっと、しばらく原作前の話を書いてから原作に入って行きたい
と思っています」

信慈

「そうなのか……？」

雪

「はい　では、この辺で座談会を終わりたいと思います。この
小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

「ご感想・ご質問等あれば送ってなの」

信慈

「よろしく頼む」

第三話 「誕生日、そして……」 (前書き)

雪

「第三話、更新しました」

信慈

「では本編でまた会おう」

「いやあ、ウチのはやてと稔みのるんこの信慈君が同じ日に生まれるとはな」

「すごい偶然だな」

というわけだ……それに、俺の父さんとはやての父さんがハトコで、家が近い（三軒隣り）ということもあり、一緒に祝うことにしたらしい。それにしても、子どものフリは疲れるなあ

【信慈の精神年齢は二十歳です】

「しんじい、あ〜ん」

「あつ……あ〜ん／／／／」

「あら、良かったわね、信慈」

「あらあら、二人とも仲が良いやん」

は、はずい……！！ はやてが俺にあ〜んをしてくるもんだから、母さん達はやし立てているじゃないか……

「……おい、護まも。はやてちゃんは信慈の嫁にするぞ……」

「ぬかせ。 信慈君はこちらに婿入りするんや……………」

父さん達は父さん達で、俺とはやての結婚話をしているし……………
・というか、まだ早いよ……………

それから、五時間ぐらい経ってはやては父親 護おじさんに背負
われて帰っていった

「さて、お風呂に入って寝るかな……………」

「はい、用意しますね」

「よし、信慈、父さんと一緒に入るか？」

「うん」

「ふふ」

そして、俺は父さんと一緒に風呂に入り、布団に潜って眠りにつく。
ああ、今日は何だか楽しかったなあ

「（チュン、チュン）……………ん？ ふはあ……………あれ？」

小鳥のさえずりで目を覚まし、欠伸をしながら起き上がると箱のよ
うなものが枕元に置いてあった

「えつと……………？」

「あつ、起きた？」

「あ、おかあさん……………これはなに？」

「ああ、それはね お父さんとお母さんからのあなたへのプレゼ
ントよ 」

「プレゼント？」

「ええ、開けてみて？」

「うん」

促されるまま、箱を開けてみる。 その中身は……………銀色の
宝石のようなものがついている腕輪だった……………

【一歳児のプレゼントとして腕輪はないだろうという、つつこみはなしの方向でお願いします】

「これはね　こういう風に填めるのよ」

母さんはそう言うと、俺の腕に腕輪を填めてくれた。腕輪は俺の腕にフィットしていてすごく良い……………

「あら、似合うわよ　それじゃ、お母さんは朝食を作ってくるからね。大人しく待っててね」

「うん」

母さんはそう言うとキッチンに向かうため、部屋に出て行った。すると、腕輪が光り出して初老の男性が映し出された

「少年よ……………」

「あ、かみさまだ」

「これを見ているということは、無事、一歳になったのだろう」

「うん」

神様は約束通り、デバイスを送った旨を伝えてくれた。そして、神様が消えると腕輪の光が消え、銀色の宝石のようなものが点滅をしている。あ、そう言えば名前を付けてくれて言ってたっけ……えっと……名前は……

「そうそう　きみのなまえはライト……ベースライトだよ」

「『登録開始……登録完了。これより起動を開始します』……初めまして、旦那様。これからよろしく願います」

「だ、だんなさまって……あの、そのだんなさまはやめてほしいんだけど……」

「いいえ、それはできません」

「え？　そ、そうなの？」

「はい。わたしの口調は仕様でございますので……」

「そ、そうなんだ……まあ、いいや。じゃ、あらためてよろしくね」

「はい、旦那様。よろしく願います」

こうして、俺は一生の相棒であるライトと会っ……はは、

何だか楽しくなりそうだな

【そして、月日が流れて信慈は五歳となりました】

第三話 「誕生日、そして……」（後書き）

雪

「どうも、作者の光闇雪です」

「主人公その一、
です」

信慈

「主人公その二、五神信慈だ」

雪

「マーボー様、感想ありがとうございます」

信慈 &

「「ありがとうございます」」

雪

「……………今回は誕生日会とライトとの出会いです」

信慈

「というか、俺の台詞が全部ひらがなとカタカナだな」

「信慈君、可愛かったの」

信慈

「あほか……………」

雪

「はは（苦笑）では、この辺で後書きを終わりたいと思います」

信慈

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

「ご感想・ご質問などがあったら送ってくださいなの」

雪

「お願いします。次回は、信慈の特訓風景を中心に送りいたします」

&信慈

「「お楽しみに」」

第四話 「稀少技能（レアスキル）、そして……」（前書き）

雪

「第四話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、感想ありがとう」

「では本編をどうぞなの」

第四話 「稀少技能（レアスキル）、そして……」

今日は俺とはやての五歳の誕生日。 毎年恒例になった誕生日パーティーも終わり、皆が寝静まった深夜……

「ライト、結界を頼む」

「かしこまりました」

魔法の特訓をするため、ライトに結界を展開してもらう。 この結界は魔力探査をされないそうだ

「よし。 ライト、セットアップ」

「Standby ready? Set up」

ライトは第1形態の銃（SIG P220）に変形。 俺は赤い軍服に身を包んで庭へと降り立つ。 ちなみに旧日本軍大将の軍服をモデルにしている

【軍服の肩章は桜花が四つ付いています】

「さて、今から魔法の練習ないしは稀少技能^{レアスキル}の確認をするんだが……」

「はい」

「ふう．．．．．初めてだから緊張するなあ．．．．．」

そう、今回が初めての魔法行使なのだ。え、今までの四年間はど
うしてたのかって．．．．．？ それはだな

．．．．．回想．．．．．

「あ、そう言えば．．．．．神様から稀少技能レアスキルの封印解除の時
期についてライトに訊けっていつていたが．．．．．」

「はい、トウム様から承っております。旦那様の稀少技能レアスキルの封
印解除の時期については私の判断に任せていただきます」

「分かった」

あれから二時間が経ち、俺はリビングで積木遊びをしながら、ライ
トと完全秘匿回線で念話をしている

【信慈はこの頃、念話でのみ、本来の口調に戻ってました】

「旦那様はこれから四年間、魔力効率の向上をしていただきます
」

「魔力効率の向上？」

「はい。旦那様の最大魔力量はSSS程あり……………」

「へえ」

SSSっていうとA・S時のはやてがSだったから、これより多い
ってことか……………」

「ですが、このままでは只の魔力タンクにすぎません。その状態
で稀少技能^{レアスキル}やその他の魔法を行使しますと魔力の垂れ流し状態となり、
すぐに魔力枯渇に陥りかねません」

それはそうだな……………俺が魔法使いになつてから、まだ二時
間ちよつとしか経っていない。その状態で稀少技能^{レアスキル}やその他の魔法
を行使するのは自殺行為と言えるかもな……………」

「ん？でも、何で四年間なんだ？」

「それは旦那様の身体の負担を考慮して魔力効率の向上メニュー
を組み上げましたところ、四年という期間となりました」

「なるほど……………」

身体に無理をするといざというときに役に立たないから……………」

・できることからコツコツと始めないと

「で、まずは何をすれば良いんだ・・・・・・・・・・？」

「はい、まず旦那様には」

こうして、俺はライトの教え通りに魔力効率の向上メニューを消化していった

……回想終了……

というわけだ。そのお陰で、今では魔力を限りなく小さくすることができるようになった。普段の俺は普通の人の魔力並に留めることも可能になっている

「よし。ライト、頼む」

「はい・・・・・・・・・・封印解除完了です」

封印解除をするように頼むと、ライトにより封印が解除されて俺の頭の中を稀少技能レアスキルの使用可能という信号シグナルが駆け巡った。よし、これで稀少技能レアスキルを確認することができるぞ。俺の稀少技能レアスキルは全て防御型だしな・・・・・・・・・・どれだけの防御力なのかを知りたかったんだ

「よし。まずは織天覆う七つの円環の確認だな。小手調べに、ライト、アクセルシューター」

「Accel Shooter」

ロー・アイアス 織天覆う七つの円環の確認をするため、アクセルシューターを一つ形成（威力は最低ランク）する。そして、それを制御して少し遠くの方で停止させ、そこから勢いをつけて自分の方へと向かわせる

「……………織天覆う七つの円環」

と同時に織天覆う七つの円環を展開する。すると、光の七枚の花弁とシューターがぶつかって爆発を起こす。

だが、花弁は全てヒビすら入っていなかった。あれ、最低ランクの威力とは言っても、防弾チョッキと同等な防御力の障壁なら破壊できるはずなんだが……………

「ライト、確か魔力0では花弁の一枚一枚が防弾チョッキ並の防御力なんだよな？ シューターは防弾チョッキ同等の防御力の障壁なら破壊できる威力があったはず。だから、一二枚は破壊されると思っていただが……………」

「それはですね。トウム様が仰っていた魔力0というのは、旦那様が魔力枯渇の状態で展開した場合という意味なのです。旦那様

は魔力0だと思っておりますが、先ほどの織天覆う七つの円環には魔力が少なからず通っておりますので、自ずと防御力も高くなっているのです」

「そ、そうか……………」

魔力枯渇でも展開できるって……………。ただ俺の稀少技能は凄いいんだよ……………ま、まあ、良いや……………。どれぐらいの威力に耐えられるのかは今後の課題として、次の稀少技能・矛を受け止めし堅き盾を確認しよう

「えっと、矛を受け止めし堅き盾は確か……………」

「前にのみ展開可能で物理的攻撃を防御できます」

「そういえば、前にのみ展開可能というのは具体的にどういうことなんだ？」

「1点の集中攻撃には有効ですが、多方面からの攻撃には不適という意味です」

「なるほど……………」

A・Sでヴィータがなのはを撃墜した攻撃方法だと障壁で防御した方が良いという事か……………」

「ん？　までよ……ライト、ルネ・アイヴァー矛を受け止めし堅き盾を展開している時に障壁バリアを張ることができるのか？　その逆も」

「ええ、可能です」

「そうか」

それが可能だと使い勝手が良くなるな……

「さて、どうやって確認するか……」

「それは簡単だと思います。私の形態を刀にフォームチェンジすれば」

「あ、そうか。　じゃ、ライト、『刀』にフォームチェンジだ」

「Yes , form change ” SWORD ”」

ライトを銃から刀（肥前忠吉・初代）に変形させ、それを思いっきり上に放り投げる

「……ルネ・アイヴァー矛を受け止めし堅き盾」

と同時に盾を展開する。放り投げられたライトは上空で停止し、刃を下に向けて勢いよく落ちてきて盾とぶつかった

【# # # # # # # # # # # # # # #】

火花を散らしている盾とライトを見ながら

「（うむ、防御力は相当あるな．．．．．）」

と考える……これもどれだけの威力に耐えられるかが今後の課題だな。俺はそう結論付けると少し後方へ下がる。すると、ライトはそのまま地面へ突き刺さった

「ライト、大丈夫か……？」

「はい」

「そうか……よし、最後は万年の霊甲・玄武だな」

「**万年の靈甲・玄武**は一日二回しか使用できませんが、あらゆる攻撃を無効化することができます」

一日二回か・・・今、使用しても良いが・・・さて、
どうするか・・・

「……確認しないといけないしな……使用してみるか……」

「はい」

「よし……じゃ、ブラック・トータス万年の霊甲・玄武」

すると、目の前に巨大な甲羅を模した盾が現れ、それが頭上で回転を始めると霧が噴出された

「どうだ、ライト？」

「はい。ちゃんと上手く魔力が流れております」

「そうか……使ってみると、一日二回が限度というのが良く分かる。魔力の消費が激しいからな……ふう」

「旦那様、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。今日はこの辺にしようか……」

「はい」

ブラック・トータス万年の霊甲・玄武を解いて、さらにバリアジャケットも解いた。かなり魔力が減少してしまった……これは、ここぞというときに味方を助けるために使用する方が効率的だな……

「旦那様、ブラック・トータス万年の霊甲・玄武についての補足情報がございます」

「ん？ 何だ？」

縁側で休んでいると、腕輪に戻ったライトがそう話を切り出した。
補足情報とは何だろう………

「先ほどの霧はあらゆる攻撃を無効化すると共に、自分や味方の傷を治したり、呪いを打ち消したりする効果があります」

「ん？ という事は、闇の書を夜天の魔道書に戻す事も可能なのか？」

「いいえ、不可能でございます。旦那様が仰った闇の書は改悪されたプログラムによる暴走ですから………」

「そうか………はやてを救えると思ったんだがな………」

「期待されることを言ってしまい、申し訳ございません」

「いや、良いよ。これから探せば良いんだからな」

そして、充分に休めたので家へと入ろうとすると

「ライト・・・・・・・・」

「はい。はやて様のお家に二人の魔力反応がありました」

「ああ・・・・・・・・」

二人の魔導師がはやての家に降り立ったことを確認した。恐らく、
いや、絶対に猫姉妹だろう・・・・・・・・

「いよいよか・・・・・・・・」

「そうですね・・・・・・・・」

そう呟くと、ライトに結界を解いてもらい、布団へと潜り込んだ

「（はやては三歳になった頃から足が動かなくなっている・・・・・・
・今日、ようやくグレアム提督のやつが闇の書の居場所を見つけた
みたいだな・・・・・・・・）」

そして、今後のことを考えながら俺は眠りにつく．．．．．絶対
に俺が守ってみせる．．．．．

第四話 「稀少技能（レアスキル）、そして……」（後書き）

雪

「作者の光闇雪です」

「主人公その一、高町 なの」

信慈

「主人公その二、五神信慈だ」

雪

「今回は稀少技能^{レアスキル}の封印解除のお話でした」

「凄い、能力なの！」

信慈

「ああ、俺も驚いているよ……」

「で、信慈君のバリアジェット、初披露だね」

信慈

「ああ」

「でも、何で軍服にしたの？」

信慈

「それは、俺が転生前で陸上自衛隊に所属していたからだ」

「へえ、凄いね」

信慈

「そうか？」

ゆき

「うん」

雪

「では、ここで信慈のデバイス『ベースライト』について説明します」

ベースライト

信慈のインテリジェントデバイスで創造神のトゥムが創りあげたものである

普段は腕輪になっている

第一形態：銃（モデル：SIG P220）

第二形態：刀（モデル：肥前忠吉・初代）

第三形態：？？？

第四形態：？？？

雪

「こんな感じですね」

「へえ、凄いね」

信慈

「いや、創造したらこうなったんだ」

雪

「ははは（苦笑）では、この辺で後書きを終わりにしたいと思います」

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

信慈

「感想・質問等あればどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。次回は信慈とはやてのお話です」

& 信慈

「「お楽しみに」」

第五話 「俺とはやて、そして……」(前書き)

雪

「第五話、更新しました」

信慈

「ヒョウガさん、マーボーさん、感想ありがとう」

「では本編をどうぞなの」

第五話 「俺とはやて、そして……」

稀少技能^{レアスキル}の封印解除を行ってから四カ月が経ち、大分魔法にも慣れてきていた

「ふう……」

朝の魔法の練習を終えて縁側で空を見上げる。これは転生前でもやっていた日課で、空を見ると気持ちが落ち着くからだ

「お疲れ様です、旦那様」

「ああ、ライトもお疲れさん。で、第一形態と第二形態は使いこなせる程度にはなったかな？」

「はい」

この四カ月、P220と初代・忠吉の二つの形態で魔法の練習を行ってきた

「なら、今日の夜からは第三形態と第四形態で魔法の練習をするかな……」

「はい。それがよろしいかと」

「おはようや、信慈君」

「おはよう、はやて」

空を見上げながらライトと念話をしていたら、はやてが声をかけてきた。ん？ 何故、はやてが俺の家にいるかだって？ それは、二カ月前に原作と同じように、おじさん達 はやてのお父さんとお母さんが不慮の事故で亡くなったため、父さんが引き取ったからだ

「今日も空を見上げておるん？」

「ああ。父さん達は？」

「眞紀おばさんは今、キッチンにおるよ。 稔おじさんは、まだ寝とるんとちゃうかな？」

「そうか……じゃ、父さんでも起こしてくるかな」

「はやてちゃん、手伝ってくれないかしら？」

「はい それじゃ信慈君、稔おじさんの方は頼むな」

「へい」

はやては返事をするときッチンへ向かう……やつと笑えるようになったな……おじさん達がなくなつて間もない頃は

物凄く泣いていたからな。俺が微笑むと父さんを起こすべく、二階の寝室へと向かった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（はは、気持ちよく眠ってるよ）」

寝室のドアをそつと開けて中に入ると、気持ちよく眠っている寝坊介の父さんがいた。俺は口元を釣り上げると膨らませた袋を取り出し、父さんの耳に持っていてって

【パン！】

「うわぁあつ！（ガバッ）」

「父さん、おはよう」

「・・・・・・・・信慈、良い加減それで起こすのはやめてくれ・・・・・・・・」

「善処するよ」

「やれやれ・・・・・・・・おはよう」

「うん。おはよう」

父さんは頭をポリポリと掻きながら苦笑し、朝の挨拶をしてベツトから立ち上がり、着替え始めた

「信慈、着替えるから、先に下りといてくれ」

「うん、分かった」

スーツに着替えて下りてきた父さんを加えて、俺達は4人で朝食をとった

今、俺ははやての定期検診のため、海鳴総合病院にいる。はあ？
俺はいらないだろ？ うるさいなあ・・・・・・・・幼稚園は退屈なんだよ・・・・・・・・

「ほな、行ってくるわ。 稔おじさん、信慈君」

「ああ」

「大人しくしてくんだよ。では、石田先生よろしく願いします」

「はい、分かりました。 五神先生」

検診に行くはやてを見送る

五神先生とは父さんの事だ。 父さんは石田先生が言った通り、この病院の外科部長をしているらしい

「さて、父さんも仕事に行くからな。 病院内で騒ぎは起こすなよ？」

「分かってるよお」

「はあ、その笑顔が不安だ……」

そう愚痴りながら父さんは仕事へ行つた……。父さんの白衣姿、初めてみるなあ……。看護師さん達は父さんをゴッドハンドの外科医だつて言うけど……。普段はそう見えないんだよなあ……

「……（さて、はやてを待つてる間、何をしたいようかなあ？）」

「旦那様」

「何だ、ライト？」

何をしようか考えながら廊下を歩いていると急にライトが念話をしてきたので、立ち止まる。もちろん、邪魔にならないように端へ移動するのも忘れない

「魔力反応がありました」

「魔力反応？ あいつらか？」

猫姉妹かと思ってライトに問いかける。ここ最近、俺も猫姉妹に監視をされている。バレたかなと思ったが、ライト曰く、『旦那様に何かを感じただけのようです。まだバレておりません』だそうだ

「いいえ、違います。あの牝猫どものものではありません」

「そ、そうなのか？（牝猫どもって……）」

「はい。残留魔力のみのようですが……この病室です」

「……（じ、じは……）」

ライトが示した病室には『高町士郎』という名札が掛けられていた。俺は驚きつつも、そーっと中に入る。そこには見覚えがある顔が眠っていた

「この人が．．．．．高町士郎さんか．．．．．」

「！ 旦那様、誰かが入ってきます」

「！！」

ライトの言葉に咄嗟にベッドの下へ潜り込む

【カチャ】

「．．．．．父さん．．．．．」

こゝこの声は．．．．．なのはの兄の高町恭也さんか．．．．．

「．．．．．父さん．．．．．俺が必ず．．．．．」

恭也さんはしばらくベッドを見つめて病室を出ていった。その後しばらくベッドの下に隠れていたが、誰も来ないのでベッドの下から出る

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あの方は危うい雰囲気しておりますね・・・・・・・・」

「ああ、そうだな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・旦那様、そろそろ、はやて様の検診が終わる時間でございます」

「・・・・・・・・・・分かった」

再度、士郎さんの顔を見つめると、病室を出てはやてを迎えに戻る

「信慈くーーーーん、今、戻ったでーーーー」

笑顔で車椅子ごと突撃をかますはやて

「（ドン）はいはい、病院内では静かにしようね」

冷静に足元を蹴り止めながら、はやてに注意する

「ぬがあ！ な、何すんねん！ 可愛いあたしがどないなってもええん（ガシ）え？」

当然のごとく怒るはやてに対して、俺は頭を掴み

「（ギシギシ）………だったら叫びながら車椅子ごと突撃をかましてくるのはやめようね はつきり言って俺じゃなかったら轢かれてたよ？ それに『ぬがあ！』なんていう娘が可愛いとは思えないよ」

アイアンクローをかましながら諭すように言う。 たく、避けて壁に激突するよりもまだろ………というか最初、轢かれるかと思っただぞ………

「（ギシギシ）痛い、痛い。 堪忍やー、堪忍ー。 あたしが悪かったから。 アイアンクローはやめてえなあ（泣）」

「分かればよろしい」

そう言って手を放すと、はやては頭を押さえながら涙目で見つめてくる

「い、痛かったわ。 ちょっとは手加減してえなあ」

「はやてが悪い」

「むう」

「さて、母さんが迎えに来るまで探険でもするか」

「うん ほな、しゅっーーーーぱっ」

「はいはい」

夕方に母さんが迎えに来るまで病院内を探険するため、はやての車椅子を押していくのだった

……恭也SIDE……

「ふん、ふん、ふん、ふん」

病院から帰ってすぐに道場へ向かい、一心不乱に木刀を振っていた

【道場には夕日の光が差し込んでおります】

「くそ！（俺は、俺はこんなもんじゃないんだ！　もっと強くならないといけないんだ！！）」

「お兄ちゃん、見て見て」

イライラしながらも木刀を振り続けていると、なのはが何かを持って道場に入ってきた

「お兄ちゃん。今日ね、幼稚園で皆の絵を描いたの（お兄ちゃん、これで喜んでくれるかな？）」

「うるさい！！　ここには来るないつも言っているだろ！！　出ていけ！！（ドン！）」

なのはが差し出した絵を見ず、ドンと木刀を叩きつけて怒鳴ると、なのははビクツとして絵を落としてしまう

「……………」、「ごめんなさい（ダッ）」

「……………」

泣きながらその場を走り去っていく、なのは

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・何、妹に八つ当たりをしてるんだ、俺は・・・・・・・・・・」

その様子に少し冷静になり、なのはが落とした絵を拾い上げる

「!」

その時、扉の向こうから今まで感じたことのない殺気がしたため、木刀を握り締めて振り返ると・・・・・・・・・・そこには、ゆきが立っていた

【ゆきはなのはの双子の妹です】

「ふう・・・・・・・・・・ゆきか・・・・・・・・・・何か用なのか？」

「・・・・・・・・・・」

「ゆき・・・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・・・」

名前を呼ぶが、ゆきはただ黙って俺を見つめている。俺は言いよ
うのない不安を感じて冷や汗を流していく

「・・・・・・・・お姉ちゃんが・・・・・・・・」

「な、なのは？　なのはがど　！？」

「・・・・・・・・お姉ちゃんが泣いてたの・・・・・・・・お兄ちゃんが泣かせた・・・・・・・・」

ゆきはそう呟きながら歩み寄ってくる。俺は後ずさりしようとしたが・・・・・・・・動けなかった・・・・・・・・な、何て殺気だ！？

「お兄ちゃん・・・・・・・・覚悟は良い・・・・・・・・（ニコッ）」

「い、いや、ゆき。　ちょ、ちよっとまっ　」

「問答無用なの・・・・・・・・お姉ちゃんを・・・・・・・・泣かせた罪は重い・・・・・・・・」

俺の言葉を遮り、ゆきは淡々と言葉を発しながら俺の目の前に立つ

「絶対、許さないの・・・・・・・・」

「う、うわあああああああああああつー!!」

.....SIDE　END.....

第五話 「俺とはやて、そして……」(後書き)

雪

「作者の光闇雪です」

「主人公その一、高町ゆきです！ やつと伏字がとれたの」

信慈

「良かったな。俺は主人公その二、五神信慈だ」

雪

「今回は海鳴総合病院でのお話です」

信慈

「士郎さんってこういう時期に入院してたっけ？」

雪

「まあ、そこはごく都合主義で一つ……」

信慈

「はいはい……それにしてもゆき、怖っ！」

ゆき

「お姉ちゃんを泣かせたお兄ちゃんが悪いの……」

信慈

「で、恭也さんに何をしたんだ？」

ゆき

「覚えてな （ガシ）え？」

信慈

「（ギシギシ）お前なあ……………」

ゆき

「痛い、痛い（ギシギシ）」

雪

「まあまあ（苦笑）」

信慈

「はあ（ため息）」

ゆき

「痛かったの〜」

雪

「よしよし、痛かったねえ」

信慈

「で、作者。 実際にゆきは恭也さんに何をしたんだ？」

雪

「それはご想像に任せます」

信慈

「おい！」

雪

「ではこの辺で終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

信慈

「はぁ（ため息）……………感想・ご質問等あればどしどし送
つてくれ」

雪

「お願いします。次回は小学校入学のお話です」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」「

第六話 「聖祥小学校、そして……」 (前書き)

雪

「第六話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、4ch+さん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第六話 「聖祥小学校、そして……」

「はやてちゃん、明日の仕度は大丈夫？」

「大丈夫だよ」

はやてが母さんの問いに笑顔で答える。明日の仕度というのは、私立聖祥大付属小学校の入試の準備だ

「信慈は？」

「大丈夫だよ……ねえ、俺は公立の小学校の方がい（
スパーン）いてえ……な、何するんだ、はやて」

俺が受験しないと云おうと口を開いた時、はやてが頭を叩いてきた……
……というか何所から出てきた、そのハリセン……
？

「ワガママはゆるさへんで」。信慈君はあたしと一緒に入試を受けてもらうんやから」

「いや、ワガママじゃなくてだな……」

「言い訳は見苦しいで」

いや、あの、言い訳ではなく……………はあ……………分かったよ……………

「行けばいいんだろ、行けば……………」

「うん」

「ふふふふ」

母さんは俺とはやてのやり取りを見て微笑んでいる。はあ……………
・今日は魔法の練習を休んで明日の入試に備えて寝るか……………
・

……………ゆきSIDE……………

「入試ってどんな事するの？」

「テストを受けるのよ」

「私たちにできるかな？」

「ああ、大丈夫だ。2人ならな」

私とお姉ちゃんが質問をすると、お父さんとお母さんは大丈夫と言ってくれました

【土郎さんはすっかり元気になり、あの事件を機に仕事を辞めて喫茶・翠屋をやっております】

「なのは、ゆき、お風呂に入ってきたよ。明日は早いんだから、早く寝ないとね」

「「はい」」

美由希お姉ちゃんの言葉に返事をして私とお姉ちゃんはお風呂に入り、その後、ベットにダイブして眠りました。明日は頑張るの！！

……SIDE END……

【入試当日】

「……………が、頑張ってたね、信慈、はやてちゃん」

「はいな」

「……………何で、母さんが緊張してるんだよ……………」

「だ、だって」

「はあ。まあ、良いや。じゃ、いつてくる」

一人緊張している母さんと一旦別れ、試験に向かう

試験中

試験中

試験中

【キン・コーン・カーン・コーン、キン、コーン、カーン、コーン】

試験終了を告げるチャイムが教室内に鳴り響く

「はい、そこまで。鉛筆を置き、問題用紙と解答用紙を回収するまで動かないでね」

「「「「はい「「「「」」」」」

そして、試験官の先生が用紙2枚を回収しにまわり、回収し終わると母さん達を集めて合格発表の日やその後の手続きなどの説明をする。こうして、長い長い入試が終わりを告げた

「信慈、はやてちゃん、どうだった？」

「信慈君に教わった問題がでたから、多分できたと思いますう」

「俺はまあまあだな」

俺とはやては母さんにそう返事をする。 正直、入試問題は簡単で満点を取れたが、点数は合格点ギリギリのところまで解くのをやめた。だつて、満点をとると入学式で新入生代表として辞を読まないといけないんじゃない……そんなめんどくさい事はしたくないんだよ

「ふふ。 二人とも合格できると良いわね」

「うん」

「そうだな」

ま、合格はできるだろうよ……俺はそう思いながら楽しく話をしている母さんとはやての後についていくのだった

……ゆきSIDE……

「お姉ちゃん、どうだった？」

「まあまあかな」

「私もなの」

お母さんと手をつなぎながら、反対側のお姉ちゃんと話をしていました。問題は難しかったけど、がんばって解きました

「ふふ。二人とも合格できると良いわね」

「うん」

こうして、私たちは寄り道をしながらゆっくりと楽しく家に帰っていきました

【数週間後、合格者の発表がされ、高町姉妹、八神はやて、五神信慈はみごと合格し、入学する運びとなりました】

……SIDE END……

【入学式当日】

「くはやて、眠いから寝てるわ」

「くえ？ ちょっと信慈君？ って、もう寝とるし……………」

校長とかPTA会長とかの話は長いと相場が決まってるので寝ることにした。よし……………作者、後は任せるわ！

【あ、ちよつと！？ 寝てしまいましたね……………（苦笑）

では、信慈が寝てるので、ゆきSIDEでお送りいたします】

……ゆきSIDE……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・（すうすう）」

今日は待ちに待った入学式です・・・・・・・・でも、お姉ちゃんと違うクラスになっちゃったのは少し残念なの。でね、今は校長先生のお話の途中なんだけど、後ろの男の子が、お話が始まった頃からずっと寝てるの。なんか不真面目な人なのかな？で、でも、気にしちゃダメだよな・・・・・・・・ちゃんと友達になれるかなあ？

「ええー、でるからして・・・・・・・・」

それにしても、校長先生のお話、長い・・・・・・・・

……SIDE END……

「信慈君、信慈君」

「ん？終わったのか？」

「うん、閉会の辞っていうのをやっとなる」

「そうか・・・・・・・・じゃ、終わりだな」

はやてに起こされると、丁度入学式が終わるところだった。えっと、入学式の次は教室にいつて自己紹介だったわけ・・・・・・・・えっと、はやてと俺は同じクラスだったけ

入学式が終わり、俺たち新入生は体育館を後にしてそれぞれのクラスへ向かった

【はやてのこともあり、クラスは一階にあります。　ちなみなのは達のクラスも一階です】

「皆さん、今日は入学おめでとうございます　私はこのクラスを受け持つことになった担任の五神真紀です　今年、異動してきたので皆さんと同じ一年生です。　一年間、よろしくね　」

「・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・」

で、クラスで待っていると俺の母さんが教卓の前に立ち、クラスメイトと保護者の方々に挨拶をした。　俺とはやては鳩が豆鉄砲を食らったような表情をしてしまう

母さん何やってんの・・・・・・・・いや、母さんが小学校の先生をしているのは知ってたけど、まさか聖祥で働くことになってたとは・

・・・しかも、俺のクラスの担任って・・・

「では、最初は自己紹介をしてきましようね　では窓側の君からお願いね」

「はい！　ぼ、僕は　」

そして、自己紹介が始まった。おっと、呆けてる場合じゃないな・
・・・ここは、しっかりボケなければ

【何ですか？】

「　です。　よろしくお願いします」

ボケを考えていたら俺の前の子の自己紹介が終わった。　いよいよ、俺の番だな

「はい。　次の人」

「はい。　モンキー・D　（スパーン）うおお！？」

「信慈君、ちゃんと自己紹介せな、あかんで？」

「・・・・・・・・五神信慈です。　よろしく」

「「「「「」」」」」」

ボケようとしたらはやてにつつまれたので、本当の名前を言う。
というか、ハリセンは痛いぞ……

「……は、はい。では、次の人」

「あ、はい。わたしは」

我に返った母さんが次の人の自己紹介を促す。そして、再開した自己紹介は続き、ここにいるはずのないのは似の女の子の番になった

「はい。えっと、次は高町さんね」

「あ、はい！ 私は高町ゆきって言います。よろしくね」

「「「「「」」」」」」(ポツ)「「「「「」

はい、今の笑顔で大半の男子が落ちたな………というか………

「ライト………」

「はい、恐らく旦那様の記憶になる高町なのは様の双子だと思います」

「そうなのか？」

「はい。ここは旦那様の前の世界での“魔法少女リリカルなのは”の世界ではありますが、全て同じという事ではありませんので」

「それもそうか。ここに俺がいる時点で違ってもんな」

「はい」

ライトと会話をしている間、どんどん自己紹介が進んで最後にはやての番になった

「最後は八神さん。お願いね」

「あ、はい。八神はやて言います 皆さん、よろしゅうに」

「「「「「.....」」」」」(ポツ)「「「「「」

はい、これで俺以外のクラスの男子が2人に落ちたな.....

こうして、俺の二度目の小学校生活が始まったのだった

……ゆきSIDE……

「ゆきちゃん、クラスはどうだった？」

「うん。楽しかったの。」

「そうなの？」

「うん。」

自己紹介があつて、これからのことを先生に説明してもらつて私たちは下校しました。それで今、クラスであつたことをお姉ちゃんとお話してるの。五神信慈君のこととか、八神はやてちゃんのこととか色々ね

こうして、他愛も無い話をしながら私たちは家に帰っていききました

……SIDE END……

第六話 「聖祥小学校、そして……」(後書き)

雪

「作者の光闇雪です」

ゆき

「主人公その一、高町ゆきです」

信慈

「俺は主人公その二、五神信慈だ」

雪

「今回は聖祥大付属小学校入学のお話です」

信慈

「土郎さん、元気になって良かったな」

ゆき

「うん」

信慈

「それにしても、はやてはどっからハリセンを？」

雪

「さあ？」

信慈

「まあ、良いや。で、作者、はやても入学させたのかよ」

雪

「それはですね。 はやての両親はいませんが、信慈の両親が健在なので、はやても入学させていただきました」

信慈

「そうかい」

ゆき

「お姉ちゃんとクラスが違ったの」

雪

「ま、まあ、姉妹ですし……」

信慈

「そうだな」

ゆき

「うう。 残念なの」

信慈

「隣のクラスなんだからスグに会いにいけるだろ？」

ゆき

「うん、そうだね」

雪

「ゆきが元気になったところで、後書きを終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

信慈

「感想・質問等あればどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。次回はアリサ・すずかが登場する話です」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」

第七話 「ケンカ、そして……」 (前書き)

雪

「第七話、更新しました」

信慈

「ヒョウガさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第七話 「ケンカ、そして……………」

入学式から数カ月、ゆきと友達（強制的）になり、はやてとゆきと一緒に弁当を食うことになってしまっていた

「……………（すうすう）」

「なあ、信慈君。　って、寝とるし（苦笑）」

いつもの通り、はやて達と一緒に弁当を食べた俺は、昼寝をしていた

【昼食の時、大半の男性の殺気が信慈に注がれていましたが、信慈はそれを受け流していました】

ちなみに、ゆきはなのはに会いに隣のクラスにいつて、ここにはいない

【パン!!】

「ん？　何の音だ？」

「……………隣のクラスからやね」

「……………行ってみるか」

「あたしも行くわ」

隣のクラスから何かを叩く音がしたため、俺は起きだして見に行くことにした。もちろん、はやての車椅子を押してな……………

「痛い？ でも大事なものを取られちゃった人の心はもっともつと痛いんだよ？」

で、廊下に出た時に同じ声がハモって聞こえてきた……………この声はゆきとなのはか……………？ そう思い、はやてと共に教室の中を覗き込んで見ると、金髪の女子（アリサ）と栗色の髪の女子達（なのはとゆき）の三人が取っ組み合いをしていた。そして、少し離れたところでは紫色の髪の女子（すずか）がオロオロしていた……………どういう状況だ、これは……………？

「信慈君、はよ助けな……………」

「うん。でも、もう少し様子を見よう……………」

「そ、そうやね……………」

はやてとヒソヒソしながらケンカを見ていると、オロオロしていたすずかと目が合ってしまう。すると、すずかがこちらに近づいてきて

「あ、あの！ あの三人を止めて下さい！！ お願いします！！」

という感じで俺達に頼んできた……………うん……………

「信慈君……………？」

「……………止めても良いが……………で、どうしてこうなったんだ？」

「「え？」」

首を傾げてこちらを見てくる、すずかとはやて

「ああなつた原因を教えて欲しい。 そうしないと行動の起こしよ
うがない……………」

「ああ、それもそうやね。 で、どうしたんや？」

「えつと……………私の力チューシャをバニングスさんが、取り
上げて返してくれなくて……………わ、私が泣いているのを見て
いた高町さん達が……………」

すずかはそう言うのと黙ってしまふ……………うむ、今のすずかは
気が弱いタイプなんだな……………ということは……………

「えっと、名前は何て言うんや?」

「あ、はい。 月村すずかです……………」

「すずかちゃんやね……………すずかちゃん、自分でちゃんと『嫌っ!』とか『止めてっ!』って言った?」

「え?」

はやての質問に疑問の声を上げるすずか……………やっぱりな……………

「言うてへんの?」

「あっ……………うん」

「なら、はっきりと自分の意志を言わな。 今後と同じ様なことになっても困るやろ?」

「うん。 で、でも……………」

はやてがそう言うが、すずかは躊躇している……………はあ……………正直関わり合いになりたくないが、ここは仕方がない……………

「分かった、分かった。月村が言っただめだったら俺が止めるから、ダメ元で言っただけな」

「……………わ、分かりました」

俺が頭を掻きながらそう言っつと、すずかは三人のほうに歩いて行って

「やめてー！ー！ー！ー！」

と大きな声で叫ぶと、なのはとゆきとアリサは驚いたような表情をして動きを止める

「……………アレなら大丈夫そうだな」

「そうやね……………」

自分達の出番はもうないと判断し、俺たちは教室を後にした。その後、戻ってきたゆきが物凄く良い笑顔だったため、大半の男子が赤くしたのは言うまでもない

ん？ 俺か？ 俺は次の授業をいかに、母さんにバレずに寝られるかを考えていたよ

【キーン・コーン・カーン・コーン、キーン・コーン・カーン・コーン】

「はい、皆さん。授業を始めますよ」

そして、チャイムが鳴ったと同時に母さんが入ってきて授業が始まった。俺はいつも通り、寝始めたけどな……………

【はやては最初の頃、信慈を起こしていましたが、今は諦めて授業に集中しています】

授業後、帰りのHRを終えて俺たちが帰りの仕度をしていた時、クラス男子達がざわつき始めたので、何事かそちらを向くと、なのは達お馴染みの三人組が教室に入ってきていた。ふむ、仲良かったみたいだな……………

「あ、お姉ちゃんとすずかちゃんとアリサちゃんだ」

ゆきがなのは達の方に向けより、二、三言話した後、俺とはやてのところに来た……………何か用なのか……………？

「えっと……………五神君と八神さんだよね？」

「うん、そうや」

「……………（コクリ）」

「良かった　あ、あの、昼休みはありがとう！」

「すずかはそう言うのと、深々と礼をしてきた

「どういたしまして　せやけど、あたし達はすずかちゃんの相談に乗っただけや。　解決したんはすずかちゃん自身やん」

「ううん。　そ、そんなこと無い。　八神さ　」

「はやてでええよ　あたしも名前と呼んどるしな。　信慈君も名前でええよな？」

俺はどう呼ばれようと構わないので頷いたけど……勝手に決めるなよな、はやて……

「う、うん。　私がちゃんと止められたのは、はやてちゃんと信慈君に後押しされたからだもん。　だから、ありがとう」

「そういうことなら、素直に受け取っておくわ　でな、これから思った事ははっきりと言わなあかんで？　言葉にしないと相手に伝わんからな」

まあ、言葉では相手に伝わらないこともあるが……そんな不粹な言葉は今と言わないでおこう

「うん！ 分かった！！」

はやての忠告に力強く頷いて笑顔になる、すずか

「うん ほな、あたし達はこれで」

「あ、一緒に帰らない？」

「え？」

「だ、ダメ……かな……？」

潤んだ目＋上目遣いでこちらを向くすずか。 とうか何故、俺の方に顔を向ける……。 はあ、そのせいで周りの男子どもの殺気が膨れ上がったよ……

【何せ、聖祥小学校一年生の五大美少女ですから】

「……………（チラッ）」

「ははは、せやな。一緒に帰るか（苦笑）」

「ありがとう！ あ、なのはちゃんとゆきちゃん、アリサちゃんも一緒なんだ」

困つてはやての方を向くと、はやては苦笑しながら同意をする。すると、すずかは満面の笑みになり、ゆき達も同伴するという旨を伝えてきた

「こんにちは、アリサ・バニングスよ」

「私は高町なのはです。ゆきちゃんから二人の事は聞かされてました。よろしくね」

「アリサちゃんになのはちゃんやね あたしは八神はやて言います。そして、こっちが」

「Bonjour (こんにちは)」

「え？」

「Mon nom est appelé? Gogami Shi
nji. Connaisance (私の名前は五神信慈と言
います。お見知りおきを)」

[illegible]

フランス語で自己紹介をしたら、四人は呆氣にとられる

「.....(ニヤニヤ)」

「はぁ．．．．．（スチャ）」

【スパーン】

内心、ニヤニヤしていたらはやてが、ため息を吐いてハリセンで頭をどついてきた

「いてえ．．．．．ちったあ、手加減しろよな、はやて．．．．．」

「『『『あつ、日本語．．．．．』』』」

「何をやってんのや、信慈君．．．．．（怒）」

「はぁ．．．．．ちよつとしたお茶目だろうが．．．．．改めて自己紹介をしよう。俺は五神信慈だ」

「『『『はぁ．．．．．』』』」

改めて自己紹介をするが、四人からは呆氣に取られているのか、生返事しか返ってこなかった。その後、何とか立ち直った四人と握手をして一緒に学校を出ることにした

「信慈君、あれは何語なの？」　　「すずか

ん？　ああ、あれはフランス語だ」

「へ、へえゝ。す、凄いじゃない」 アリサ

「ん？ そうか？」

「「凄いの！！」」

「はあ……で、信慈君は何であそこでフランス語で自己紹介したんや？」

「え？ あそこだからだろ？ それにしても、あの呆気にとられた顔は傑作だった くくく……」

俺はあのと時の四人の顔を思い出して笑いをこらえる

「信慈君……？（怒）」

「おっと、悪い悪い」

「たく、信慈は……で、話せるのはフランス語だけよね？」

アリサは真剣な目でこちらを見て訊ねてくる

「ん？ 有名所で言うと、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語、ロシア語だな」

【信慈は国連に加盟している殆どの国の言葉を喋ることができます】

「負けたわ……でも！」

アリサは膝をついて落ち込んだ素振りをするが、すぐに立ち上がって

「今に見てなさい！ 必ず勝ってみせるわ！」

「お、おう」

と剣幕に言い寄ってきたため、俺はたじろいでしまう

「はは、アリサちゃんと信慈君はライバルやね」

「『『そうだね』『』」

そんな俺を見て、はやて達は笑い合っている。 何でこうなった？

【あなたが悪いんですよ】

それから、俺とはやては交差点でなのは達と別れて帰路についた。

今度のお休みに翠屋にいく約束をされたのはいただけないが、はやてが楽しそうだし……ま、いっかと納得する……

それに、土郎さんと恭也さんに会いたかったしな……。お
っと、ここから気をつけないと人にぶつちまうな

「信慈君、出発進行や」

「おう！ー！」

はやての合図の下、人垣を上手く避けながら走っていく

【危ないので良い子は真似しないでくださいね】

……ゆきSIDE……

「でね、信慈君が凄いの」 ゆき

「そうなの！！ 色々な国の言葉を話せるみたいなの！！」 なのは

「ほう……。それは凄いな」

「そうね」

「ふむ……。…」

「恭ちゃん、どうしたの？」

「いや、何でもない」

夜、私とお姉ちゃんとは今日の出来事をお父さん達に話していました。
あ、そうだ。お父さん達に言わないといけない事があったんだ

「それでね、お母さん」 ゆき

「なに？」

「今度のお休みの日なんだけどね」 なのは

「うんうん」

「皆をね。翠屋に招待したの」 ゆき

「あら、そうなの？」

「「うん。大丈夫だった？」」

「ふふ、お父さん？」

「ああ。なのはとゆきのお友達だからな、張り切ってお持て成し
をしようじゃないか なあ、お母さん」

「ええ」

「「ありがとうー!!」」

「「どういたしまして」」

「「それでね。今日は」」

私たちはお礼を言うと、また今日の出来事を話し始めました。今
度のお休みが楽しみです

……SIDE END……

第七話 「ケンカ、そして……」（後書き）

雪

「作者の光闇雪です」

ゆき

「主人公その一、高町ゆきな」

信慈

「主人公その二、五神信慈だ」

雪

「今回はずかとアリサが登場しました」

信慈

「そうだな」

ゆき

「ケンカしちゃったけど、仲良くなれたから良いの」

信慈

「しかし、あの時の四人の顔は、ククク……」

ゆき

「信慈君、酷いの！」

信慈

「悪い、悪い」

ゆき

「それにしても、何で色々な国の言葉を話せるの？」

信慈

「ああ、それはだな。 転生前の趣味が色々な国の言葉を覚えるだつたからな」

ゆき

「へえ」

雪

「では、この辺で後書きを終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます」

信慈

「感想や質問・誤字脱字報告などあれば送ってくれ」

雪

「よろしくお願いします。 次回は士郎さんと恭也さんとの出会いです」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」

第八話 「翠屋へGO、そして……」 (前書き)

雪

「第八話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第八話 「翠屋へGO、そして……………」

「信慈君、頑張つて」

「信慈君、頑張つてね」

「信慈、しっかりやりなさいよ！」

「信慈君、しっかりやらんとお仕置きやで！」

「……………どうしてこうなった？」

【時間は少し遡ります】

はやてとなのは達が仲良くなって最初の休みの日、俺とはやては待ち合わせ場所の交差点に向かっていた。今日はなのはとゆきの招待で翠屋でお菓子を食えるということになっているからだ

「今日は楽しみやね」

「ああ、そうだな（士郎さんと恭也さんにはあれ以来、会っていないからな。どうなったのか、気になってはいたんだ）」

はやての言葉に頷きながら、あの時の士郎さんと恭也さんの様子を感じ出していた。あの時の恭也さんの顔が何だか危うい感じがしたのだ。ただ、なのはやゆきを見る限り、無事のようにだから安心

しているけどな

「あ、アリサちゃんとすずかちゃんや。　アリサちゃん、すずかちゃん」

「おっす」

「おはよう、はやてちゃん、信慈君」

「信慈、遅いわよ!」

アリサの言葉にカチンときてしまつ。　まだ、五分前じゃねえか・
・
・

「It is still before five minutes of wait time (まだ、待ち合わせ時間の五分前だろ)」

「・・・I keep us waiting, and are there the words!?(・・・私たちを待たせといて、その言い草はないんじゃないの?)」

「Did too many you come early? (お前らが早く来すぎただけだろ?)」

「Breathe it why!?(なんですって!?)」

「くね、ねえ、はやてちゃん・・・・・・・・・・」

「く何や？」

「くあの二人、外国の人にしか見えないよね・・・・・・・・・・」

「くそ、そうやな・・・・・・・・・・」

アリサと英語で口喧嘩している中、すずかとはやての方を向くと、二人は何かを喋っているところだった

おつと、ここで俺の容姿を伝えておこう。え、前に教わったから良い？ まあ、良いじゃないか 俺の髪は生まれつき、白い・・・・・・・・母さん曰く、母さんのお祖母ちゃん 俺のひいお祖母ちゃんがロシア人だとかで髪が生まれつき白かったらしい。つまり、俺の髪は隔世遺伝だな・・・・・・・・・・で、俺はその髪をポニーテールにしているというわけだ

【信慈の見た目は外国人の小学生です】

「と、とにかく信慈！ 遅れた罰として、私たちの荷物を持つこと！」

「い、ごめんね（苦笑）」

「はは、信慈君災難やな（苦笑）」

俺に鞆を押しつけたアリサはズンズンと先に行ってしまう。そして、すずかとはやても同情しながらも、俺に鞆を持たせてアリサの後を追っていった

「理不尽だ………」

「信慈、置いてくわよ!」

「へいへい」

苦笑いしながらも鞆を持ってアリサ達の後をついていった。それから、他愛もない話をしながら歩くこと数分、喫茶・翠屋へと到着する

【カランカラン】

「いらつしゃいませ」

翠屋の中に入るとゆきとなのはが出迎えてくれた。すると、店の奥から土郎さんとなのはとゆきと同じ栗色の髪をした女性（桃子さん）が顔を出す

「いらつしゃい」

「よくきたな。今日は私の奢りだから何でも頼んでくれ」

「きよ、今日はお招き、い、いただきまして、あ、ありがとうございます」

「ふふ、そんなに緊張しなくても良いのよ？ えっと、あなたがアリサちゃんかしら？」

「あ、はい。 アリサ・バニングスと言います」

「ふふ、よろしくね で、そちらが」

「月村すずかです」

「八神はやて言います」

「五神信慈です」

「ふふ、よろしくね じゃ、席について何が食べたいのか言っ
てね」

「「「はい」」」

桃子さんはそう言つと俺達を席に案内する。そして、俺らが席に着くと

「「「ようこそ！ 喫茶・翠屋へ！」」」

なのはとゆきが机に近づき深々と頭を下げてきた

「何を食べる？」

「お母さんのお菓子はどれも美味しいよ」

「えっと、そうね」

「どれにしようかな」

「信慈君、どれも美味しそうだな」

「あ、ああ、そうだな・・・・・・・・」

その後、なのは達も席につき、メニューを見てどれを頼もうか悩んでいる。でだ、俺は何故か窓際にはやて、店側にゆきに挟まれた感じで座っている。うゝん、超居心地が悪いぞ・・・・・・・・で、でも仕方がないから我慢をしよう、うん

「ところで信慈」

お菓子を頼んだ直後、アリサが話しかけてきた

「何だ？」

「あんだ、入試試験で手を抜いてたわね？」

「ん？ 何の事だ？」

「しらばつくてんじやないわよ。昨日、職員室で五神先生と神田先生が話をしていたのを聞いたのよ」

「おいおい、立ち聞きとはお嬢様ともあろうお方が何をしてらっしゃるのですか？ 爺めはするように育ては覚えはないですよ」

「うるさわね！ ただ、聞こえてきただけよ！ って、だれが執事か！」

「まあまあ、アリサちゃん。で、五神先生と神田先生は何を言っていたの？」

チツ………ゆきの奴、余計な事を………話を逸らせなかったじゃないか………」

「………神田先生曰く、入試で合格点ギリギリだった信慈が最初の試験で満点をとるなんて凄いと云ってたのよ」

「ま、満点………？」

「ははは（苦笑）」

「で、それがどうしたんだ？」

最初の試験で張り切るんじゃないかな……のりくりに
で過ごそうと思ってたのに……

「『どうしたんだ？』じゃないわよ！　どうして入試試験の時、手
を抜いたのって聞いているのよ！」

「……それはだな」

「……それは？」

「実は……」

「……実は？（ごくり）」

「新人生代表の辞を読むのがめんどくさかったからだ」

「……は？」

「いやゝ。入試の試験で満点を取るとき……新人生代表
になっちゃうだろ？　そんなのめんどくさいじゃないかゝ」

「……ははは（信慈君、らしい）」

「……な、なな」

アリスが信じられないようなものを見た表情をする。一体、どう
したんだ？

「こ、こんな奴に……学年トップの座を奪われたというの？」

「あ、アリサちゃん？　　すずか

「………信慈！」

「ん？」

「つ、次の試験の時は見てなさい！　絶対、勝ってやるんだから！」

「はいはい、頑張つてねえ」

「ムキィ！　絶対負けないわよ！」

アリサの反応が面白くなってついつい、からかってしまう。その様子を見ていた四人は……『アリサちゃん、もう負けてる（負けてるやん）』と呟いて苦笑していた

「はは、何やら楽しそうな事を言ってるね」

「あ、お父さん　　なのは

「ご注文の品ができたから、運んできたよ」

「「「ありがとうございます」」」

「どうも」

「ん？」

「お父さん？」 ゆき

「信慈君と言ったね……………」

「あ、はい」

注文のお菓子を持ってきた土郎さんが俺の顔を見るなり、思案顔になっってしまう。一体、どうしたんだろ……………？

「……………君、武道とかしてるかい？」

「あ、はい。剣道をやってますが……………」

「やっぱりね」

「すごい！ お父さん、何で分かるの！？」

「ははは。なのは、それはだな。信慈君の身のこなしが、武道をしている者特有だったんだ」

「へえ、信慈君凄いの！」 ゆき

「ははは、凄いやろ！」

「何で、はやてが威張るんだ？」

「何となく？」

「そ、そうなのか（苦笑）」

はやての言葉に苦笑しながら土郎さんの方を向いて

「で、それがどうかしたんですか？」

「いや、ちょっと手合わせでもお願いしようかなと思ってな」

「さ、さすがにそれは無理かと・・・・・・・・・・（というかやりたくない！）」

「そうだよ、お父さん。 信慈君はまだ私たちと同じ一年生だよ？」
ゆき

「むむ、それは残念だ・・・・・・・・・・そうだ。 この後、何か用事でもあるかい？」

「え？ いいえ、何もないですけど・・・・・・・・・・」

「なら、ウチの道場に見学にこないかい？」

「道場ですか？」

「ああ」

俺は腕を組んであれこれと考えていく。ここには恭也さんがいないから恐らく、家の方にいると思うんだけど……だから、恭也さんに会いには行きたい……。でも、行くと絶対手合わせをしないといけなくなると思う……。どうしようかな……

「私も見学に行っても良いですか？」

「あ。あたしも行ってもええ？」

「私も！」

「「私たちも！」」

「ああ、良いよ」

「じゃ、皆で見学に行きましょう！！」

「「「「おおーっ」」」」

で、俺が悩んでいるうちに周りで勝手に行くことを決めてしまっていた。というか、俺の意見は無視かよ……

【信慈はお菓子を食べ終わった後、はやて達と士郎の案内の下、高町家の道場へ行く羽目になってしまいました。はてさて、信慈は

【・・・・・・・・・・・・・・・・】

第八話 「翠屋へGO、そして……」（後書き）

雪「雪と」 ゆき「ゆきと」 信慈「信慈の」

雪&ゆき&信慈

「」「座談会」「」

雪

「今回からこついうタイトルコールをしていきます」

ゆき

「わくわくなの」

信慈

「はぁ………何で俺まで」

雪

「良いじゃないですか」

ゆき

「あ、そうだ。 作者さん」

雪

「？ 何ですか？」

ゆき

「聞きたいことがあるんだけど………私、主人公その一だよ
ね？」

雪

「そうですね」

ゆき

「何で信慈君メインが多いの？」

信慈

「そう言えばそうだな。で、どういうことなんだ？」

雪

「……………気づいてしまいましたか……………それはですね」

ゆき

「それは？」

雪

「実は……………」

信慈

「実は？」

雪

「信慈の方が書き易（ガシ）え？」

ゆき

「ちょっとお話ししようなの」

雪

「え？　ちょ、ちょっとゆき！？　あれ」

信慈

「行っちゃったよ……ま、良いか。では、この辺で座談会を終わりにする。この小説を読んでもくれる人に感謝を。また、感想・質問等あったらどしどし送ってくれ」

雪

「じ、次回はvs御神をお送りいたします」

ゆき

「さっさと来るの……」

雪

「いやあああああつ!？」

信慈

「ははは（苦笑）」

第九話 「手合わせ、そして……」 (前書き)

ゆき

「第九話、更新なの」

信慈

「ヒヨウガさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

雪

「……………」 (気絶中)

第九話 「手合わせ、そして……」

「「「ごちそうさまでした」「」」

「「やっぱり、お母さんのお菓子は美味かったの」「」

桃子さんのお菓子を食べ終えたなのは達は大満足で手を合わせている。俺はというと、この後の道場見学の事を考えていた

「ライト、どうするか……」

「私には分かりかねますが、見学だけなら大丈夫だと思われませんか？」

「そ、そうなんだけどな……（苦笑）」

絶対、士郎さんは俺の腕前を見たいに違いない。だから、大人しく見学だけしよう……。うん、そうしよう……

「さて、皆、準備は良いかい？」

「「「「うん（はい）（はいな）」「」」」

「へい」

「では、いこうか」

準備を整えて俺達は土郎さんの案内の下、高町家の道場へと向かった

【ガラガラ】

「さあ、入ってくれ！」

「「「お邪魔します」「」「」

「「ただいま」「」

道場に到着した俺達は中へ入る。中では恭也さんと一人の女性（美由希さん）が稽古している所だった

「あれ、父さん？」

「お店の方は良いの？」

「ああ、今日は貸し切りだったんでな。今日は店仕舞いだよ」

「ふうん」

「ん？ 後ろの子達は？」

恭也さんが士郎さんの後ろに隠れていた俺達を見て訊ねる

「なのはとゆきちゃんのお友達だよ」 なのは

「そうか。俺は」

「私は高町美由希だよ で、こっちが恭ちゃん」

「こら、美由希（苦笑） ふう……改めて、俺は高町恭也だ」

恭也さんが挨拶しようとする横から美由希さんが割って入って挨拶してくる。 恭也さんはそれを苦笑しながら窘めると自分から挨拶をした

「私はアリサ・バニングスです」

「わ、私は月村すずかと言います」

「あたしは八神はやて言います」

「俺は五神信慈です」

俺たちも恭也さんに挨拶をすると

「貴様が信慈か……………」

「え？」

恭也さんが俺を睨みつけてきた。俺、何かした？

「こら、恭也。そんな風に睨むもんじゃないぞ」

「……………すまん」

「ごめんね、信慈君」

「い、いえ」

恭也さんは士郎さんの言葉で睨むのを止めて謝り、何故か美由希さんも謝ってきたので俺はそう返すしかできなかった。その後、恭也さんと美由希さんは士郎さんに稽古をつけて貰うということなの

で俺達は隅っこの方で座って見学することにした

「くなあ。 ゆき>」

「<何、信慈君?>」

「<俺、恭也さんに何かしたか?>」

「<うゝん、分からないの。 私は信慈君とか、はやてちゃんとか、友達の話をお姉ちゃんと一緒に話してるだけだよ>」

「<そうか・・・・・・・・>」

稽古を見学しながらゆきに小声で訊ねるとゆきは首を傾げながらも
そう答える。 うゝん、それだけでは睨まれる理由が分からないぞ。
それにしても、眠いな・・・・・・・・。 はあ、寝ちやうか・・・・・・・・。
うん、寝よう

.....ゆきSIDE.....

「ふっ、ふっ、ふっ」

「」「」「」・・・・・・・・・・・・・・・・「」「」「」

「・・・・・・・・・・・・・・（すうすう）」

稽古を黙って見守る中、私の隣にいる信慈君が寝始めたの。 退屈
なのかな？

「くなあ、信慈君……つて、寝とる！？>」 はやて

「<ど、どういう神経をしてんのよ…….>」 アリサ

「「くにはは（苦笑）>」「」 なのは&ゆき

「<でも、信慈君らしいよね>」 すずか

「「「くそうだね（ね）（やね）>」「」「」

「危ない！」

「「「「え？」「」「」

私たちが信慈君の方を向いていた時、お父さんの声がしたのでそっ
ちを見ると、美由希お姉ちゃんの木刀がこちらに向かってきてるの
が見えました

「「「「きゃあああああっ！？」「」「」

「皆！！」

直撃と思った私たちは目を瞑ってしまいました。 でも、バシとい

う音がして目を開けると、そこには木刀を掴んでいる信慈君がいました

「「「「「え?」「「「「

「「「「「「「「「「「

その状況に私たちは動けずにいました。　し、信慈君・・・・・・?

「・・・・・・（すうすう）」

「「「「「（ドタッ）」「「「「「「

木刀を掴んでいた信慈君から寝息が聞こえてきたので、私たちはズッコケてしまいました。　ね、寝惚けてただけなの・・・・・・?

「ははは（苦笑）　皆、大丈夫かい?」

「う、ごめんね（汗）」

「「「あ、はい。　大丈夫です」「」

「「だ、大丈夫なの」「

「・・・・・・ん?　どうかしたのか?」

お父さん達が近寄ってきて皆に怪我がないか訊ねたので、私たちは大丈夫という返事をしました。すると、眠っていた信慈君が起きだしてきたの

.....
S
I
D
E
.....
E
N
D
.....

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

┐
?
└

俺が起きると、皆が俺の方を見てきたのでどうしたのか分からず、首を傾げてしまう

「信慈・・・」

「あ、はい」

「俺と手合わせして欲しい」

「え？」

すると、恭也さんが俺に勝負を挑んできた・・・・・・なして？

「よし、信慈君と恭也。こっちに来てくれ」

「ああ」

「え？ え？」

「信慈君は木刀はどれが良いかい？」

「え？ えっと、この日本刀サイズの木刀で」

「そうか」

わけが分からず突っ立っていると、土郎さんがここぞとばかりに仕切っていく。で、トントン拍子で勝負の準備が整っていく

「「信慈君、頑張って」」

「信慈君、頑張ってね」

「信慈、しっかりやりなさいよ！」

「信慈君、しっかりやらんとお仕置きやで！」

「・・・・・・・・どうしてこうなった？」

「恭也、信慈君・・・・・・・・用意は良いかい？」

「ああ」

「あ、はい」

もう、やけだ……やるからにはちゃんとやる……

「では、始め！」

士郎さんの合図で恭也さんがこちらへとかけてくる

【キン！】

俺はそれを迎え撃って攻撃をいなす

「…………やるな」

「いえいえ」

距離を取った恭也さんは嬉しそうに呟いている。うん、やっぱりあの危うい感じはしないな。しっかり己の今の限界を見極めている目だ

「じゃ、少し本気でいくぞ！」

「はい」

「シュツ」

恭也さんは『虎乱』を放ってくる

【キン、キン、キン、キン】

俺は最小の動きでそれを受け流していく。余裕の表情はしているが、内心では冷や冷やものだ。ふう、これは使いたくなかったんだけど仕方がない……

.....士郎SIDE.....

恭也の連続攻撃に信慈君は防戦一方だな．．．．．顔は余裕そうだが、内心では冷や冷やものだろう

「タッ！」

[illegible]

だが、連続攻撃をしていた恭也が攻撃を止め、信慈君と距離を取る。

「 魔宮新陰流 纏 」

「「「「「「「「「「「「「「「」

信慈君がそう呟くと、信慈君の身体が恭也と同じぐらいに成長する。
こ、これは一体・・・・・・・・

……ゆきSIDE……

いきなり信慈君が大きくなったからビックリしたの…………

「・・・・・・・・信慈君、本気や」

「「「「「え?」「」「」

それを見ていたはやてちゃんがそう呟きました。あれが信慈君の
本気・・・・・・・・?

「・・・・・・・・恭也さん、ここからは僕も本気で行かせていただきます」

「あ、ああ。俺も本気で行こう(ニッ)」

信慈君の言葉にお兄ちゃんは笑ってそう返しました。何だかお兄
ちゃん、楽しそうなの

……SIDE END……

「いくぞ！（シュッ）」

恭也さんはそう言うത്『神速』を発動させる。俺のこの姿でも見切ることにはできないが、音と気配で相手の居場所を探る。横か！

【キン！】

恭也さんの攻撃を受け流しながら、攻撃を放つ。恭也さんは『薙旋』を行い、俺の攻撃を払って次に背後への攻撃、別軌道で二撃を食わらしてくるが、俺は最小の動きでそれらを防ぐ

「恭也さん」

「ああ」

俺と恭也さんはアイコンタクトをとると、最大攻撃で決着をつけるため、最初の位置へと戻る

……土郎SIDE……

恭也も信慈君もいよいよ決着をつけるようだ。今までの信慈君の動きを見るに、まだ粗削りだ。だが、恭也とも互角に渡り合えるだけの強さを秘めているのは確かだ。どんな攻撃が来るのか楽し

みだな

「はぁ・・・・・・・・・・シッ」

「・・・・・・・・・・『阿修羅^{あしゅら}』」

【キン！】

恭也の『閃』と信慈君の攻撃が交差する。　　うむ・・・・・・・・・・これは・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・（バタリ）」

「これまで！　両者ダウンにより引き分けとする！-」

私はそう言つと二人のもとに駆け寄り、脈などを見ていく。　　ふむ・
・・・・・・・・

「父さん。　恭ちゃんと信慈君は大丈夫？」

「ああ、しばらく休めば目を覚ますだろう」

「「「「良かった・・・・・・・・」「」」」」

私の言葉に子ども達は安堵の表情をしている。二人が戦っているときは固唾を呑んで見守っていたのだろう。五人の手には汗が滲んでいた

「さて、夜も遅いからな。今日は泊っていくと良い。親御さんには私が連絡するから安心してくれ」

「はい。ありがとうございます」

「やった」

「さて、美由希、信慈君を運んでくれ。私は恭也を運ぶからな」

「はい」

私と美由希で恭也と信慈君を運んだ後、アリサちゃん達の親御さんに連絡をして了承をもらった。その後、起きだしてきた信慈君が質問攻めにあって困っていたのを助けると、彼はお礼を言ってくる。うむ、なかなか良い子ではないか。なのはとゆきのどちらかのお嫁さんになって欲しいもんだ。まあ、それはなのはとゆき次第だな

それから、起きだした恭也と信慈君は意気投合し、今日は遅くまで話をするということになった。だから、恭也と一緒に寝かすことにした。はは、ちっちゃいライバルができたみたいだな、恭也

……SIDE END……

「……………」

隣では恭也さんが眠っている。ふう……………引き分けか……………
……やっぱり恭也さんは強いなあ

「ライト、恭也さんはどうだった？」

「はい。危つい雰囲気は感じられませんでした。恭也様はも
っと高みに上がることができるでしょうね」

「そうか。俺も頑張らないとな」

「はい。私もお手伝いします」

「よろしくな」

「はい」

俺はライトとの話を終えて眠りつくことにした。それにしても、
今日は良い経験だったなあ

………第三者SIDE………

「今日の信慈君は格好良かったよね」
「すずか

「うん」「なのは&ゆき

「そっやね」「はやて

「ふ、ふん／／／／」「アリサ

「ふふ、アリサちゃんは素直じゃないんやね」

「なっ！　ち、違うわよ！」

「」「」「ははは（ふふふ）」「」「」

「も、もう寝るわよ！」

「」「」「はっい」「」「」

【はやて以外の四人の信慈の好感度が上がった一日でした（はやてはもともと高いです）】

……SIDE　END……

第九話 「手合わせ、そして……」 (後書き)

ゆき「雪と」 信慈「ゆきと信慈の」

ゆき&信慈

「「座談会」」

雪

「はっ！」

ゆき

「やっと起きたの」

信慈

「そつだな（苦笑）」

雪

「酷い目にありました……………」

ゆき

「作者さんが悪いの」

信慈

「……………作者さんはほつといていくぞ。で、今回は俺と恭也さんとの戦いだつたな」

ゆき

「信慈君、格好良かったの」

信慈

「そうか？」

ゆき

「うん」

信慈

「何か照れるな／＼／＼」

ゆき

「それでね。信慈君が使ったのって何なの？」

信慈

「あれか？ あれは」

雪

「はい。その業などの説明はこちらです」

信慈

「おい！」

魔宮新陰流

転生前の信慈の祖父・魔宮邦夫まみやくにおが継承していた剣術
信慈の腕前は師範代程度

『纏』

自分の姿を変化させる業で、信慈（七歳）はこれにより、自分の力

を十分に発揮できるようにした

『阿修羅』

魔宮新陰流奥義の一つで九連撃を相手に二回叩きこむ業

雪

「こんな感じです」

ゆき

「へえ、凄いね」

信慈

「ま、恭也さんも強かったよ」

ゆき

「うん　あ、後ね、何ではやてちゃんが信慈君が本気だと分かったの？」

信慈

「あ、ああ、それはだな。　前に魔宮新陰流の練習をしていたら、はやてに見られてな」

ゆき

「へえ」

信慈

「＜本当は見せる予定ではなかったんだけどな＞」

ゆき

「え？ 何か言った？」

信慈

「いや、何でもない」

雪

「では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくださる方々に感謝なの」

信慈

「感想・質問等あればどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。次回は信慈達に事件が起きます」

ゆき

「ええ！？」

第十話 「事件発生、そして……（前編）」（前書き）

雪

「第十話、更新しました」

信慈

「ヒョウガさん、マーボーさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十話 「事件発生、そして……（前編）」

恭也さんと試合をした翌日、起きると恭也さんは既にいなかった。恐らく、朝練で道場にいるのだろう

「ライト、今日は精神統一だけにしようか」

「はい、旦那様」

俺はライトにそう告げると、座禅を組んで精神統一を始めた。これは俺の中の魔力の流れを掴んで効率よく、身体全体に浸透させるために毎日欠かさずに行っているものだ

「……………」

それから、精神統一を終えて俺は窓から空を見上げていた

「信慈、ご飯だぞ」

「あ、はい」

すると、恭也さんの声がしたので返事をして振り返る。部屋を出てリビングへと行くとお馴染みのメンバーが既にテーブルに就いていた。どうやら俺が最後らしい

「信慈、遅いわよ」

「ああ、ごめんごめん。空を見上げていたんでな」

「空？」

「ああ、朝起きたら空を見上げないと調子が出ないんでな」

「そうなんだ」

そして、俺と恭也さんが席に着くと、全員で『いただきます』をして朝食をとり始めた。はやての話では今日は昼ごろまで遊ぶ予定らしい……俺はどうすっかな……

朝食を終えてなのは達は自分達の部屋へ行って遊んでいる。俺はリビングで桃子さんが入れてくれたお茶を啜っていた。は？ 何で一緒に遊ばないのかって？ できるか、そんなこと！

「信慈君、ちょっと良いかな？」

「あ、はい」

お茶を啜って寛いでいると、士郎さんが声をかけてきた。
何の用かな？

「ちょっと美由希とも手合わせを願いたいと思ってね」

「は？」

「いやあ、美由希がね。どうしても言っているんだよ」

「はあ」

いやいや、美由希さんはそんなこと言うわけ

「ははははは」

・ 美由希さんの顔を見たら物凄く良い笑顔で手を振っていた……

「まあ、良いですけど・・・・・・・・」

「そっか　では道場へ行くっか」

「はい」

「ああ」

「はい」

そして、俺と美由希さん、士郎さん、恭也さんの四人で道場に向かい、美由希さんとの手合わせを行った

手合わせ中

手合わせ中

手合わせ中

【勝者：信慈】

美由希さんに何とか勝てた後、休んでいると美由希さんに指導していた士郎さんがこちらに近づいてくる。そして、手合わせを申し込んできたので速攻で拒否した

「むう・・・・・・・・それは残念」

「父さん、無理強いはダメだぞ。」

信慈はまだ小学生なんだから。

もうちょっと大きくなってから再度申し込めば良いじゃないか」

「そうだな。その時は頼むよ、信慈君」

「はぁ・・・・・・・・」

恭也さん、そう思ってるんだったら昨日の時点で勝負を申し込まないで欲しかったよ・・・・・・・・ま、最終的には俺も本気で戦っちゃったけどね・・・・・・・・

「さて、そろそろ私と桃子はお店の方に行ってくる」

「ああ、いつてらっしゃい。俺はアリサ達を見送ったら手伝いに行くから」

「私も」

「ああ、では信慈君。ごゆっくり」

「あ、はい」

士郎さんはそう言う同道場を出ていった

「で、信慈君」

「あ、はい。何ですか？」

「あの五人の中で好きな子は誰かな？（＾o＾）」

「え！？」

「美由希、やめなさい（苦笑）」

「むう……………」

美由希さんの物凄く良い笑顔で尋ねてきたので、俺は面喰ってしまった。何てこと聞いてくんですか……………

恭也さんはそれを見て苦笑しながら止めてくれた……………ふう、助かった

リビングに戻ってお茶を啜りながら、お互いの流派のことについて語り、気付いたら昼になっていた

【ピンポン】

「はい」

お昼になったので昼食を食べてしばらく寛いでいたら、玄関のチャイムが鳴る。そちらの方を向くと、美由希さんが玄関の方へ向かっていくのが見えた。迎えが来たのかな？

「すずかちゃん、アリサちゃん、迎えが来たわよ」

「あ、はい」

玄関の方へと行っていた美由希さんがすずかとアリサを呼ぶ

「あ、お姉ちゃん！」

「すずか、迎えに来たわよ」

迎えに来たのは鮫島さんではなく、忍さんだった

「ん？ 帰るのか？」

「あ、はい」

「え？ 恭也……くん……？」

「ん？ えつと……？」

恭也さんが見送りに来た時、忍さんが恭也さんの方を見て驚く。
対する恭也さんは何故、名前を知っているのか分からず、首を傾げてしまう。そっか、この頃は知り合いじゃなかったのか……

「わ、私は月村忍・・・・・・・・ずかの姉で恭也くんのクラスメイトです・・・・・・・・」

「え？ そうだったのか・・・・・・・・それはすまない」

「い、いいえ・・・・・・・・大丈夫です（苦笑）」

恭也さんは忍さんの言葉に申し訳なさそうな表情で謝るが、忍さんはそんな態度に苦笑している

「くなあ、なのはちゃん、ゆきちゃん」

「く何、はやてちゃん？」

「く恭也さんとずかちゃんのお姉さんはクラスメイトみたいやね」

「くうん」

「く世間って狭いわね」

「くそうだね」

で、なのは達はあちらでヒソヒソ話をしている。俺は我関せずと言った感じで成り行きを見守っていた。それから、恭也さんと忍さんは二、三言話をする、こちらを向いて

「じゃ、帰りましょうか？」

「うん」

「はい」

アリサもついでに送っていくらしい。で、靴を穿いたアリサがこちらを向くと

「信慈、はやて何をしてるのよ。行くわよ」

「「は（え）？」」

「アリサちゃん、ちゃんと説明しないとダメだよ」

「ふふ、アリサちゃんはせっかちさんね。信慈君とはやてちゃんもね、私が送って行くことになってるの……」

「あ、そうやったんですか」

「なら、お言葉に甘えて」

そう言つと、はやての荷物を持ってはやての車椅子を押していく。そして、外に出ると

「「じゃ、また（ね）」

「「またね」

「「うん」

なのはとゆきに挨拶をして、リムジンに乗り込んで出発した。
そして、しばらくすると席がふかふかなため、我慢できずに

「はやて」

「ん、何や？」

「ついたら起こしてくれ」

「はいな」

俺は横で座っているはやてに言うと眠り始めた。
はあ・・・・・・・・
気持ちいいなあ・・・・・・・・

……アリサSIDE……

「・・・・・・・・・・（すうすう）」

信慈が物凄く気持ちよさそうに寝ている。にしても、信慈は何所でも寝てるわよね……。それでいて学校の成績は私よりも上……。はあ、やんなっちゃうわ……。って何を考えてるのよ！ 絶対、信慈に勝ってみせるわ！

「アリサちゃん、どないしたんや？」

「表情がコロコロ変わってるけど……………」

「な、何でもないわ」

「ふふふ」

という感じのやりとりをしながら、はやてと信慈の家に向かっていったときだった……………」

【キ、キーーーーー、ガッシャーーン】

「……………きゃあああああっ！？」

T字路から自動車が物凄い勢いで私たちの乗っているリムジンに体当たりしてくる。すると、顔を分らないようにした人たちがドアをこじ開けて侵入してきた

「な、何や！？」

「ちょっと放しなさいよ！」

「きゃあああっ！？」

「やめなさい！」

「うるさい。大人しくしろ！」

「全員で良いのか？」

「ああ、でも運転手は置いていこう」

「それもそうだな」

「うっ（バタリ）」

抵抗も空しく、運転手さんは気絶させられて私たちは、全員誘拐されてしまった……

【その間、信慈はずっと眠り続けていました。昨日と今日の手合わせで相当、疲れがたまっていたみたいです（苦笑）】

「おい。 こいつらは（ニヤッ）」

「ああ、バニングス家の嬢ちゃんと海鳴総合病院の五神外科部長の息子じゃないか（ニヤッ）」

「何だか、今日はついてんな（ニヤッ）」

何所かの倉庫に連れ込まれた私たちは、縛られて転がされている。犯人達は向こうで集まり、私と信慈の顔を見ながら騒いでいた

・・・信慈って、あの五神先生の息子だったの・・・
？ 私は横にいる信慈の寝顔を見つめる。 というか、この状況でよく寝てられるわね・・・

【信慈の父親・五神稔は有名な外科部長で幾つもの難しい手術を成功させた経歴を持ちます。 テレビにも度々紹介される有名人で、その息子である信慈は、ちょっとした犯罪組織には有名です】

「おい、お前ら油断するなよ？ 些細な油断から壊滅する可能性だつてあるんだからな」

「了解。 たく、リーダーは心配症ですね」

「慎重になるのは大事なことだ。 分かったな」

「へーい。分かってますよ」

すると、その奥からリーダーらしき人物が出てくる。他の人たちよりは頭が切れるみたいね……

「ふはあ、良く寝たって、あれ？」

「やっと起きたみたいね」

ようやく、信慈が目を覚ます。でも、信慈は縛られている状況に戸惑っているみたい

「……アリサ、これはどういう状況だ？」

「見た通りよ」

「どうやら、すずかちゃん達を誘拐して身代金をもらうようや」

「すみません」

「ごめんね、私たちのせいで」

信慈の質問に私とはやてが答えるとすずかと忍さんが申し訳なさそうな顔で謝ってきた。というか、それを言うなら私も同罪よ……

・・・

「別にすずかちゃんのせいじゃないやん」

「そうそう。悪いのは俺達を誘拐した向こうの方だ。ここは大
人しく成り行きを見守ったほうが良い」

「そうやね」

信慈とはやては何だか楽観的な様子で喋る。でも、大丈夫かしら
？ あの人達、顔を隠さずに話してるし・・・あ、何人かが
こっちに来たわ・・・

……SIDE END……

「うへへ、大人しくしてるか？」

犯人の一人（小太りの男）が俺達に話しかけてくる。 というか、
うへへって・・・気持ち悪いな・・・

「こんな事はやめなさい！ どうせ、すぐに捕まるわ！」

忍さんが睨みつけながら怒鳴っている。俺は目線をライトにもっ
ていき

「ライト、警察には？」

「はい、大丈夫です。今、旦那様の緊急用の電話で連絡しましたが、先に恭也様達が連絡したそうですので、私は場所を知らせるために緊急シグナルを出し続けています。警察がここを突き止めるのは時間の問題かと」

「そうか（多分、運転手さんだな………というか、何故運転手さんを誘拐もしくは殺さなかったんだ？）」

俺が疑問に思いながらもライトと念話をしている時、小太りの男がバカにしたような顔になって

「はん。この国のぬるま湯に浸かったような警察に俺らが捕まるかよ」

と言った。ああ、だから運転手をそのままにしたのか………バカか、こいつら………？

「それにしてもお前ら三人は災難だったな。こんな化け物なんかと一緒にいたせいで捕まったんだから」

「「！！」」

もう一人の犯人（眼鏡の男）の言葉に忍さんとすずかが驚愕の表情をとる。 はぁ……あっちの関係ね。 友達の家でやらしてもらった『とらいあんぐるハート3』Sweet Songs Forever』で知っていたので、すずか達が驚愕する理由は知っている。 知ってはいるが……

「ま、まさか貴方たち!？」

「な、何のこと？」

「え、えつと……」

「……………」

忍さんが叫ぶ中、首を傾げたアリサがすずかに尋ねる。 すずかは説明しようか悩んでいて、はやては表情には出してはいないが、友達を化け物と呼ばれて相当怒っているみたいだ。 かく言う俺もだが……

「はん。 やっぱり、知らなかったみたいだな」

眼鏡の男はそう呟くと

「そいつらは 吸血鬼なんだよ!」

と、すずか達が知られたくないことを暴露する

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・（ぼろぼろ）」

「・・・・・・・・（クッ）」

呆けたような表情をするアリサとはやて。すずかは耐えられなくなったのか涙を流し始め、忍さんも苦渋の表情をする

「お前らも可哀想な奴らだよな、こんな汚らわしい化け物と一緒にいるせいでこんな目にあうんだから、よ！」

「きゃあああ」

「すずか（ちゃん）！！」

心底、嘲笑うかのように言いながら涙を流しているすずかのお腹を蹴る、眼鏡の男

「な、何するんや!」

「あん?」

「すずかちゃんから離れるんや!」

はやてが怒鳴って言うが、眼鏡の男はやれやれという感じではやてに話しかける

「お前、俺らの話を聞いていなかったのか? こいつらは」

「吸血鬼やろ? それがどないしたんや!」

「は?」

眼鏡の男は呆けたように一瞬言葉を詰まらす。だが、そんなはやてに今まで黙っていた一人（ハゲの男）がはやての髪を掴む

「（パチン）うるさいんだよ、嬢ちゃん。ちょっと黙つときな?」

「うう……」

「「はやて（ちゃん）!」!」

頬を叩かれたはやては苦悶の表情をする……貴様ら……

・

……はやてSIDE……

「ん？ 何だ、餓鬼？ その目は？」

「……………」

「貴様、良い度胸だな。 痛めつけずに返そうと思ったが、こつちで痛めつけてやるよ（ニヤッ）」

「はぁ……………死なせるなよ？」

「分かってますよ、リーダー」

「「信慈（君）！？」」

犯人の一人がそう言うと言信慈君を抱えて奥の方へ行ってしまう……
……信慈君！ あたしは痛む頬を忘れて奥の方を見据える。
でも、暗くてよう見えへん

「グハッ！（ドン）」

「……………！！……………」

「……………え？……………」

信慈君を連れていった犯人が突如としてこちらに吹っ飛んできて壁に当たって倒れてしもうた。それに犯人達は驚き、私達は呆けてしまう。すると

「やれやれ、弱い者いじめは好かんのにのう……」

そう言つて信慈君がいる方向から赤い軍服を着た人が歩いてきた。軍帽をかぶってるから顔がよく見えへんけど、白い髭を生やした格好良いお爺さんみたいや

「……貴様、誰だ!?」

「わしかい? わしはただの軍人じゃが?」

今の時代に軍人はいないと思うんや。でも、格好は軍人さんやし……どないなつとんねん……

【はやて達は叩かれたり蹴られたりした痛みも忘れて突然現れた軍人さんを見つけていました】

「そ、その軍人さんが何の用だ!」

「いたいけな少年・少女を誘拐し、あまつさえ怪我を負わせようとしたのでな。思わず出てきてしまったわい」

お爺さんはそう言々と私達の方へと近づいて

「あの少年なら大丈夫じゃ。　わしが助けたからのう」

「「「「（ほっ）「「「」

お爺さんの言葉であたし達はほっとした。　良かった．．．．．

「き、貴様！　俺らを見殺しにしようとしたからに！　俺らを誰だと思ってやがる！」

「うむ．．．．．」

激昂する犯人達を尻目にお爺さんはあたし達を見て

「ロリコンじゃな」

そう告げた．．．．．あ。　あの目はおちよくつとる目や．．．．．
．．．お、お爺さん、何て度胸や．．．．．

「き、貴様！　俺達をバカにしてるな！　俺達は『夜の一族』を殲

滅させるために」

「うるさいのう。そんなこと分かっ取るわい（本当は知らんがな）」

「」「」「何!？」」「」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お爺さんがめんどくさそうに言うと犯人達は驚愕に目を開いた……
……リーダーらしき人はお爺さんをじっと見てるだけやけど……
……

「お前も裏の住人だな!？」

そう言ってあたしを叩いた人がお爺さんに向けて拳銃を構えたと、
リーダーらしき人以外の人たちもお爺さんに拳銃を向けた。すると

「・・・・・・・・・・覚悟はできてるんじゃない?（ギロツ）」

お爺さんは近くにいた人に物凄い形相で睨んだ・・・・・・・・・・それ
はさっきまでのおちよつくってる表情ではなく、威厳たつぷりの
表情だった・・・・・・・・・・

.....
S
I
D
E

E
N
D
.....

第十話 「事件発生、そして……（前編）」（後書き）

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「「座談会！」」

雪

「はい、今回は事件が起きました」

ゆき

「驚いたの……あの後、運転手さんが駆け込んできて『お嬢様達が連れ去られた！』って言うだもん」

信慈

「というか、何で高町家まで戻ったんだ？ 近くの家駆け込めば良かったじゃないか」

雪

「慌ててたんで、そこには気づかなかったみたいです。 それにあの辺は裏道でしたから、人気がありませんでしたからね。 だから、犯人たちもそこで犯行に及んだんですから」

信慈

「それもそうか。 で、恭也さん達が警察とかに連絡したと」

ゆき

「うん。 それだね。 お父さんとお兄ちゃん警察の人と助けにいったよ」

信慈

「そつか・・・・・・・・」

雪

「で、お気づきかと思いますが、あのお爺さんは信慈が変身した姿です」

ゆき

「何でお爺さんなの？」

信慈

「第一の理由ははやて達がいたからだ」

ゆき

「第一の理由？」

信慈

「ああ。第二の理由は爺さんの姿でしか使えない業があったからだ」

ゆき

「そつか」

雪

「お爺さんの姿でしか使えない業については次回説明いたします。では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくれる人に感謝なの」

信慈

「感想・質問などがあれば送ってくれ」

雪

「お願いします。 次回は信慈無双？を送りいたします」

信慈

「何故、疑問形なんだ？」

ゆき

「さあ？」

第十一話 「事件発生、そして……（後編）」（前書き）

雪

「第十一話、更新しました」

信慈

「キョウガさん、マーボーさん、感想ありがとう。　　というか、遅くないか？」

雪

「はは、すみません（汗）」

信慈

「まあ、良いけどな」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十一話 「事件発生、そして……（後編）」

……恭也SIDE……

【小太りの男がずか達の正体を暴露した少し前】

「父さん……………」

「ああ、ここらしいな……………」

俺と父さんはとある倉庫の前に立っている。ここが、信慈達が誘拐されて連れ込まれた場所か……………警察が言うには信慈の腕輪に埋め込んだ緊急シグナルがここから発信されているらしい

ちなみに、警察はこの倉庫群の入り口などを囲んでおり、ここにいるのは俺と父さん……………月村のメイドのノエルとファリンだ。その他の親たちは、高町家で吉報を待っている

「<ここから、どうしましょう……………?>」 ファリン

「<踏み込みましょうか?>」 ノエル

「<いや、犯人達の人数や中の様子が分からないから、今踏み込んだらマズい>」

「<恭也の言う通りだ。ここは中の様子を窺える場所を捜そう>」

「「くはい」」

慎重に倉庫に近づくと、少しドアが開いているのが見えた

「くドアが少し開いているな．．．．．よし、ここから見つからないように中を窺おう」

「「．．．．．（コクリ）」」

俺達は父さんの言葉に頷くと、慎重に近づいてドアの隙間から中を窺う。中には縛られた信慈達と少し離れた場所に犯人らしき男達が十人ぐらい談笑していた。すると、その中の二、三人が信慈達の方へと向かった

「うへへ、大人しくしてるか？」

「こんなことはやめなさい！ どうせ、すぐに捕まるわ！」

月村が睨みつけながら怒鳴るが、小太りの男がバカにしたような顔になり

「はん。この国のぬるま湯に浸かったような警察に俺らが捕まるかよ」

と言いつ

「それにしてもお前ら三人は災難だったな。　こんな化け物なんかと一緒にいたせいで捕まったんだから」

「「!!」」

もう一人の犯人（眼鏡の男）の言葉に月村とすずかが驚愕の表情をとる。　化け物だと・・・・・・・・・・?

ノエルとファリンの方を見ると苦渋の表情をしている。　どうやら、月村達が隠しておきたいものをアイツらは知っているということか・・・・・・・・

「ま、まさか貴方達!？」

「な、何のこと？」

「え、えつと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月村が叫ぶ中、首を傾げたアリサがすずかに尋ねるが、すずかは話そうか悩んで口籠る。　信慈とはやては怒っているらしい・・・・・・・・

・恐らく、友達を化け物と言われたからだろう・・・

「はん。 やっぱり、知らなかったみたいだな」

眼鏡の男はそう呟くと

「そいつらは 吸血鬼なんだよ」

と、どうだと言わんばかりに大声で暴露した。 月村達が吸血鬼、か

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・（ぼろぼろ）」

「・・・・・・・・（クッ）」

「・・・・・・・・」

呆けたような表情をするアリサとはやて。 ずずかは耐えられなくなったのか涙を流し始め、月村も苦渋の表情をしている。 信慈の表情は窺えないが相当怒っているのは雰囲気に分かる・・・・

「お前らも可哀想な奴らだよな、こんな汚らしい化け物と一緒に

いるせいでこんな目にあうんだから、よ！」

「きゃあああ」

「「すずか（ちゃん）！！」「」」

心底、嘲笑うかのように良いながら涙を流しているすずかのお腹を蹴る、眼鏡の男。すると、ノエルが今にも飛び出しそうな勢いでドアを開こうとしていた

「<ノエル、耐えるんだ！>」

「<し、しかし……！！>」

「<気持ちは分かるが、今は耐えるんだ>」

「<……>」

「<お、お姉さま……>」

「<分かりました>」

ノエルは耐えるように姿勢を元に戻す……。ノエルが出ていこうとしなかったら、俺が出ていってしまうところだっただけにノエルの気持ちは痛いほど分かる。だが、今、犯人が月村達の方にいる。下手に出ていたら月村達の命が危ない……ここ

は我慢してくれ……………

「お前、俺らの話を聞いていなかったのか？ こいつらは」

「吸血鬼やろ？ それがどないしたんや！！」

「は？」

中へ視線を戻すと、はやてが動かない下半身を一生懸命動かし、すずかに覆いかぶさって眼鏡の男を睨みつけていた。だが、そんなはやてに今まで黙っていたもう一人の男（ハゲの男）がはやての髪を掴む

「（パチン）うるさいんだよ、嬢ちゃん。 ちょっと黙るときな？」

「うう……………」

「「はやて（ちゃん）！！」」

頬を叩かれたはやては苦悶の表情をする……………貴様ら……………

「＜恭也……………」

「＜分かっているよ、父さん＞」

「<それなら良い>」

父さんが俺が飛び出すかもしれないと思ったのか声をかけてくる。

ノエルに我慢してくれと言ったのに俺が飛び出たし示しがつかない・・・・・ここは我慢だ・・・・・

「ん？ 何だ、餓鬼？ その目は？」

「・・・・・」

「貴様、良い度胸だな。 痛めつけずに返そうと思ったが、こっちで痛めつけてやるよ（ニヤッ）」

「はぁ・・・・・死なせるなよ？」

「分かってますよ、リーダー」

「「信慈（君）！？」」

眼鏡の男がそう言うと言信慈を抱えて奥の方へ行ってしまった、信慈・
・・・・！

「<父さん・・・・・>」

「<・・・・・分かった。 隙を見て突n >」

「グハッ！（ドン）」

「「「「「！！」「」「」」

「「「「え？」「」「」

父さんが『隙を見て突入するぞ』と言おうとした時、信慈を連れていった眼鏡の男が吹っ飛んできて壁に当たって倒れる。それに犯人達は驚き、俺達もすずか達と同じように呆けてしまった。一体どうしたんだ………？

「やれやれ、弱い者いじめは好かんのにのう………」

そう言っただけ信慈がいる方向から赤い軍服を着た人が歩いてきた。軍帽をかぶってるから顔がよく見えないが、白い髭を生やしたお爺さんみたいだ

「「「「貴様、誰だ！？」「」「」」

「わしかい？ わしはただの軍人じゃが？」

今の時代に軍人はいない………どうなってるんだ？

「そ、その軍人さんが何の用だ！」

「いたいけな少年・少女を誘拐し、あまつさえ怪我を負わせようとしたのでな。 思わず出てきてしまったわい」

お爺さんはそう言うのと月村達の方へ近づいて

「あの少年なら大丈夫じゃ。 ワシが助けたからのう」

「「「「（ほっ）「「「」

月村達に何事かを囁いている。 言葉はよく聞こえないが月村達の表情を見るに信慈は無事みたいだ……

「き、貴様！ 俺らを無視しよってからに！ 俺らを誰だと思ってやがる！」

「うむ……………」

激昂する犯人達を尻目にお爺さんはすずか達を見て

「ロリコンじゃな」

「「「「……………（コケッ）「「「」

そう告げたため、俺達は思わずこけてしまった……その状況で言うとは、なかなかの度胸を持っている人だ

「き、貴様！俺達をバカにしてるな！俺達は『夜の一族』を殲滅させるために」

「うるさいのう。そんなこと分かつとるわい（本当は知らんがな）」

「「「「何！？」「」「」」

「……………」

お爺さんがめんどくさそうに言うのと犯人達は驚愕に目を開いた……リーダーらしき人物はお爺さんをじつと見てるだけだが……何を考えているのか窺えないな……

「お前も裏の住人だな！？」

そう言つてハゲの男がお爺さんに向けて拳銃を構えると、リーダーらしき人物以外の犯人達もお爺さんに拳銃を向けた。すると

「……………覚悟はできてるんじゃない？（ギロツ）」

お爺さんは近くにいたハゲの男に物凄い形相で睨んだ……
す、すごい……

「父さん……」

「ああ……あの人はできる……」

俺と父さんはお爺さんの力量に計り知れない何かを感じていた……

……はやてSIDE……

「は？」

と、お爺さんの言葉に声を上げる犯人

「……生半可な気持ちで人様に向けるものではない」

「はあ……？ 今の状況が分からないのか、爺？（笑）」

お爺さんの言葉にせせら笑う犯人、他の犯人たちもそれにつられて笑つとる。でも、お爺さんが軍帽を掴んで口元を釣り上げた瞬間、

一瞬ぶれたように見えた

「「「「「え?」「」「」」」」

何が起こったのか分からなかったから皆で疑問の言葉を発してしも
うたんやけど………

「ぎゃあああああつ!?!」

お爺さんの額に銃を突きつけていた犯人が腕を押さえて転げまわり
出したんや。一体、何が起こたんや………?

「「「「「き、貴様!!」「」「」「」」」」

【バババババババババ】

「「「「「きゃあああああつ!?!」「」「」」」」

それを見て激昂した犯人達がお爺さんやわたし達に向けて銃を乱射
したんや。だから、私たちは咄嗟に目を瞑ってしもった………

……恭也SIDE……

「<父さん・・・・・・・・・・!>」

「<待て!>」

皆が撃たれると思い、飛び出そうとすると父さんが手で制してきた

「<何故!?!>」

「<よく見ろ・・・・・・・・・・>」

「「「<え?>」「「「

父さんの声で中を覗き込むとお爺さんと月村達がいなかった……

「<犯人達が打った瞬間、あの人ははやてちゃん達を抱えて一瞬で物陰に隠れた>」

「「「!?!」「「「

あの一瞬で・・・・・・・・・・な、何て速さだ・・・・・・・・・・

【カチカチカチカチ】

「くそ！（バン！）」

弾切れになったのか、銃を床に叩きつける犯人達……

【リーダーはその間も身じろぎせず、黙って成り行きを見守っていました】

「さて、今度はこちらから行くからの」

「え？」

物陰からお爺さんの声がしたと思った瞬間

「ぎゃああああつ！？」

リーダー一人を残した犯人達全員の叫びが倉庫内を木霊した……
・見ると、犯人達が腕を押さえて蹲っていた……

「安心なさい。殺さずにはいてやったからの」

そう言って現れたお爺さんの腕には警棒のようなものがあった・・・
・・・恐らくあの警棒で犯人達の腕を・・・

「<父さん・・・・・・・・・・>」

「<今はまだ、様子を見よう・・・・・・・・・・>」

「<分かった>」

「「<はい>」」

父さんの言葉に頷くと俺達は成り行きを見守る

「・・・・・・・・・・さて、最後はアンタかい？」

「そうみたいだな・・・・・・・・・・」

お爺さんと犯人達のリーダーが対峙する。 あのリーダーも相当で
きる・・・・・・・・・・

「む？ お主は武器を持たんのか？」

「いや・・・・・・・・・・俺はコイツだ・・・・・・・・・・」

リーダーはそう言つと背中から日本刀を取り出す。 あ、あれは・
・・・・！

「ほう・・・・・妖刀と言われた村正かの？」

「ああ、コイツで俺は幾つもの修羅場を乗り越えてきた。 いわば、
相棒だな」

「そうか・・・・・では、わしも刀でお相手しようかの ライト、
“刀”だ」

「何・・・・・？」

「Y e s , f o r m c h a n g e ” S W O R D ”」

お爺さんがそう言つと、どこからともなく電子音の言葉が響いてく
る。すると、お爺さんが持っていた警棒らしきものが日本刀へと
変化した・・・・・あれは、一体・・・・・

「わしはこの初代・忠吉でお相手仕ろう」

「ク・・・・・ッ！」

お爺さんが構えるとリーダーも刀を構える

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は構えた場所から一步も動こうとしない。お互いの隙を狙っているみたいだ・・・・・・・・だが、お爺さんの構えは隙がありそうでない構えだ。どう切りかかるかとカウンターを喰らってしまう。それが分かっているのかリーダーの額には汗が滲んでいく

「うおおおおおっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リーダーは意を決して雄叫びをあげながらお爺さんに斬りかかる。しかし、お爺さんは少ない動きでその攻撃をいなし、それで出来た隙について刀の峰でリーダーの腹に一撃を叩きこむ

「グハッ！（バタリ）」

「・・・・・・・・ふう」

リーダーは壁に吹っ飛び、倒れこんで気絶する。お爺さんは一息入れると、月村達の方へ歩いていった。ふと、見ると最初に吹っ飛んで気絶した男が目を覚ましてお爺さんに銃を向けているのが見えた。お爺さん、危ない・・・・・・・・！

【バン！、キン！】

「うむ。 良い腕じゃのう。 だが、 まだまだじゃな（シュッ）」

「グハッ！（バタリ）」

刀で玉を防いだお爺さんは一瞬のうちに犯人の後ろに回って男を気絶させる。 そして、 犯人達を縄で縛り、 辺りに危険がないか確認した後

「おい、 もう出てきても良いぞ」

と月村達を呼ぶと、 恐る恐ると言った感じで月村達が出てくる。
ふう・・・・・・・・・・これで大丈夫だろう・・・・・・・・・・

「くノエル、 警察を呼んできなさい」

「くあ、 はい」

「く父さん・・・・・・・・・・」

「くああ、 良かったな」

「くはい」

俺達は安堵の表情をして扉を開く。一瞬、警戒したはやて達だったが、俺達の顔を見ると安堵の表情を浮かべた……。月村とすずかは微妙な表情だったがな。ふと、見るとあのお爺さんがいないことに気づく……。一体、あの人は……。

「あ、そうや……。信慈君は？」

「あつ、そうよ」

「こっちで眠っていたよ（苦笑）」

はやてとアリサが信慈の事を聞くと、奥の方に行っていた父さんが眠っている信慈を抱えて戻ってきた。恐らく、あのお爺さんに助けられて眠ってしまったんだろう。信慈も可愛いところもあるじゃないか……。 （苦笑）

「よく、眠ってられるわね」

「はは、でもな。眠つとる信慈君は可愛いやろ？」

「はあ……。 」

はやてのズレた発言にアリサがため息を吐いている……。様子を見てる限り、二人とも心に傷を負ってはいないみたいだ……。そう思っているとノエルが警察を連れて倉庫に入ってきた

それから、警察は犯人達を連行し、その場に残ったのは俺達だけになった。もちろん、俺たち用の車は外で待ってもらっているが・
・
・

「さて積もる話は明日にしよう・・・・今日も家に泊っていきなさい。忍君もね」

「」「うん」「」

「・・・・・・はい」

父さんの言葉に月村達が頷く

俺達は車に乗って一旦、俺達の家に帰ってご両親たちに報告をする。
そして、今日も泊ることを了解したご両親たちは自分の家へ帰って行った

.....SIDE END.....

【翌日、信慈達は大事をとって、恭也となのはとゆきは忍とすずかのたつての希望により、学校を休む事にしました】

「昨日のことで皆さんに言っておきたいことがあります」

忍さんが改まって昨日の犯人達の言ったことについて話があると告

げてきた。俺達は姿勢を正して聞く体制になる

ここにいるのは、俺の他に恭也さん、はやて、アリサ、なのは、ゆきだ

【士郎と桃子はお店の方へ、美由希は学校へ行っています】

「私とすずかは」

忍さんは『夜の一族』について、語り始めた。すずかは顔を俯かせて唇を噛んでいるらしい。はやてはそんなすずかの様子を心配そうに見つめながらも忍さんの話を聞いていた

「」「」「」「」

忍さんの話が終わっても、俺を含む全員が黙ったまま、忍さん達を見つめていた

「皆、ごめんね。黙ってて……」

「……すずか、一つ聞いて良い？」

すずかが顔を俯かせながら謝ってきた時、黙っていたアリサが優しい声色ですずかに話しかける

「……………何、アリサちゃん？」

「私たちと友達になっただのは襲う目的で？」

「そ、そんなことない！ わ、私は本気で友達n （スッ）アリサちゃん……………？」

さすがが顔をあげてアリサの言葉を否定するとアリサがすずかを抱きしめる

「でしょ……………なら、何の問題もないわ。 すずかが吸血鬼だろうと何だろうと私はすずかの友達よ。 それはなのは達も同じよ。 ね？」

「「うん！」」

「そうやよ、すずかちゃん……………吸血鬼も個性の一つやん」

「そうだな……………（苦笑）」

「……………ありがとう……………ありがとう……………」

俺達がアリサの言葉に頷くとすずかは涙を流しながらお礼を何度も言ってきた。 それを見ている忍さんと恭也さんも微笑んで見守っている

【この事件がきっかけでなのは達の絆がますます上がったのは言うまでもありません】

……おまけ……

「……いつか、あの人と戦いものだ」

「そんなに強かったのですか？」

「ああ。恭也より、いや下手すれば私よりも強いかもしれないな」

「ふふ、お父さんったら」

【ちょっとした休憩時間の高町夫婦のお話でした】

……SIDE END……

第十一話 「事件発生、そして……（後編）」（後書き）

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「」「座談会！」」「

雪

「今回は誘拐事件の後編です」

ゆき

「私の台詞が『うん！』しかないの……………」

雪

「仕方がないですよ」

ゆき

「それは分かってるの。 で、信慈君」

信慈

「何だ？」

ゆき

「警棒って？」

信慈

「ライトの第四形態だ」

ゆき

「何で警棒なの？」

信慈

「……………それはさておき、作者」

ゆき

「話を逸らした!？」

雪

「はは（苦笑） 何ですか？」

信慈

「土郎さん達って一応、一般人だよな？」

雪

「そうですね、一応」

信慈

「じゃ、何で警察を差し置いて倉庫にいたんだ？」

雪

「それについてはつまらない方向でお願いします」

信慈

「あっそ……………」

雪

「えっと、ライトの第三形態については無印編で出す予定です（汗）」

ゆき

「作者さんも話を逸らしたの……はあ……あ、そうそう。信慈君が犯人達に使ったのってお父さん達の『神速』だったかな、それに似てるの」

信慈

「ああ、あれは魔宮新陰流歩法『瞬』だ」

ゆき

「『瞬』？」

信慈

「地面を一瞬で百回以上叩いて移動する業だ。でも、これは爺さんの姿じゃないと出来ない業なんだ」

ゆき

「何でお爺さんの姿じゃないとダメなの？」

信慈

「うーん、そこは俺でも分からない。でも、爺さんの姿以外で出来るようにがんばるつもりだ」

ゆき

「がんばってなの」

信慈

「ああ」

雪

「では、この辺で座談会を終わりにします」

信慈

「この小説を読んでくれる人に感謝を！」

ゆき

「また、感想・ご質問等あればどしどし送ってくださいなの」

雪

「お願いします。次回は原作開始です」

ゆき

「いよいよ、私の出番なの！」

雪

「それはどうでしょう……」

ゆき

「え？」

第十二話 「進級、そして……」(前書き)

雪

「第十二話、更新しました」

信慈

「ヒョウガさん、マーボーさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十二話 「進級、そして……」

【誘拐事件から月日が経ち、信慈とゆき達は小学三年生になりました】

「今日から三年生だな」

「そうやな。それにしても、時間の経つのは早いんやな。あの事件から二週間しか経ってない気がするんやもん」

「はやて、危険な発言は控えようか……………」

「？」

「はあ。まあ、良いや。それにしても、バス遅いな」

「早くきすぎたあたしらが悪いのとちゃう？」

「まあ、そうなんだけどな（苦笑）」

今日は年度初めの始業式の日。はやてと他愛もない話をしながらバスを待っていた

【では、その間に経過報告をどうぞ】

あ、ああ……………まずは、はやて達の事を話しよう

すずかはこの二年で遅しくなった。あの一件以来、ふっ切った様で以前のような引っ込み思案ではなくなったぞ。まあ、大人しい性格はそのままだな

アリスは相変わらず、俺をライバル視していて試験の度に食って掛ってくる。態と負ければ良いと思うかもしれないが、それをしようものなら『同情するな!!』という言葉と共にビンタをかましてくるから性質が悪い。だから、本気で解かないといけないんだ(苦笑)

……なのはとゆきは特に報告する事がないから省く

【ええ!?!】

どこかで誰かが騒いでいる気がするが、無視しよう

はやてはこの二年で『闇の書』の侵食が進み、足の麻痺が悪化している。一応ライトの助言により、ブラック・トース万年の霊甲・玄武で侵食速度を遅らしているが、これは姑息な手段でしかない。やっぱり、あの方法しかないみたいだ

さて話が長くなったが、最後に俺の事を話しよう。俺は去年から実戦形式の練習を行っている。他世界に転移し、その世界に住む原住生物と戦うというものだ。最初は全戦全敗だったが、今では勝率80%まで上がっている。あ、そうそう。この間、違法研究施設らしき

【ブッ、ブー】

おっと、バスが来たから、この話はまた今度にしよう

……ゆきSIDE……

「あ、信慈君とはやてちゃんだ」

「久しぶりだね」

「久しぶりって……春休みの間に会わなかっただけじゃない（苦笑）」

バスの最後尾で信慈君達が乗り込むのが見えました。春休みの間、信慈君達が用事とかで全然会えなかったから、久しぶりな感じがします

「アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん、ゆきちゃん、おはよう」

「おっす」

「……おはよう」「……」

信慈君とはやてちゃんが挨拶をしてきたので、私たちも挨拶を返します。そして、はやてちゃんは車椅子を固定して、信慈君はわたしの席の一つ前に座りました

「今日から三年生やね」

「そうね」

「えっと、確か入口でクラスの発表されてるんだよね？」

「ああ」

「「今度こそ、お姉ちゃん（ゆきちゃん）と同じクラスになりたいの！！」」

私とお姉ちゃんが同時にそう叫ぶと信慈君達は一旦、腕を組むと

「「「「「……無理だな（やな）（ね）（だと思っよ）」「」「」」」」

「「ええ！？ 何で！？」」

と、口をそろえて言ってきました……むう、何でなの

【そうこうしてるうちにバスが学校に到着しました】

バスを降りて入口に向かっていると、人だかりがあつてその前には掲示板が張り出されていました。　　すずかちゃんが言った通り、クラスの発表をしているみたいです

「えっと、あたしと信慈君とゆきちゃんは一組やね」

「で、私とすずかとなのはが一組ね」

「「また、違うクラスなの」」

「俺達の言った通りだろ？」

「信慈君、それは言っちゃダメだよ（苦笑）」

何とか人込みをかき分けて掲示板の前にやってきた私たちは、自分のクラスがどこなのかを見ます。でね、またお姉ちゃんと違うクラスになっちゃいました。何でなの、作者さん！！

【こっちに話しかけないでください】

むう……。良いもん、良いもん。来年に期待するだけでもん。。。。

それから、お姉ちゃん達と別れて一組の教室の中に入ります。そして、自分の席に鞆を置いて信慈君の席にはやてちゃんと一緒に集まりました

「また信慈君とゆきちゃんと同じクラスやな」

「そうだね。でも、お姉ちゃんと同じクラスになりたいの」

「お前はそればかりだな（苦笑）」

「むう……だつて」

「まあまあ。でもな、こうも同じクラスが続くと、誰かの思惑かなと勘ぐってしまうわ」

「はやて、頼むから危ない発言はやめてくれ」

「朝からおかしいで、信慈君？」

はやてちゃんの危ない発言に信慈君が注意するけど、はやてちゃんは全然、分かってないみたい

「はあ、もう良い。でも、はやての言いたいことは分かる（148人の四クラスで三人が三年間同じクラスになる確率は、約0.35%だしな）」

「そうなの？」

「ああ」

【ガラガラ】

「皆さん、おはようございます」

「「「「「おはようございます」「「「「「

あ、先生が入ってきたの。 席に着かなきゃ

わたしとはやてちゃんは急いで、自分の席へと戻りました

「では、体育館へ行くので廊下に出席番号順に並んでください」

「「「「「はい「「「「」

出席を確認した後、先生の言葉で私たちは廊下に並び、体育館へ向かいました

校長先生のありがた〜いお話が終わりました。いつものことだけど、信慈君は寝てたの

それから、教室に戻ってHRをして今日は終わりです

「はあく、眠い………」

「信慈君はいつも以上に寝とったね」

「校長の話は長くていかん」

「信慈、だらしないわよ。シャキッとしなさい!」

「無理」

「……ははは（苦笑）……」

学校からの帰り道、信慈君がフラフラしながら歩いているので、何だかハラハラなの

「ほな。また明日」

「……じゃあね……」

それから、私たちは信慈君とはやてちゃんと別れて今年から入っている塾へ向かいました。でも、信慈君大丈夫かな

……SIDE END……

「ん？」

「信慈君、どないしたんや？」

「いや、何でもない。さて、今日ははやての料理当番だったな」

「うん、そうや」

「じゃ、食材を買いにいくか？」

「レッツゴーや」

「はいよ」

はやての言葉と同時に車椅子を押していきながら、さっき感じたものを確かめるため、ライトに念話をする

「ライト、感じたか？」

「はい。強大な魔力反応が二十一個。恐らく……………」

「ああ……………」

ジュエルシード……………『ロストロギア』の一種で、碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石だったかな？　それが、この海鳴市周辺に落ちてきた。　いよいよ、原作開始か……………さて、俺はどうするかな……………

「到着や」

「そうだな」

「荷物持ち頼むわ、信慈君」

「あいよ」

俺は返事をすると思い物カゴを取り、車椅子を押しながら中へと入っていくのだった

……第三者SIDE……

「……………これは僕の責任だ。僕で何とかしないと……………
・第九十七管理外世界・地球か……………（スッ）」

一人の少年はポケットから赤い宝石を取り出して見つめながら呟やっています。そして、再びポケットに宝石をしまうと地球に向けて転移していきました

……………???SIDE……………

【第九十無人世界】

「この場所で違法な研究がなされていたのか？」

「はい。 そのはずなのですが……………」

「……………」

目の前には廃墟と化した研究施設と複数の死体。 一体、これは……………

「……………ここは一旦、母s 艦長に報告しないといけないな。 ここにいる武装局員はここで待機。 僕は一旦、戻る」

「……………はっ！……………」

僕はその場に何人かの武装局員を残し、艦長に報告するため転移した

……………SIDE END……………

第十二話 「進級、そして……」（後書き）

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「「座談会！」」

雪

「いよいよ、原作開始です」

ゆき

「わくわくなの」

信慈

「ま、頑張れ」

ゆき

「うん！ で、作者さん？」

雪

「何でしょう？」

ゆき

「????と少年って誰？」

雪

「それは後々、分かってくるので」

ゆき

「へえ」

信慈

「（ま、読者の皆は分かっていると思うけどな）」

雪

「他に質問はありますか？」

ゆき

「えっと、信慈君はお爺さんで実戦練習してるの？」

信慈

「爺さんが主だけど、色々な姿で実戦練習してるよ」

ゆき

「そうなんだ」

信慈

「ああ」

ゆき

「作者さん、もう質問はないよ」

雪

「そうですか。では、この辺で座談会を終わりにします」

ゆき

「この小説を読んでくださる人々に感謝なの」

信慈

「感想・質問等あればどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。 次回はフェレット(?)が登場です」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」

雪

「あ、そうそう。 今更ですが、フェイトがいなくてはやてがいるという違和感たっぷりなお話ですが、そこはご容赦ください。 お願います」

ゆき

「本当に……………(苦笑)」

信慈

「今更だな……………(苦笑)」

第十三話 「調査、そして……」(前書き)

雪

「第十三話、更新しました」

信慈

「GAUさん、レフェルさん、ヒョウガさん、マーボーさん、感想
ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十三話 「調査、そして……」

……??? SIDE……

母さん
艦長に報告した後、現場に戻って隊員達と共に研究施設の調査を開始する

研究施設は側壁だけ残っている状態。そして、施設内には複数の死体か……。詳しく調べて貰わないと分からないが、恐らく刃物で斬られたのだろう。ふと、死体の一人の顔を見ると

「こ、こいつは……。……!」

と思わず大声をあげてしまった

「どうかしましたか、クロノ執務官?」

「……。……コイツの顔をよく見てくれ」

「え? あっ!」

一人の隊員が心配して話しかけてきたため、死体の顔を指差す。すると、死体の顔を見た彼は驚きの声をあげる

「く、クロノ執務官、コイツは……………」

「ああ、間違いない。広域指名手配犯のAAAランク魔導師、ルツチ・コブラだ」

ルツチ・コブラ……………新暦五十五年、第六十五管理世界での大量虐殺事件の主犯格だった男だ。AAAランク魔導師だけあって、幾度も武装局員が返り討ちにあっている。そんな男が殺された……………」

「クロノ執務官!!」

「どうした!」

「全員の顔を確かめましたら、広域指名手配をされている者達ばかりです!!」

「何!?!」

ルツチの顔をまじまじと見つめていると他の隊員が僕を呼んでそう告げた。全員、広域指名手配犯だと……………?

「……………確かに」

全員の顔を見て回ると、確かに指名手配をされている者達だった……

「・・・しかも、どれもAランク以上の魔導師で実力はルツチと同等くらいの力を持っていた者達だ。その者達を全て一太刀で殺している・・・一体、誰が・・・？」

「クロノ執務官・・・」

「・・・詮索は後だ。調査に専念しよう。こいつらを検死にまわしてくれ」

「はっ！」

「後の者はここに残って調査を再開！」

「はっ！」「はっ！」「はっ！」

隊員達に指示を出した僕は、施設の一番奥を調査するため、瓦礫を退けながら進んでいった。そして、一番奥に着くと

「地下への階段だな・・・」

瓦礫に埋まっっていて分かり辛かったが、地下へと続く階段を発見した

「エイミィ、地下への階段を発見。今から中へと進入する」

「うん。気をつけてね、クロノ君」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクッ）」」」

【バンッ！】

死体の山をどうにか退かし、タイミングをはかって勢い良く扉を開け放ち、部屋の中へ進入する。しかし、その部屋には壊れた研究設備しかなかった。ふと、部屋の真ん中に目をやると

「こ、これは・・・・・・・・・・？」

「墓のようですね・・・・・・・・・・」

「ああ」

墓のような石碑が建てられていた。そこには文字が刻まれていたが、何と書いてあるのか分からなかった

「クロノ執務官」

「どうした？」

「設備は使い物にはならないぐらいに壊れておりました」

「そうか・・・・・・・・・・ということはあの監視カメラの映像もダメか？」

「いえ………僅かですが、映像が残っておりましたので、回収いたしました」

「そうか………よし、一旦アースラへ戻ろう」

「「はっ!」「」」

「では、始めて下さい。クロノ執務官」

「はい。研究施設は何者かの襲撃によって壊滅したと思われます」

「動物による襲撃の可能性は?」

「ほぼ いえ、全くないかと………傷を見た感じでは動物の引っかき傷ではありませんでしたし、検死報告書には刃物による傷もありますので」

「そう………」

艦長は考える素振りを見せるが、すぐに顔をあげて

「続きをお願い」

と僕の方に顔を向けた

「…………施設の奥には地下へと続く階段があり、そこには扉を隠すように研究員達の死体が積まれていました。それを退かして部屋へ入ると、壊された機材の他には何もありませんでした」

「そう……………」

「ただ、部屋の真ん中には墓のような石碑が建てられておりました」

「墓……………」

「はい。エイミィ、頼む」

「うん」

エイミィがモニターを操作すると、地下の部屋の真ん中にあった墓のような石碑が映し出される

「何か文字が書かれているわね。」

エイミィ、翻訳できる？」

「はい、やってみます」

母や
艦長の言葉に頷いたエイミィが操作すると、文字の部分が拡大されて翻訳されたものがでてくる

『若い少女達の御霊が安らぎますように』

「……墓でもあり、石碑でもあるようね」

「はい……」

「ふう……クロノ、機材は壊れていたと言ったけど、どのぐらいなの？」

「それはノーツから」

「はっ！ 機材を調べたところ、修復不可能なほど、壊れておりました。しかし、僅かですが、監視カメラの映像が残っておりましたので、回収いたしました」

「その映像は出せる、エイミィ？」

「はい。今、出します」

ノーツの言葉に艦長^{母さん}がエイミィに指示を出すと、エイミィが回収した映像をモニターに映しだす。これは一階部分の監視カメラの映像か……………

……映像SIDE……

「うへへ、やりがいのある仕事だな、ルッチ？」

「ああ、そうだな。少女達を誘拐したり、ここを守ったりするだけで大金がもらえるんだからな」

「だが、逃げた小娘を追いかけていったキリヤが戻ってこないのが気になるな」

「本当だな。小娘一匹に何を手古摺ってんだか……………おい、イルク！ 外の様子を見てこい！！」

「はい」

【ギギーっ！】

「……………!?」「……………」

ルッチの命令で一人の男（イルク）が外へ出ていこうとした時、扉の開く音がしました。驚いたルッチ達は戦闘態勢になって扉を見

つめます

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「「（ほっ）」「」「」

しかし、そこにいたのは少女を追いかけていった仲間の男（キリヤ）でした。そのため、ルツチ達はホッと息を吐きだして戦闘態勢を解きます

「おい、キリヤ。あの小娘を連れもど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（バタリ）」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」「」「」

ルツチが近づこうとし時、キリヤは前のめりに倒れ込みます。それを見たルツチ達は呆然としてしまいました

「はっ・・・・・・・・お、おいキリヤ　　！！」

最初に我に返ったルツチは、急いで倒れたキリヤを抱き抱え仰向けにした時、思わずキリヤから離れてしまいました。それはキリヤが死んでいたために驚いてしまったからです

「一体、誰が………?」

「? io (ワシじゃよ)」 イタリア語

「「「「ぎゃあああああつ!?!?!?!」」」」

「「「「?!?!?!」」」」

ルツチの疑問の言葉に誰かが返事をした時、奥にいた男達十人の叫び声が聞こえてきたため、ルツチ達は驚いて振り返ります。そこには倒れている十人の仲間を背に一人の赤い軍服を着た老人が立っていました

「貴様は誰だ!?!」

「Je? Est-ce que je suis seul
ement officier? (ワシかい? ワシは只の軍人
じゃが?)」 フランス語

「………何を言ってるのか分らんが、俺達の敵のようだ。
お前ら、生きて返すなよ!」

「「「「おう!?!?!」」」」

「Ach……Dort scheint nur die
magische Macht zu sein (ほう………」

魔力だけはあるようじゃな」 ドイツ語

ルツチのかけ声と共に四方八方から魔力弾が放たれ、老人に全弾命中しました

「ふん、呆気n」

「
?（それで終わりかの?）」 ロシ
ア語

「「「「ぎゃあああああつ!？」」「」「」

「何!？」

老人を倒したと思ってルツチが笑おうとした時、煙の中から老人の
声が聞こえてきました。同時にルツチ以外の男達が血を吹き出し
て倒れていきます。その状況に、ルツチは恐怖により、身体が動
かなくなっていました

「那? 后? 只是?（さて、後はお主だけじゃ）」 中国語

「く、来るな!! 俺は死にたくない! 止める!!」

「.....????????????????????
????????????????????????????????（殺される

覚悟のない奴が魔法という強大な力を悪用したらどうなるか）・・・

・・・? ??? ??? (その身で味わうのじゃな) 韓

国語

「ぎゃあああああっ!？」

老人がそう言いながらルツチを斬り裂いた瞬間、衝撃波が発生します

その衝撃により、カメラが壊れたのか、そこで映像が途切れました

……クロノSIDE……

「「「「「・・・」」」」」

映像が途切れても僕らは黙ったまま、動けなかった。何も言葉が
浮かんでこなかった

こんなのは初めてだ。 A Aランク以上の魔導師で実力のある連中
をいとも簡単に殺してしまう老人の強さに恐怖しか湧いてこない

「・・・エイミィ、この老人のデータを大至急集めてちょう
だい。出来るだけ詳細に」

「はい」

「ふう・・・こんな恐怖を感じたのは何年ぶりかしら・・・
・・・あら、まだ映像が終わってないようね・・・?」

「止めますか？」

「いえ、そのまま見ましょう」

「はい」

途切れていた映像が再び映し出された。これは地下のあの部屋だな……

……映像SIDE……

「遅い！ たかが、一人の少女を連れ戻すのに何時間かかっているのだ！」

「これでは実験ができぬはないか！！」

ぎゃあ、ぎゃあと研究員達が騒いでいます。この研究員達はルツチ達が殺されているとも知らず、吉報を待っていました

「くそ！ あの少女が最後の実験材料なのだぞ！！」

一人の研究員Aが見つめる先には、ゴミ同然のように捨てられた九人の少女達がいました

「ああ、遅い！　ちよつと、催促w」

【コンコン】

研究員Aが痺れを切らして一階へ向かおうとしますが、ドアをノックする音が聞こえてきたため立ち止まります

「やつと来たか。　おい！　遅い」

研究員Aがドアを開けて文句を言おうとしたが、最後まで言う事はできませんでした。　なぜなら

【ドサツ】

「「「「え？」「」「」

胴体を真つ二つにされてしまったからです。　他の研究員達は何が起こったのか分からず、呆けてしまいました。　そして、我に返ったのは自分達が切られていると分かった時でした

「「「「ぎゃああああっ！？」」「」「」

「????????（うるさいのう）」　タイ語

姿を現した老人が耳を押さえながら、事切れた研究員達を見つめて

「まともな研究をしていれば、殺されずにすんだのにのう。そう
思わないかい、その童？」

「!？」

と言葉を発したため、老人を殺そうと隠れていた研究員Bは驚いて
しまいました

「童、お主らは何のために研究をしているのじゃ？ 何のために年
端もいかない少女達を連れだしたのじゃ？」

「あつ、ああつ」

研究員Bは恐怖に言葉を失い、老人の問いに応える事ができないで
いましたが、老人は意に介せず

「少女達の人生をお主らが弄ぶ権利があるのかのう？ 少女達がお
主らに何をしたのじゃ？」

「あつ、ああつ」

と研究員Bに近づきながら問いかけていきます。そして、ついに研究員Bの傍までくると

「There is no right that I also kill you, but the killed preparation is made at any time. Because, let's shoulder the cross to kill you. Good-bye (ワシもお主らを殺す権利はないが、いつでも殺される覚悟はできとる。だから、お主らを殺したという十字架を背負っていこう。ではのう)」

と告げて研究員Bの命を絶ちました。次に老人は無残にも捨てられた少女達に近づきます

「.ライト」

「There is not the survivor (生存者はいません)」

「そうかいふう。 “警棒” にフォームチェンジ」

「Form change ” TRUNCHEON ”」

生存者がいないことを確認した老人は手に持っていた刀を警棒へと

変化させます。そして、部屋の真ん中に立って警棒を振りあげると、警棒の先に小さく魔力が集束されていきました

「ビックバン」

「Big Bung」

チャージが完了した瞬間、老人は濃密度の魔力球を地面に叩きつけます。すると

【ドンッ！】

という音と共に発生した衝撃波によってカメラが壊れ、そこで映像が途切れました

……クロノSIDE……

「……………何という魔力だ……………」

最後の集束砲撃に驚きのあまり、そう呟いてしまう。ふと、艦長母さんを見ると、少女達の映像を見つめていた

「……………あの少女達は……………」

「艦長……………」

「……………エイミィ、悪いけど行方不明者リストを出してちょうだい」

「あ、はいっ」

母ちゃん艦長は何かを思い出したのか、エイミィに行方不明者リストを出させる。そして、出てきたリストを見て

「やっぱり……………」

そう呟いたのでリストを見ると、そこにはあの少女達の名前と画像があった。そういうことが……………

「艦長……………」

「……………本艦は一時、本部へ帰港します。良いですね？」

「はい!-!」

「……………はっ!-!-!-!」

この事を本部やあの少女達の親達に報告するため、本部へ帰港することにした。それにしても、あの老人は一体……………

……第三者SIDE……

クロノ達が本部へと戻ってから数日後、地球のとある公園で

「はあ、はあ、はあ」

一人の少年が息を切らしながら佇んでいました。そして、その顔からは汗が滴り落ちていきます

「があああああ！！」

「くっ！」

汗が地面へと滴り落ちたとき、茂みから黒い生物が姿を現しました。少年はそれを見据えて右手を突きだす格好をとります。すると、その手に持つ赤いの宝石が輝いて魔方陣が展開されました

「があああああ！！」

「妙なる響き、光となれ。許さざるものを封印の輪に。ジュエルシード、封印！」

黒い生物が突進してくると同時に少年は呪文を唱えます。ぶつか

り合う、両者……

「が、がああああ！」

魔方陣によるカウンターによって黒い生物は吹っ飛ばれてしまい、
這い蹲るように逃げていきます。しかし、少年は追いかける体力
も気力もないのか、その場で倒れてしまいました

「……に、逃しちゃった……追いかけてくつちゃ
……誰か……僕の声聞いて……力をか
し……魔法の……力を……」

ここまで呟いた少年は、力尽きて気絶してしまいました。すると、
少年を光が包んでいきます。そして、その光が収まると……
・そこにはフェレットが倒れており、その傍に赤色の宝石と翠色の
宝石の二つが転がっていました

……SIDE END……

第十三話 「調査、そして……」（後書き）

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「「座談会！」」

雪

「今回は研究施設の調査でした」

信慈

「おい、作者……」

雪

「な、何でしょう……？」

信慈

「フェレットが出るんじゃないのかよ？」

雪

「ちゃ、ちゃんと出しましたよ。最後に……」

信慈

「はぁ……まぁ、良いよ」

ゆき

「えっと、あの老人って信慈君？」

信慈

「ん？ ああ、そうだが？」

ゆき

「何で、色々な言葉が混ざってるの？」

信慈

「何となく？」

ゆき

「ええ！？」

信慈

「まあ、良いじゃないか。でさ、思ったんだけど、俺って確実に指名手配をされるかも……………」

雪

「いいえ。まだですよ」

信慈

「『まだ』というのが気になるが、そうなのか？」

雪

「はい。アースラは老人（信慈）を管理局に勧誘するため、地球にやってきます。そして、そこで事件に遭遇する設定なので」

信慈

「ほう……………」

雪

「まあ、ぶっちゃけ、無印編では老人とリンディ達はエンカウント

「しませんよ」

信慈

「ふうん」

ゆき

「私は？」

雪

「大丈夫ですよ。ちゃんとエンカウントしますから……」

ゆき

「何、多分って!？」

信慈

「ははは（苦笑）」

雪

「では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくれる人に感謝をなの」

信慈

「感想・質問等あったらどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。次回はなのは、魔法少女になる!??です」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」

第十四話 「ドッチボール、そして……」(前書き)

雪

「第十四話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十四話 「ドッチボール、そして……」

……ゆきSIDE……

「「おはよう」

「おはよう」

「おはよう。今日はいつもより早起だな」

「「うん。何だか目がさえちゃって」

私たちの言葉にお父さんは『そうか』と言って笑顔になり、お母さんも朝御飯の支度をしながら微笑んでいます。変な夢を見たため、今日はいつもの時間よりも十五分早く起きてしまいました

「二人とも、お手伝いしてくれる？」

「「はい」

返事をした私とお姉ちゃんはお母さんのお手伝いを始めます。今日も元気いっぱい頑張ります！！

……SIDE END……

「将来かあ」

昼休み、相変わらず俺の席の周りに集まってお弁当を食べていると、急になのはが呟いた。　は？　話がとんだ？　俺に言っなよ、そんなこと・・・・・・・・

あ、ちなみに俺の周りに集まってるのは俺が逃げないようにだってよ

「将来がどないしたんや、なのはちゃん？」

「えっとね、授業で職業のことをやったんだけど」

「うん」

「そこで将来、自分が何をしたいのか考えるのも良いですねって言うたの」

「それで考えてたん？」

「うん。　そう言えば、アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

なのはは何かを思い出したのか、アリサとすずかに尋ねる。　なのはの将来ねえ・・・・・・・・・管理局の白い悪m　おっと、今思い浮かべるとマズい気がするのでやめよう

「家はお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃ

んと後を継がなきゃ・・・・・・・・ぐらいけど」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなと思ってるけど」

小学三年生とは思えない、しっかりとした将来設計だね。 おじちゃん吃驚だ。 え？ 似合っていない？ うるせえよ

「アリサちゃんもすずかちゃんもちゃんと考えていて凄いいんやね？」

「「そ、そう？」」

「うん」

「・・・・・・・・はやてちゃんは将来、何をしたいのか考えてるの？」

「うーん、そうやな」

はやてはなのはの問いに腕を組んで考えている。 はやての将来ねえ・・・・・・・・おっと、狸の格好をしたはやてをイメージして、思わず笑いそうになってしまった。 自重、自重・・・・・・・・

「くとりあえず、信慈君のお嫁さんになるは決まってるから、良いとして・・・・・・・・」

おゝい、はやてさん・・・・・・・・・・？　今、さらっと凄いを暴露していたような気が・・・・・・・・・・

「この足の事もあることやし。　今はじっくりと考えとる最中や」

「ふゝん。　でも、考えてるだけでも凄いと思うわよ」

「そうだよな。　あつ、なのはちゃんとゆきちゃんと信慈君の将来の夢って何？」

「将来の夢ねえ」

「うゝん」

すずかの問いに考え込む俺たち

【なのは達ははやてとの約束で足について同情はしないようにしています】

将来か・・・・・・・・全然考えてなかったなあ。　はあ？　はやての夫だろ？　そんなもん分かるか！！

「信慈はお父さんの後を継ぐんじゃないの？」

「うゝん」

「なのはちゃんとゆきちゃんは喫茶・翠屋の二代目やないの？」

「うん」

父さんの後を継ぐねえ……ああ、もうめんどくさい！ 考
えるのやめよう、うん

【ええ！？】

「えっと、私は一応、そうかな？ でも、他にやりたいことだでき
るかもしれないけどね」

「ふん。で、なのはは？」

「……私もそれは将来のビジョンの一つではあるんだけど。
でも、やりたいことは何かあるような気がするんだけど、まだそ
れが何なのかはつきりしないんだ。私、特技も取柄もない
(ピシッ) 痛っ！？ は、はやてちゃん……？」

『特技も取柄も特にない』と言おうとしたなのはの頭に、はやてが
ハリセンではなく。はたかれたなのはは頭を押さえながらはやて
を見つめた

「……自分からそういう事を言ったらあかん！」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないことだって、きつとあ
るよー！」

「だいたい、あんたは理数の成績、この私よりも良いんじゃないの。それで取柄がないとは、どの口で言うわけ？ このっ、このっ！」

なのはの口をこれでもかというぐらいに引っ張るアリサ

「い、痛いっ、痛いっ。だって私、文系苦手だし、体育も苦手だし」

「まだ言うかつー!!」

「い、痛いよ」

痛がりながら弁解するの是对し、アリサは更に引っ張りを強くする

「あ、アリサちゃん、ダメだよ」

「アリサちゃん、止めて」

それをすずかとゆきが止めに入るが、俺とはやては

「お茶が旨いねえ」

「そっやな」

現実逃避よろしく食後のお茶を啜っていた

「ふ、二人とも。和んでないでアリサちゃんを止めてよ」
「なのは

「無理だ（や）」

「ええ!？」

なのはの言葉に否定した俺とはやては再度、お茶を啜る。
いや、お茶は旨いねえ

【その後、授業の直前までアリサのなのは弄りが続きましたとさ・・・（完）】

エンドロール

って、まだ終わってねえよ!!

【す、すいません（汗）】

たく……で、何故か次の授業の体育（一、二組合同）のド
ツチボール対決で決着することになる。組み合わせはなのは・ゆ
きチームvsすずか・アリサチームだ

おつと……危ない、危ない。ん？ 俺は何をやってるの
かって？ 俺vs男子全員のボール当て対決かな？

「「「「むきーーーーっ!!」「」「」」

だって、味方のはずの男子達も俺にボールを当てようとしてくるん
だよ……ホント、俺が何をしたっていうんだ？

「「「「いい加減、当たれーーーーっ!!」「」「」」

いやいやいや、当たれって言われても……

「信慈君、頑張るんや」

「「「「むきーーーーっ!!」「」「」」

「はぁ……終わらねえかなあ……」

はやての応援により、余計に牙をむくと男子達。え？ さっさと
当たって終わりにしろ？ そんなことしたら、したでヤバくなるか

ら、やらねえよ

「ぎゃふん!」

ふと、女子の方を見るとなのはがボールを顔面キャッチしているのが見えた。あ、あれは痛そうだなあ

「うう、顔が痛いの」

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「ごめんね、なのはちゃん」

「ううん、私がよけきれなかったから悪いの」

「それにしても、顔面キャッチはないわよ」

「うう」

なのはを皮切りに、相手全員を葬り去ったすずかのチームが勝ち、女子のドッジボールは終了する。で、顔面キャッチをして痛がつているなのはのところになすすか達が集まっている。どうやら、昼休みの件は一先ず、決着がついたようだ。でも、アリサ……・止めをさしちゃいかんよ……・

って、いつの間にかボールが増えているし。そんなに俺にボール

を当てたいのかよ……

【信慈vs1ー、二組男子の対決は終了時間まで続きました。もちろん、信慈が勝ちましたけど】
も

「はぁ………疲れた………」

「避けてばかりだったじゃない。何でそれで疲れてんの？」

「そうや、そうや」

俺たちは塾へ向かうため、学校と一緒に出る。え？ 何故、塾に通っているのか？ それは、アリスのせいとも言ったら分かるだろう？ まあ、分からなくても説明はしないがな

「でもでも、ボールが何個も投げられているのに、全て避けきるなんて凄いの」

「うん、うん」

「そうだよねえ」

「そうやる」

いや、はやてさん………？ 貴女、さっきアリサと一緒に非難してませんでした？ それに何故、自慢げなんですか？

「はあ………ほら、いくわよ」

「ああ、待ってえなあ」

「」「待って」「」

「やれやれ」

アリサはため息を吐くと先に歩いていってしまふ。そして、俺たちは走って追いつき、塾へと向かった

……ゆきSIDE……

「あつ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「あ、そうなの？」

「ちょっと、道は悪いけどね」

「信慈君」

「はいはい」

アリサちゃんの提案で、近道をすることにしました。はやてちゃん
は車椅子だから、転ばないように信慈君が押していくようです

「「あ……………っ!」」

私とお姉ちゃんは少し歩いた時、思わず声を上げてしまいました。
昨夜の夢に出てきた場所にそっくりだったからです

「どうしたんや、急に声を上げて?」

「どうしたの?」

「なのは、ゆき?」

「……………」

「「う、うつん、何でもないよ。」「めん、めん」

誤魔化すように首を振って謝ります。きつと、気のせいだよね。

私はそう思い、皆と一緒に歩き出しました

「・・・・・・・・まさか、ね・・・・・・・・」

「お姉ちゃん・・・・・・・・？」

ふと、後ろを見ると、お姉ちゃんがその場で何かを考えていました。
昨夜の夢のことかな・・・・・・・・？

「なのはちゃん？」

「置いていくわよ」

「あっ・・・・・・・・うん!!」

すずかちゃんとアリサちゃんに呼ばれて、お姉ちゃんは我に帰り、
走って私達に追いつきました。その時

「助けて・・・・・・・・」

「えっ・・・・・・・・？」

頭の中に突然、声が聞こえてきたため、立ち止まってしまいました

【その為、それに釣られて他の四人も立ち止まりました。また、信慈以外の三人は念波が聞こえなかったため、急に止まった二人を怪訝そうな顔で見つめます】

「「なのは、ゆき?」「」

「どないしたんや?」

「「今・・・・・・・・何か聞こえなかった?」「」

私たちがそう聞いた時、アリサちゃん達は顔を見合わせて

「「「何か?」「」

「何か・・・・・・・・」

「声みたい・・・・・・・・」

尋ねてきたので、『何かの声』がすると告げました

「別に・・・・・・・・」

「聞こえなかったよね?」

「「ああ（うん）」」

私たちの言葉にアリサちゃん達はそう呟くと辺りを見渡して、聞こえなかったと言いました。　で、でも確かに声が……………

【信慈は視線だけを念波の発生源に向けています】

「　助けて……………」

「「あ……………」」

こ、今度ははつきり聞こえました……………えつと、こつち……………
……………私とお姉ちゃんは声が聞こえてきた茂みの中へ走り出して
いきました

……………SIDE　END……………

「なのは、ゆき!？」

「なのはちゃん、ゆきちゃん？」

「信慈君、あたし達も」

「ああ、しっかりつかまっとけ」

「うん」

なのはとゆきが急に茂みの中へ走り出したため、アリサとすずかが追いかけていく。俺たちもその後を追って茂みの中へと入っていくと、そこには赤色と翠色の宝石の首にかけたフェレット(?)が傷だらけで倒れていた。やっぱりこいつか……。結界魔導師のユーノ・スクライア……。

「どうしたのよ、二人とも？」

「きゅ、急に走りだしたりして吃驚したよ？」

「あつ！ ど、動物や……。怪我してるみたいやな……。」

「うん……。。」

「ど……。どうしよう……。。」

「どうしようって……。とりあえず、動物病院やる……。。」
「？」

「う、うん！ あ、でも……。。」

「この近くに獣医さんってあった？」

「えっと……。この辺りだと確か……。。」

「待って！ 今、家に電話してみる！」

傷ついたフェレット(？)の処置を話し合うのは達。俺はなのはが抱きかかえるフェレット(？)に触れてみる。フェレット(？)は弱ってはいるが、命に別条はないみたいだな……。それをなのは達に告げると少し安心したようだ

「獣医さんの場所、分かったわ。いきましょう」

「……ああ(うん)」「……」

俺たちはフェレットを抱き抱え、動物病院へと向かった……

第十四話 「ドッチボール、そして……」（後書き）

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「」「座談会！」「」

雪

「今回は原作第一話Aパート部分のお話です」

信慈

「作者さん」

雪

「何ですか？」

信慈

「なのはが魔法少女になるんじゃなかったの？」

雪

「そこまで行きませんでした、すいません（汗）」

信慈

「はぁ………まあ、良いよ」

ゆき

「ねえ、気になった事があるんだけど………?」

雪

「何でしょうか？」

ゆき

「はやてちゃんも魔法少女になるんだよね？」

雪

「ええ」

ゆき

「じゃ、何でフェレット君の声が聞こえなかったの？」

雪

「それはですね。 ライトが念波阻害をしているからです」

ゆき

「何で？」

信慈

「はやてには6月まで魔法というものを触れさせたくないんだよ」

ゆき

「ふーん。 それでライトに邪魔させてるの？」

信慈

「ああ。 ただの我儘だな、俺の」

ゆき

「そっか」

雪

「では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

ゆき

「この小説を読んでくださる人々には感謝なの」

信慈

「感想・質問等があればどしどし送ってくれ」

雪

「お願いします。次回はフェレット(?)、なのはにレイジングハートを託すです」

ゆき&信慈

「「お楽しみに」」

第十五話 「ジュエルシード、そして……」 (前書き)

雪

「第十五話、更新しました」

信慈

「ヒョウガさん、番外編でマーボーさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十五話 「ジュエルシード、そして……」

俺たちの目の前には治療を終えたY フェレットがすやすやと寝息をたてて眠っている。 それを見ながらアリサが向かいの先生に

「先生、これってフェレットですよ。 どこかのペットなんですよか？」

と尋ねる。 先生は、その問いに首を傾げながら

「フェレットなのかなあ……変わった種類だけど」

確かに珍しいフェレットと言えばフェレットだな。 人語が話せるし、魔法も使えるし（笑）

「それに、この首輪についているのは宝石なのかな？」

そして、フェレットの首輪についている二つの宝石のうち、赤い宝石レイジングハに触れようとする、先生。 すると、フェレットが目を覚まして俺たちを見回し始めた

そして、なのはとゆきの方を向くと、じっと二人を見つめる。 恐らく、二人に魔力反応を感じたのだろう。 ちなみに、俺とはやて

はライトにより、魔力反応を感知され難くなっている

「二人とも見られてる」

「え、あ、うん／＼／＼／」

「えっと、えっと／＼／＼／」

呆けていた二人は、アリサの言葉で我に帰ると、怖ず怖ずと指を近づける。すると、フェレットは少し匂いをかいでペロツと二人の指をなめ始めた。おっ、これは、相当フェレットに慣れてるとみた

「「うわぁ
」」

「可愛えなあゝ」

「「うん、うん」」

その様子にはやて達は笑顔になっている

「ん？ そろそろ、行かないと間に合わなくなるぞ」

「あっ、そっやな」

「じゃあ、先生よろしくお願いします」

「ええ。ちゃんと見とくから、安心してね」

「あ、はい、お願いします」

「フェレットさん、またね」

塾の時間に迫っていたため、俺たちはフェレットを預かってもらうことにして、急いで塾へ向かった

何とか講義に間に合った俺たち。そして、算数の講義を聞きながら、動物病院にいるフェレットをどうするか紙に書いて話し合うことにした

『あの子、どうしようか?』

『アリサちゃんとすずかちゃんのところはどうか？』

『うーん、家に庭にも部屋にも犬がいるしなあ』

『家にも猫がいるから・・・・・・・・』

なのはとゆきの問いに、それぞれの理由で無理だろうと言っている、アリサとすずか

『信慈君のそこは？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・（なのは達のところになると思うが、ここは話に合わせといた方が良さ）」

俺は腕を組んで考え込むポーズをとると、ゆきは無理だと感じたのか

『信慈君のそこもダメなの？』

『小母さんと小父さんに話してみたらどうや、信慈君？』

はやてがそう提案した時、先生にさされたため、答えながら

『まあ、とりあえず聞いてはみるが、期待はするなよ』

と伝える。 なのはとゆきは、落胆した表情になる。 というか・
・
・
・

『なのはちゃん達のところはどうなの?』

『うーん、家も食べ物商売だから原則として、ペットの飼育はダメだから』

さすが、俺の考えを代弁するかのように尋ねるとゆき、は少し考えてそう答える。 確かなのはとゆきのところは喫茶店をやっているから衛生上、ペットの飼育を避けているのは頷ける。 でも、士朗さんや桃子さんの性格では、許可しそうだけどな

『・・・・・・でも、とりあえず帰って皆に相談してみるよ』

という言葉で、それぞれの家で聞いてみることにしたなのは達は講義に集中し始める。 ちなみに、俺は講義が終わるまで寝ることにした。 だって退屈なんだよ・・・・・・

.....ゆきSIDE.....

今、私とお姉ちゃんはお父さん達に今日であったフェレットさんについて話しています

「という訳で、そのフェレットさんを」

「しばらく家で預かるわけにはいかないかなあって」

そこまで話して返事を待っていると、腕を組んで『うーん、フェレットかぁ……』と悩んでいるお父さんが

「ところで何だ？ フェレットって？」

【ドタッ】

と言ってきたので、私たちは思わずずっこけてしまいました

【ちなみに、ずっこけたのはなのは、ゆき、恭也、美由希の四人です】

「鼯の仲間だよ、お父さん（苦笑）」

「だいぶ前からペットとして人気の動物なんだよ（苦笑）」

そんなお父さんにお兄ちゃんと美由希お姉ちゃんがフェレットさんについて説明してくれました。すると、今まで黙っていたお母さんが

「フェレットって、ちっちゃいわよね？」

と尋ねてきました。 えっと、あのフェレットさんの大きさは・・・

「うーんと、これくらい」

手でフェレットさんの大きさを示すと、お母さんは微笑んで

「しばらく預かるだけなら・・・籠に入れておいて、二人がちゃんとお世話ができるなら良いかも。 恭也、美由希はどう？」

「俺は特に異存はないよ」

「私も」

お母さんの問いにお兄ちゃんとお姉ちゃんが頷きます。 それじゃ・・・

「良かったわね」

「うん！ ありがとう！」

やったあ、フェレットさんを私たちで預かることになりました。
あ、アリサちゃん達に連絡しなきゃ

「ふっ、ふ、ふん」

今、私はお風呂で身体を洗っています。しかも、フェレットさんを預かることができ嬉しいので、良い気分です

「助けて……………」

「ん？」

今、何か声がしたような？ 気のせいかな、多分。私はそう思う
と、お湯で石鹸を流して湯舟に浸かりました

「ふう、良い湯だよ」

【ババ k すいません、何でもないです（汗）】

「お姉ちゃん、お風呂上がったよ」

【ガチャッ】

「あれ……お姉ちゃん？」

お風呂から上がって、部屋の中に入ると、そこにいるはずのお姉ちゃんがいません。ふと、ベッドに視線を移すと、そこにはお姉ち

やんのパジャマが揃えてありました

「あつ・・・・・・・・まさか、あの時の声って・・・・・・・・？ た、大変なの！ わ、私も行かなきゃ」

私は、お姉ちゃんがフェレットさんの所に向かったと思い、パジャマから私服に着替えて急いでお姉ちゃんを追い掛けようと思いました

「ゆき、こんな時間に何所にお出かけだ？」

でも、急に後ろから声が掛けられたので、ビクッとなってしまい、怖ず怖ずと振り返るとそこにお兄ちゃんが立っていました

「あの、その、えつと、えつと」

「たく・・・・・・・・なのはが家を抜け出したと思ってたら、今度はゆきか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

「なのはが心配なのは分かるが、黙って行くのはいただけないぞ」

「はい・・・・・・・・」

「はあ、もう良い。 ゆきは部屋に戻りなさい」

「はい……………」

私はお兄ちゃんの言葉に頷くと、部屋に戻っていききました。お姉ちゃん、大丈夫かなあ……………心配なの

……SIDE END……

俺は天空に突き刺さる桃色の光の奔流を見つめていた

「ほう……………バカでかい魔力だな」

「そうですね。流石、なのは様です」

【貴方が言う台詞ではありません】

何か言ってるが、無視しておこう。さて、なのはの初戦闘でも見学するかな

「……………魔宮新陰流『影^{えい}』」

俺はなのはの近くへ行くため、気配を消す。そして、屋根伝いを駆けてなのはがいる場所へと向かう

「きゃああつ！」

到着すると、真っ黒で触手がウヨウヨしている魔法生物から逃げるなのは姿があつた。　ん？　フェレットが何か言ってるぞ？

「僕らの魔法は発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そして、その方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです」

ふむふむ、魔法の説明か……。とりあえず、メモっとくか。
メモ、メモ

「そして、あれは忌まわしい力のもとに生み出されてしまった思念体。あれを停止させるには、その杖で封印して元の姿に戻さないといけないんです！！」

なのははフェレットの説明を聞きながら、自分の持っている杖（レイングハート）を見つめる

「よく分かんないけど……。どうすれば？」

「さっきみたいに攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです」

「呪文？」

「心をすませて。 心の中に貴女の呪文が浮かぶはずですよ」

そう言われたのは目は瞑り、心をすませていく。 そののは
に向かって魔法生物が触手をのばして襲い掛かってきた

「Protection」

レイジングハートの声とともに展開された障壁^{バリア}が触手攻撃を防ぐ。
そして、目を開けたのはは真剣そのものだった

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！！」

杖を掲げながら、心の中に浮かんだ呪文を紡ぐ、なのは。 それを
見ながら、フレットが叫ぶ

「ジュエルシード、封印！！」

「Sealing Mode、Setup」

桃色の魔力系が魔法生物を縛り上げると、額に“XXI”という文字が浮かび上がった

「Stand by, ready」

「リリカル、マジカル。　ジュエルシード、シリアル21、封印！」

おお・・・アクロバティックな動き。　なのははレイジングハートの声に応えるかのように、クルクルと横回転しながら呪文を紡ぐ

「Sealing」

そして、桃色の魔力系が魔法生物を貫き、消滅させて宝石の状態に封印する

「これがジュエルシードです。　レイジングハートで触れて」

その宝石に近づき、なのはに指示を出すフェレット。　なのははフェレットの言う通りにレイジングハートを近づけると、ジュエルシードが宙に浮かんで杖のコアに取り込まれた

「Receipt, No. XXI」

そして、なのはバリアジャケットが解除されて元の服の姿となり、杖は赤い宝石の姿に戻ってなのは手の平の上に乗る。ふう・・・・・・不測の事態は起k

「・・・・・・ライト」

「はい。でも、転生者の気配ではありません。あの世界でのバカ共と同じような人物のようです」

「そうか・・・・・・」

去年、俺は転生者と戦った。そいつはなのは達を自分のものにするために転生した奴で、なのは達の気持ちは関係ないとかぬかしやがった。だから、俺はなのは達の人生を護るために戦って殺したその時、俺は殺す覚悟と殺される覚悟を再確認したのだ。今回は転生者ではないようだが、あの世界での研究施設にいた奴らと一緒にの人物らしい

「魔力資質がある者　はやて達が危ないな。よし、行くか（纏）」

「はい」

俺は爺さんになると、その人物がいるであろう場所へと向かった。
なのは達を守るために・・・

第十五話 「ジュエルシード、そして……」 (後書き)

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「「「座談会」」」

雪

「ついになのはが魔法少女になりました」

ゆき

「作者さん、私はいつ、魔法少女になるの？」

雪

「ネタバレになりそうなので言えません！」

ゆき

「ええ！？」

信慈

「やれやれ（苦笑） それにしても、なのはの呪文が『リリカル、マジカル』ってa」

雪

「それ以上は言っではいけません」

信慈

「へいへい」

ゆき

「で、最後の信慈君のアレはどうのこと?」

雪

「なのは達がジュエルシードを回収している裏で信慈も戦ってる的な感じにしたかったんですよ」

ゆき

「ふゝん」

雪

「あ、言っておくと信慈が言っていた転生者はコウキではありませんので、悪しからず」

ゆき&信慈

「「コウキ?」」

雪

「知らなくても良いことですよ」

ゆき&信慈

「「ふゝん」」

雪

「では、この辺で座談会を終わりたいと思います」

信慈

「この小説を読んでくださる方々に感謝を」

ゆき

「感想・質問は随時受け付けてるの」

雪&ゆき&信慈

「「「次回もお楽しみに」」」

第十六話 「極秘任務、そして……」 (前書き)

雪

「第十六話、更新しました」

信慈

「GAUさん、ヒョウガさん、感想ありがとう」

ゆき

「では、本編をどうぞなの」

第十六話 「極秘任務、そして……………」

「……………ここか、お頭が連れてこいと言っていた女の子達がいる海鳴市というのは」

目的の人物がいる辺りまで近付いた時、そういう声が聞こえてきたわけじゃが……………やはり、はやてやなのはが目当てか

「さて、管理局にバレてないうちに仕事をす」

「そうはいかんのう」

「！！だ、誰だ！？」

結界を張って相手を閉じ込め、気配を消して背後から声をかける

「……………お主に名乗る名はないわ」

「ち……………っ！ 管理局か何かか……………面倒なことになった」

名前を名乗らずにいと、男は自己解決をしてこちらと対峙してくる。間違った解釈じゃったが、面倒なので無言でライトを構える

「さて、お主の目的を吐いてもらおうかの」

「誰が言うか、よっ!!」

男はそう言つと魔法弾を幾つも展開して放ってくる。　わしはそれを避けながら

「……………仕方がない。　力づくで喋らすとするかのう」

「はんっ！　できれば、な!!」

「……………織ロー・アイアス天覆う七つの円環」

複数の魔法弾がぶつかる瞬間、織ロー・アイアス天覆う七つの円環を展開して防ぎ、
辺りを煙で充満させる

「ふ、ふん。　口ほどにもない爺だったな」

「……………影、瞬」

男が油断した瞬間、気配を消して一気に相手の懷に飛び込むと、警棒に変形させたライトで相手の両肩関節を潰す

「ぎゃああああああつ!?!」

「おっと、気絶されては困る。お主には誰が何の目的でここにこさせたのかを吐いてもらわないかん」

痛みにより、気絶しようとした男を覚醒させる。男はダラーンと腕を垂らしながらこちらを見つめており、その両目には恐怖が入り混じっておった……はあ、またか……

「……お主、何人の人を殺してきた？」

「は？」

「一人? 十人? 百人？」

「な、何を言つて」

「良いから答えるのじゃ!!」

「う……っ!?!」

殺気を浴びせると、男は顔を青くしながら

「二、三百人以上だ……」

「そうか……お主の命をその二、三百人の魂へ捧げようか

のう。 まあ、お主らみたいな悪党の命なんかいらないうつと思
うがな」

「なっ！？ た、助けてくれ！ た、頼む、命だけは！！」

無表情で立ちあがってライトを振りかぶると、男が泣きちらしながら
命乞いをしてくる。 ふう………つくづく、愚かな奴じゃ

「………お主は誰に何の目的でここに来させられたのか、吐
いてもらおうかのう？」

「吐く、吐く！ だ、だから頼む！」

「………言つのじゃ」

「俺達のお頭だ！ な、名前はコウキと言って、突然俺達の前に現
れて『一緒に世界をブツ潰そう』と言ってきたんだ！ 俺たちはそ
れに飛び付いた！ そして、手始めにこの第九十七管理外世界の日
本の海鳴市というところに住んでいる二人の女の子、高町なのはと
八神はやてを連れてこいと言われたんだ！！」

「………」

「………恐らく、転生者じゃな………」

「なあ！ 白状したんだから助けてくれるんだよな！？」

「お主とコウキを入れて何人いるのじゃ？」

「よ、四十人だ！」

「ふう……ライト」

「Yes , a metastasis start」

「な、何だ！？　おい、どういう事だ！？」

わしの意志をくみ取り、ライトが男を転移させる。　転移先は管理局……そこで精々、命乞いでもするのじゃな

「お主の未来を決めるのをわしではなく、あの神気取りの連中に決めさせてやるのじゃ」

「か、神気取りの連中……？」

「それは行ってからの楽しみじゃ」

「お、おい。　どういうk　」

男が最後まで言い終わらないうちに転移が完了した。　さてさて、管理局はどう動く……？

「ふう………ライト、時間は大丈夫か？」

「はい」

元の姿に戻り、ライトに時間が大丈夫なことを確認して帰路につく。
もちろん、警戒は怠らずにだけどな。それにしてもコウキという奴は、なのは達をどうするつもりなのか……いや、考えても埒が明かない。どんな相手でも全力で戦うのみだ

……クロノSIDE……

無人世界での出来事を本部に報告してから、数日が経った。今だ上層部からあの御仁をどうするのかの結論がだされていない。いや、こっちに情報が流れてこないというのが、正しいか……

話は変わるが、先程本部から犯罪集団『コーリア』の一人・ロブ・ヴァーヴォンが重症の状態で転移してきたと連絡があった。だが、我々はあの無人惑星での事件の調査をしているため、他部署が担当することになっている

「エイミィ。あの御仁の情報は分かったかい？」

「うつん。あのビデオの情報だけだし、何とも言えないね。でも、お爺さんが使っている言語は第九十七管理外世界のものと分かったよ」

「そうか」

アースラの通信室でエイミィとあの御仁のことについて話をする。
あの御仁を知る唯一の手掛りが、あの監視カメラの映像。もし、
あの御仁を管理局に勧誘することにしても、情報がこれだけの状態
ではどうする事もできないな

「クロノ執務官!!」

「どうした？」

その時、局員が入ってきたため、用件を聞く

「リンディ提督が至急、会議室にくるようにと仰っています」

「艦長が？ 分かった、すぐに行く伝えてくれ」

「はっ！」

局員は敬礼をすると、通信室を出ていった

「そういつわけだから、エイミィ、引き続きあの御仁の情報の調査
を頼む」

「うん。分かった」

エイミィに指示をだし、通信室をでて会議室に向かった。しかし、
艦長は僕に何の用だろう………？
母さん

「失礼します」

「あ、クロノ。忙しいのにごめんなさいね」

「いえ、問題ありません。して、私に何かご用でしょうか？」

会議室に入り、艦長に敬礼をして用件を聞くと
母さん

「まあ、座ってちょうだい」

「あ、はい」

席に促されて艦長の隣に座った

「貴方を呼んだのは私ではなく、この方達よ」

「え？」

艦長がそう言うと、三つのモニターが展開して三人の人物が映し出された。その映しだされた人物とは

「レオーネ相談役、ラルゴ元帥、ミゼット議長！」

『伝説の三提督』と言われ、時空管理局黎明期を支えた、レオーネ・フィルス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊名誉元帥、ミゼット・クローベル本局統幕議長の御三方だった。その御三方の登場に慌てて敬礼するが

「礼は良いわ、クロノ執務官。座ってちょうだい」

「は、はい……………」

ミゼット議長に促されて、再度座り直して御三方を見つめる

「私に何かご用でしょうか？」

「いや、お主だけでなく、リンディ提督にも見てもらいたいものがある」

「艦長にも？」

ラルゴ元帥の言葉に艦長母さんの方を向くと、コクリと頷いてきたので、再び視線を戻す

「私たちに見せたいものとはなんでしょうか？」

「この人物を知っているかい？」

レオーネ相談役はそう言ってもモニターにある人物の写真を映し出した。そこに写っていたのは、若いがああ御仁にそっくりな人物だった

「こ、この人物は……！」

「……やはり、知っておったか……」

「知ってるも何も、私たちは今、この御仁の情報を捜している最中です」

「それはどうということだい？」

「それは」

僕はいつまんであの御仁を捜している理由を話した

「そうかい。　そういうことがあったのか……」

「御三方はこの人物を知っているのですか？」

「ええ、知っています」

「こ、この」　御方はどのような方で……？」

御三方は僕の問いに淡々と話しだした

「この写真の御方は、クニオ・マミヤと仰る」

「その御方は私たちの上司」

「大将を務めていた人物だ」

「「！？」」

大将……！？　そ、そんな人物が何故、あのような場所に・

「マミヤ大將は、我々に色々なことを教えてくれた」

「マミヤ大將がいたからこそ、今の管理局があると過言ではない」

「私たちは皆に『伝説の三提督』と言われているけれど、私たちに
とってマミヤ大將が伝説だったのよ」

御三方にそこまで言わせるとは……マミヤ大將とはどのよ
うな方なんだろうか……

「しかし、そのような御方がいるとは、失礼ですが今まで知りませ
んでした」

「知らなくても当然。マミヤ大將に関する情報は全て最高機密に
該当するからな」

「最高機密………？」

「そうだ。マミヤ大將に関する情報等を管理局のデータベースに
登載するのが禁止になっている」

「だから、今、マミヤ大將を知っているのは私たちを入れて数人だ
けだよ」

そういうことか。以前、あの御仁のデータを参照した時、該当す

るデータがなかった。だが、最高機密の上、データの登載禁止ならば頷ける

しかし、最高機密とはどういうことだろう．．．．．まさか、重大な事件でも起こしてしまつて いや、御三方の様子を見る限り、そんなことは起こさない御仁である印象がある。では、何故．．．．．？

「何故、最高機密になったのか．．．．．それはとある事件がきっかけだ」

「事件．．．．．？」

「ああ、事件の概要は言えないがな。ただ、マミヤ大將はその事件により行方不明となつてしまった」

「行方不明．．．．．？」

「そうだ。マミヤ大將は私たちを助けるためにな．．．．．」

「．．．．．」

御三方はその時の状況を思い出しているのか、苦痛の表情をしていた。という事件だったのか知りたいが、御三方の表情を見るとあまり思い出たくない事件のようだ

「分かりました。それで、私たちを呼んだのはその大將の事を聞

くためでしょうか？」

艦長^{母さん}が話を本題に持っていく。ただ、写真を見せてマミヤ大将の事を話すだけで僕達を呼ぶわけではない。ということは、あの御仁を僕達が捜している情報を得て、それを確かめるために呼んだという事なのだろう

「・・・・・・・・それもあるわ」

「これを見せてくれ」

ラルゴ元帥がそう言ってモニターを操作すると、ロボ＝ヴァーヴォンの映像が映し出された

「ロボ＝ヴァーヴォンですね・・・・・・・・？」

「ああ、そうだ」

「この男はA+の魔導師だが、AAA魔導師をも凌ぐ実力者だ。その男をいとも簡単にこういう状態にした人物は相当な魔導師であると推定される」

A+魔導師のロボ＝ヴァーヴォンを重症にするほどの人物。恐らく、あの御仁のような人物だろう。しかし・・・・・・・・

「しかし、ロブ＝ヴァーヴォンの調査は私たちではなく、他の部署の管轄では………?」

「それは知っているよ」

「この男を倒した相手………それを探し出してもらいたいのさ」

「ヴァーヴォンを倒した相手………まさか!？」

一人、思い当る人物が頭を過つたため、御三方を見つめた。御三方は正解だと言わんばかりに頷くと

「この男から聞いた倒した相手の特徴が、マミヤ大将と似ていたのだ」

「そして、あなた達の話の御仁の特徴もマミヤ大将に似ているのよ。だから、わたし達は確信したわ」

「マミヤ大将は生きている。そして、今、自分の出身地である地球にいます………」

「………」

僕と艦長は驚きを隠せないでいた。御三方が人目を憚らず涙を出しておられたからだ。その様子を見ると、マミヤ大将は御三方に

とってかけがえのない御方であるのだろつと予想ができる。そして、その後の言つである言葉も……………」

「……………あなた達に命じます」

「あの御仁を……………」

「マミヤ大將を極秘に私たちの下へ連れてきてくれ」

「はっ！」

僕と艦長^{母さん}は敬礼をして返事をする。御三方はその様子に笑顔になつて頷くと

「ただし、これは重要な案件ではない」

「他に重要な案件がでたならば、その命令は無視しても良い」

「お願いね」

「はい」

と言うと、モニターが消えた。僕と艦長^{母さん}はしばらく敬礼をして会議室を後にする

「必ず見つけましょう、クロノ」

「はい」

出向準備をするため、僕と艦長^{母さん}はアースラへと向かった。目的地は第九十七管理外世界・現地惑星名称『地球』……そこに目的の人物がいるらしい、あの御三方の師匠的存在のマミヤ大将とはどんな人物なのだろう。会って話したいものだ……

……第三者SIDE……

クロノ達が三提督とお話をしている頃、なのはは無事、高町家へ帰ってきました。もちろん、フェレット（笑）も一緒に

「……………（じ）」

「ゆ、ゆきちゃん……………?」

そのフェレット（笑）を見た桃子が興奮しているのを家族総掛りで宥めた後、ゆきとなのはがフェレット（笑）と自分達の部屋に入ってから十分。ゆきはフェレット(?)を抱えるのはを見続けていました

「お姉ちゃん……………一体、何があったの?」

「え？ な、何にもないよ？」

ようやく、口を開いたゆきの問いになのはは動揺しながらも何もなかったと答えます

「嘘だよね……？ 私の目をよく見てお姉ちゃん。一体、何があったの？」

「う……つ。　そ、それは……」

「それは……？」

ゆきはその態度に嘘と決め付けて、なのはに問いただすような眼つきでなのはを見つめます。　なのはがそれに動揺しながら話をしようとする

「そ、それは僕からお話しします」

「ユーノ君！」

「ふえ、フェレットが喋った！？」

突然、なのはが抱えていたフェレット（笑）から男の子の声が聞こえてきたのでゆきは驚いてしまいました。　しばらく驚いていたゆきだったが、ようやく落ち着きを取り戻して

「フェレットさんのお名前ってユーノ君って言っの?」

とフェレット（笑）に尋ねます

「あつ、はい」

「良い名前だね」

「あ、ありがとうございます」

呆氣にとられたフェレット（笑）は何故かお礼を言ってしまいました

「それで、何があつたの?」

「あ、はい。簡潔に説明すると」

ゆきの問いにフェレット（笑）は我に返り、今までの出来事を話していきました

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゆきちゃん・・・・・・・・?」

「お姉ちゃんは・・・・・・・・どう思ってるの？」

「わ、私はユーノ君を助けたいと思ってる」

「そうなんだ・・・・・・・・」

ゆきはなのはの想いを聞いて頷くと黙りこんでしまいました。な
のはとフェレット（笑）はその様子に心配そうな表情をします

「・・・・・・・・わ、私は正直やってほしくないと思ってる」

「ゆきちゃん・・・・・・・・」

俯いていたゆきがそう話を切り出したため、なのはは名前を呟くしかできませんでした。でも、ゆきの次の言葉になのはは笑顔になります

「でも、お姉ちゃんがそう決めたんなら、私は止めない。 ううん、何もできないかもしれないけど、私はお姉ちゃんを応援したいと思うよ」

「ゆきちゃん、ありがとう」

「ううん。 お姉ちゃん、がんばってね」

「うん」

「すみません、僕のせいで」

フレット（笑）はその姉妹のやりとりを見て、自分の不始末のせいでなのは巻き込んでしまったことを謝ります

「ユーノ君のせいじゃないよ」

「そうそう。私たちがユーノ君を助けたいと思ったただけなんだから」

「……ありがとうございます。あ、そのお礼ではないんですが、コレを」

「これは………?」

フレット（笑）は首に掲げていた翠色の宝石をゆきに渡した

「これは僕が初めて作ったデヴァイスです」

「え？ いいの?」

「はい。ですが、通信手段にしか使えませんが」

「ううん。それでも、嬉しい」

ゆきは翠色の宝石を見つめて笑顔になります。　なのはとお揃いというだけでゆきは嬉しいだけです……

「じゃ、続きは明日にして寝ようか？」

「うん、ユーノ君、お休み」

「はい、おやすみなさい」

寝る時間になったため、二人は宝石をハンカチの上に置き、ベットに入ってエレット（笑）に挨拶をすると眠り始めました。フェレットも用意された籠の中でスヤスヤと眠り始めます。　こうして、なのはとゆきにとって色々あった一日目は過ぎて行きました

……??? SIDE……

数時間前、俺たち『コーリア』のアジトに管理局が突入してきた。返り討ちにしようかと思っただが、数が半端なく多かったため逃げることにできずにいる

「ちつ。　おい、捕まってないのは俺とお前だけか………?」

「へいー!」

今現在、管理局に捕まってないのは俺とミル「アーシルだけか・・・くそつ。何故、この場所がバレたんだ？ まあ、良い。ここは管理局のクズどもには見つかる事はないから、しばらくここでアイツらが消えるのを待つことにするか・・・

「ここでしばらく籠る。ここは絶対見つかる事はない。ここを知っているのは俺とお前だけだからな」

「へ、へい・・・しかし、お頭。何故、ここがバレたんでしょうか・・・？」

「分からん。だが、ここを知らせてきた裏切り者がいるということだろう」

「ま、まさか・・・ロブ兄貴が・・・？」

「・・・多分、そうだろう。ここに戻ってこないところ見るとな。まあ、良い。ここを無事に出たらロブごと管理局を潰せば良いんだからな。ここは無事に逃げ切る事だけを考えるぞ」

「へ、へい」

俺はそう言つと眼を瞑つた。くそ・・・ロブの野郎・・・覚えておけよ！ここを無事に脱出できて、なのはとはやてを洗脳したら管理局諸共潰してやるからな・・・！

.....SIDE END.....

第十六話 「極秘任務、そして……」(後書き)

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「」「座談会」「」

雪

「えっと、今回は裏の物語です」

信慈

「なあ、作者」

雪

「何でしょうか？」

信慈

「何か、主要メンバーの一人がまだ出てないのに他のメンバーが次々に出てくるってどうよ？」

雪

「そ、そこは触れないでいただきたいです」

ゆき

「ええ！？」

信慈

「はぁ……ま、まあ、良いよ。で、で、何故か爺ちゃんの名前が出てきたんだけど？」

雪

「はははは、何故でしょう………（汗）」

ゆき

「知っていても喋りたくないみたい」

信慈

「はあ………それはおいおい分かってくるだろうから、良いよ」

雪

「すみません」

ゆき

「では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

雪

「仕切られた………——orz」

ゆき

「この小説を読んでくださる方々に感謝をなの」

信慈

「感想・質問は随時受け付けてるぞ」

ゆき&信慈

「「次回もお楽しみに」」

第十七話 「ジュエルシード発動、そして……」(前書き)

雪

「遅くなりましたが、第十七話、更新です」

信慈

「マーボーさん、ヒョウガさん、感想ありがとうございます」

ゆき

「では本編をどうぞなの」

第十七話 「ジュエルシード発動、そして……………」

管理局に悪者を送ってから一週間。　なのは達を狙う輩は今だ現れる気配がない。　恐らく管理局が動いてくれたのだろう

しかし、油断は禁物だ。　相手は俺と同じ転生者……………必ず仕掛けてくるだろう……………

「さて、今夜も大丈夫そうだな」

「はい。　しかし、なのは様は大分お疲れの様子ですね」

「ああ。　まあ、ここ数日、立て続けに大きな魔法を行使せざる負えなかったからな」

俺は『影』で気配を消して、レイジングハートを引きずりながら帰るなのはを見守っている。　しかし、仕方がないとは言え、少しがんびり過ぎな気がするな……………

なのはを助けたら良いと思うかもしれないが、俺はまだ管理局に会うわけにはいかないため、見守ることしかできない。　まあ、命の危険がある場合は助けるがな

「ふう……………よし、帰るか」

「はい」

なのはが無事(?)に家に帰っていくのを確認したため、俺は自分の家に帰る。 ジュエルーシードはあと十六個か……………

「信慈君、行くで」

「はぁ……………」

今日は士郎さんがコーチ兼オーナーを務めるサッカーチーム(翠屋JFCだったかな)の試合の日。 それをはやてはなのは達と応援しに行くということを約束していたらしい。 で、俺も半ば強制的に応援しに行くことになった

「俺はサッカーより野球の方が良いんだが……………」

「文句言わんと、はよ行こ?」

「はぁ・・・・・・・・・・」

俺は物凄く長いため息を吐くと、なのは達と約束した待ち合わせ場所にはやてと向かった

……ゆきSIDE……

「なのは、朝だよ。そろそろ起きなきゃ。ゆきはもう起きてるよ」

「今日は、日曜だし・・・・・・・・・・もうちょっとお寝坊させて」

「なのは、なのは、な」

今日はうちのお父さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチーム・翠屋JFCの試合の日。それをアリサちゃん達、皆で応援しようねって約束していたんだけど、お姉ちゃんがいつもよりもダルそうにしています。昨日もジュエルシードの封印しに行っだし、疲れてるのかな・・・・・・・・・・？

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫・・・・・・・・・・」

「なのは、今日はとりあえず、ゆっくり休んだ方が良さよ」

「うん。でも……………」

「今日はお休み。もう五つも集めてもらったんだから。少しは休まないと持たないよ」

ユーノ君と出会って一週間。お姉ちゃんは、朝に魔法の練習、夕方と夜にユーノ君とジュエルシード探しを休まずしていました。私はお姉ちゃんのように封印が、ユーノ君のように魔法のサポートができないけど……………わたしにもできることはあります

「お姉ちゃん、ユーノ君の言う通りにしよ。それに今日は約束があるんだし……………」

という風にお姉ちゃんとお話ができます。私とのお話によってお姉ちゃんの心が少しでも和らげられたら良いなあ……………

「うん。じゃあ、今日はちょっとだけジュエルシード探しは休憩ってことで」

「うん」

それから、私とお姉ちゃんはお父さんと一旦別れ、アリサちゃん達が待っている待ち合わせ場所に向かいました

「はぁ……サッカーより野球が良かったけどなぁ……」

河川敷のグラウンドの応援席で、信慈君が何度目かの言葉を呟いています。　　というか今日は、そればかり言ってるね、信慈君

「信慈、愚痴るのは構わないけど、ちゃんと応援はしなさいよ！」

「へいへい」

「信慈君、へいは一回や」

「へい」

「はぁ……もう良いわ」

「「「はははは」」」

いつも通りの信慈君とはやてちゃんとアリサちゃんのやりとり思わず笑ってしまいました。ふと、お姉ちゃんを見ると、心から楽しんでいるように見えます。一先ず、良かったかな

「さて、応援席も埋まってきたようですし……そろそろ試合を始めますか」

「ですな」

六人でワイワイしていると選手の皆さんが真ん中に集まりました。いよいよ、試合の開始みたいです。皆、がんばって

……SIDE END……

ホイッスルが吹かれてサッカーの試合が始まって十分、土郎さんのチームが先制点を取る。ま、折角応援しにきたんだから、土郎さんのチームが勝って欲しいのでこれは嬉しい

「これってこっちの世界のスポーツなんだよね？」

「うん、そうだよ」

「サッカーって言うの」

で、俺の隣では、なのはとゆきがユーノと話をしている。という

か、君たち秘匿回線でやりなさいよ……

【ゆきはユーノの作ったデヴァイスにより、念話での会話が可能で
す】

試合は後半戦に突入。 得点は1対0で折り返し、翠屋JFCがリードしている

「ユーノ君の世界にはこういうスポーツとかあるの？」

「あるよ。 僕は研究と発掘ばかりであんまりやってなかったけど」

「にははは、私たちと一緒にだ」

「スポーツはちょっと苦手」

というか、この念話の垂れ流し状態はどうにかならないかな……

・・・ ま、どうでも良いけど・・・

「このまま行けば、こちらの勝ちね」

「このまま行けばな」

「何よ、信慈。 勝ってほしくないの？」

「いや、俺は最後まで油断はするなと言ってるんだよ」

「あれ？ 何かあったみたいや」

アリサと話をしていると、グラウンドを見つめていたはやてが声をあげる。視線を戻すと、グラウンドの真ん中で人だかりができていた。その中心に土郎さんと脚を押さえている男子が見える。ユニホームはうちのものだな・・・

「どうやら、うちのチームの一人がケガをしたみたいだな」

「え？ 大丈夫かな？」

「まっ、大丈夫だろ。 代わりのメンバーがいるんだし」

「そうだよな。 なら、大丈夫かな」

「ああ（だが、物凄く嫌な予感が・・・）」

嫌な予感を感じながらなのはとゆきの問いに答えていると、土郎さんが脚を怪我した男子をベンチに座らしてからこっちに向かって歩いてきた。　　はぁ・・・・・・・・予感的中つか・・・・・・・・

「信慈k」

「嫌です」

「・・・・・・・・まだ何も言ってないよ（苦笑）」

「言わなくても分かります。俺に代わりにでて欲しいってことですよね？　絶対に嫌です」

「そこを何とか。代わりのメンバーがいらないんだよ」

そう言われても嫌なものは嫌だ。　ルールは授業でやったから知ってるけど

「面白そうね。　信慈、アンタ出たら？」

「そつだよ、信慈君。　絶対やった方が良いよ」

「「信慈君、がんばって」」

いや、あのね、君たち。　俺はサッカーより野球が好きなんだって・

.....

「頼むよ、信慈君。 ロスタイムを含めて後半残り二十五分だけで良いから」

「もうやるしかないんじゃない、信慈君？ これも人助けや」

はあ.....やれば良いんでしょ、やれば.....

「分かりましたよ」

「助かるよ」

俺は渋々了承し、予備のユニホームを借りて着替えると、グラウンドに向かった

.....ゆきSIDE.....

信慈君がお父さんの頼みで助っ人としてグラウンドに向かっていきます。 でも、その顔は何だかやる気がないように見えます

「信慈君はサッカーに興味ないみたいだね？」

「そうだね。 そういえば体育の授業でも、極力ボールに触らない

ようにしていたよな……」

お姉ちゃんの質問に頷くと、前に授業での信慈君を思い出しました。

あ、そうそう。そのことを尋ねたら、信慈君は

「まあ、信慈君はサッカーより野球が好きやからな」

はやてちゃんが言っていた風な感じのことを言っていました

「あつ。試合が再開されるよ」

信慈君が怪我をした子のポジションに着くとホイッスルが吹かれて試合が開始されました。最初にボールに触れたのは、信慈君。そして、以前の授業の時のように、マークが外れたチームメイトの子にパス。パスした信慈君はゆっくりと相手陣地に走っていきます

「何よ。すぐにパスするなんて面白くないわね。どうせなら、五人抜きでもしなさいよ」

「にやははは。やっぱり信慈君はあまり目立ちたくないみたいだね」

「そつだね」

「でも、的確にパスしているところは信慈君らしいね」

「そっやな」

【ピイイイイイイイ！】

私たちが信慈君について喋っていると、パスされた子がディフェンスを抜き、そのままシュートしてゴール

「これで2点目だね」

「うん」

「それにしても、信慈もあの子みたいにできないのかしら……」

「ふふ、アリサちゃん。そればかりだね」

「な、何よ、すずか。悪い？／＼／＼／＼」

「ふふ、全然」

「「ははははは」」

「むう……」

顔を赤くしたアリサちゃんが不機嫌に頬を膨らませてしまいました。

でも、そんなアリサちゃんは可愛い

ふと視線を戻すと、信慈君が少ない動作で相手チームからボールを奪っていました。そして、すぐさまフリーのチームメイトにパスして自分はゆっくりと相手陣地に走っていきます

【ピイイイイイイイイ！！】

意表をつかれた相手チームの動きが止まった隙にパスされた子がゴール

これで3点目

「流石、信慈君だね」

「そうやね」

「動きは凄いけど、もう少し楽しそうな顔をして欲しいわ」

「「にやははは、そうだね」」

充分に活躍している信慈君だけど、物凄くやる気のない顔をしています。アリサちゃんの言う通り、もう少し楽しそうな顔をして欲しいけど、あれが信慈君だもんね。仕方がないかな

信慈君の巧みなアシストでその後も2点ゴールを決め、試合は5対0で翠屋JFCの圧勝でした

「もうでませんよ、士郎さん」

「はは、それは残念。でも、今日は助かったよ」

その功労者である信慈君はお父さんと仲良く話をしています。そんなことを言ってるお父さんの顔を見ると、あれは今後も信慈君に何かを頼む顔をしてるけど……

「……（じー）」

「キュツ……」

「……にはははは（苦笑）」

現在、私たちは翠屋JFCの祝勝会のため、翠屋にきています。で、その店の外のテーブルにいるんだけど、アリサちゃん達にじー

つと見つめられてユーノ君が緊張しています。 さ、三人とも、ちよつと見過ぎなの……

「それにしても改めて見ると、何かこの子フレットとはちょっと違う？」

「「（ビクッ!）」」

「そう言えばそうやな」

「動物病院の院長先生も変わった子だねって言ってたし」

す、鋭い………三人とも鋭いよ………

「ああ、えっと。 まあ、ちよつと変わったフレットってことで
（苦笑）」 ゆき

「ほら、ユーノ君。 お手」 なのは

「キュッ」

「「うわ」」

「偉いぞ、こいつ」

ああ、アリサちゃんそんなにしたら

「なのは、ゆき、助けて」

「が、我慢だよ、ユーノ君」

「そ、そんな」

「」「」「」「ありがとうございます」「」「」

アリサちゃんにもみくちゃんにされているユーノ君を見守っているとチームの皆が店から出てきました。どうやら、祝勝会が終わったようです。その人たちに遅れてお父さんと信慈君も出てきました

……ゆきSIDE……

「はやて、帰るぞ」

「あ、うん。じゃ皆、また明日や」

「」「」「また明日」「」「」

俺は店から出ると、皆に挨拶をしてはやてと帰路につく。しかし、今日は疲れたな

「信慈君、今日は大活躍やったね」

「ああ。だが、もうやらんぞ」

「はは、そう言ってもやってしまっくんが、信慈君や　そうやる？」

「うるせえよ」

「はははは」

そんなことを喋りながら家につく。家には誰にもいなかった。
ああ、そう言えば母さんは出張だったわけ……

そう思いながら、はやてを居間に座らしてから、車椅子の車輪の汚れを落としていると……

「旦那様……」

「ああ、分かってる」

ジュエルシードの発動を感じた俺は、車椅子を持って居間へと向かう

「はやて、ちょっと出掛けてくるわ。夕食の支度は任せた！」

「はいな！　信慈君、いつてらっしゃい」

「おう」

車椅子をそばに置くと、はやてに出掛ける旨を伝えて家を出る

「『影』、『纏』……………ライト、セットアップ」

「Yes , set up」

「さあて、行くかの」

「はい」

バリアジケットに身を包んだわしは、反応のあった場所へと向かった。何事もなければ良いのじゃが……………

「これは……………」

現場に着いたわしはあまりの酷さに言葉を失った

「街全体に広がってるみたいじゃな」

「はい」

巨大な樹木は、ビル二十階ぐらいの高さまで成長しており、その大きな根が街中に張り巡らされている。さて、封印はなのはに任せるとして、わしは……………

「ライト、巻き込まれた者はいるかい？」

「……………いました。戌亥の方角に三名の反応があります」

「うむ。急がねばな」

「はい」

急いで巻き込まれた者達がいるという戌亥の方角、北西に向かうと、アリサとすずかが樹木の根に絡まっているのが見えた。根群の下にはリムジンがあり、一人の男性（恐らく、執事の鮫島さんじゃろ）が二人をどうにか助けようとがんばっている様子じゃな。というか、二人はつくづく……………

……アリサSIDE……

私の車ですずかと稽古に向かっている途中、突然地面から巨大な根っこが生え出してきた。鮫島の機転で何とか車から脱出した私たちだったけど、運悪く根っこに絡まって根っこと一緒に上へと押し上げられてしまう

「な、何よ、これは!？」

「木の根っこだよ、アリサちゃん」

「それは知ってるわよ!　って何で冷静なのよ、すずかは!？」

この状況で冷静なんておかしくない!？」

「うーん、分からない。でも、何だか助かるような気がするののは確かだよ」

「何よ、そ」

「つくづく、何かに巻き込まれる嬢ちゃん達じゃのう」

「だ」　　「ええ!？」

「そ、空を飛んでる……………」

私がすずかに文句を言おうとした時、突然上空から声がかかったからそちらを向いたら、誘拐された時に助けてくれたお爺さんが空を飛んでいたため、思わず声を上げてしまった。　な、何なのよ、一体・・・・・・・・

「ふう・・・・・・・・まあ、良い。　ちょっと、動くでないぞ」

「「え？」」

飛んでいることに驚いていると、お爺さんがそう告げて持っていた刀を構える。　え、まさか！？

【シュバババババ】

「「きゃあ！？　つて、あれ？」」

「よく動かなかったの。　えらいのう」

思った通り絡まっていた根っこを切り裂いていく。　思わず、声を上げそうになったけど、切れていたのは根っこだけで、私たちの身体には何一つ傷がなかった

そして、私たちを抱きかかえたお爺さんに器用に頭を撫でられる。

あ、何だか眠く・・・・・・・・

「あちらさんも終わったようじゃ。安心して眠りなさい」

その言葉を最後に私は意識を手放した

……SIDE END……

「……………（すうすう）」

「……………眠ったようじゃの」

「はい、旦那様」

わしは二人を眠らすと、巨大な樹木が消えていくのを確認していく。
時間はかかったが、封印はできたみたいじゃな

全て消えたことを確認したワシは

「その御方は二人の知り合いかね？」

この二人を黙って見守っていた鮫島さんに預けるため、声をかける

「あ、はい。どなたかは存じませんが、お嬢様方をお助けいただきありがとうございます」

「いや、お礼は良い。 さて、二人を頼めるかい？」

「はい」

わしは二人を預けると、なのは達の様子を見に向かった

……ゆきSIDE……

ジュエルシードの反応が消えても、お姉ちゃんがなかなか帰ってこないで、ユーノ君に聞いたビルの屋上に迎えに行きました。すると、お姉ちゃんがぼーっとして体育座りをしていました。 どうしたのかな………？

「お姉ちゃん………？」

「あつ、ゆきちゃん………」

「どうしたの？」

「うん、ちょっとね………」

お姉ちゃんは沈んでいく夕陽を見ながら淡々と話し始めました

「………私、気付いてたんだ………あのゴールキーパ

「の子が持つてるの……でも、気のせいだって思っちゃった……」

「お姉ちゃん……」

ここに来る途中に見たあの現状は酷いものだった。お姉ちゃんの気持ちは分かるから、何て声をかけて良いのか分かりません。でも、お姉ちゃんが落ち込むと私は悲しい……。だから、お姉ちゃんには元気にいて欲しいの……

「な」

「お嬢ちゃん達はここで何をしとるのかの？」

「「「!?!?!」」」

ユーノ君がお姉ちゃんに声をかけようとした時、後ろから誰かの声がしたため、驚いてしまいました。恐る恐る振り返ると、そこにいたのはモップを持ったお爺さんだった。い、いつの間にそこに……?

「ここはお嬢ちゃん達のような娘がくるところではないぞい」

「あつ、す、すみません！ 行こ、ゆきちゃん」

「あ、待ってお姉ちゃん ユーノ君」

「あ、うん」

お爺さんの言葉に、お姉ちゃんが慌てて階段の方へ向かいます。
それを追いかけるため、ユーノ君を肩に乗せて歩き出そうとした時

「ちょっと待ちなさい」

「あ、はい」

お爺さんがお姉ちゃんを呼び止めました。そして、お爺さんが帽子のツバに手をかけながら

「お嬢ちゃんが何を落ち込んでいるのかしらないがの。わしらは
万能な神ではなく、人間じゃ」

「え？」

そう話を切り出したので、思わず疑問の声を上げてしまいます。
ど、どうということかな・・・・・・・・・・?

「人間は不完全な生き物じゃ。だから、失敗をしてしまうことだ
つてある」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

疑問に思うち、お爺さんは淡々と話し続けました。何だか聴かないといけないような気がした私とお姉ちゃんはお爺さんの言葉に耳を傾けていきます

「しかし、人間というものはその失敗を糧として次に生かすこともできるのじゃよ。お嬢ちゃん、後悔をするのは大いに結構じゃが、それだけで終わってはダメじゃ。同じことを繰り返さないように教訓にしないとう。ま、お嬢ちゃんはまだまだ若い、失敗を何回もするじゃろ。でも、そのことに恐れずに前に進みなされ。さて、長話が過ぎたようじゃ。さ、遅くなる前に帰りなさい」

「・・・・・・・・はい」

私たちはお爺さんにお辞儀をすると屋上を後にしました

「ゆきちゃん、私決めたよ」

「お姉ちゃん？」

ビルからの帰り道。お爺さんの言葉を頭の中で反芻しながら歩いていると、お姉ちゃんがそう告げてきました。何を決めたのかな・
・・・・・？

「今までの私はユーノ君のお手伝いとしてジュエルシード探しをしてた。でも、これからは私自身の意志でジュエルシード探しをしたい。もう、こんな悲劇を出さないように・・・・・」

「なのは・・・・・」

「だから、もっと魔法の勉強をする。ユーノ君、先生をお願いね」

「うん！」

「お姉ちゃん、がんばってね」

「うん！ 高町なのは、がんばります！」

夕陽にそう宣言したお姉ちゃんは凄く格好良く見えました。私も同じように夕陽に誓います。お姉ちゃんのため、しっかりとサポートしていくことを・・・・・

高町ゆき、がんばります！

「ユーノ君、これからよろしくね」

「うん！ こっちこそ、よろしく」

こうして、私たち三人は気持ちを新たにジュエルシード捜しをする
ことを誓い合いました

……SIDE END……

おまけ

「おい。 替えの作業服は知らんか？」

「俺がおやつさんの作業服を知るわけないじゃないですか」

「そうだな。 おつかしいなあ。 何所にもねえんだよ」

「それはおかしいですねえ……ん？ おやつさん、これじゃないんですか？」

「おつ、これだこれだ。 しかし、何故ここに？ 俺はここに置いた覚えはないぞ？」

「え？ お、おやつさん、まさかボケて……」

「違うわ、ボケ！（ドカツ！）」

「い、痛いっすよ、おやつさん。そ、そんなに強くぶたなくても良いじゃないですかあ」

「うるさい！ さつさと着替えて作業に戻るぞ！」

「へい、分かりやした（たく、都合が悪くなるというつもりだ）」

「ん？ 何か言ったか？」

「いえ、何も！」

「そうか、それなら良い。ほら、行くぞ」

「へ、へい」

第十七話 「ジュエルシード発動、そして……」(後書き)

雪「雪と！」 ゆき「ゆきと！」 信慈「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「」「座談会」「」

雪

「今回は原作第三話のお話です」

信慈

「サッカーは二度とやらん」

ゆき

「ええ、何で？」

雪

「ははは(苦笑)」

信慈

「はぁ……もう良い。 さて、とりあえず無事に封印できて良かったじゃないか」

ゆき

「でも、お姉ちゃんは失敗したって思ってるの」

信慈

「まあ、それは仕方がない。 でも、お爺さんの言葉で気持ちを新たにすると決めたんだろ？ これから、がんばれば良いんだよ」

ゆき

「うん」

雪

「・・・・・・・・・・・・・・・・（貴方の言葉でしょ、貴方の）」

信慈

「（作者が何か言いたげだが、無視だ）しかし、さすがとアリサはつくづく、巻き込まれる二人だな」

雪

「ははは（苦笑）」

ゆき

「そっなの？」

信慈

「まあな」

ゆき

「でもでも、無事で良かったの」

信慈

「ああ、車から脱出したのが良かったのかもな」

ゆき

「鮫島さんの機転のお陰だね」

信慈

「ああ」

雪

「さて、この辺で座談会を終わりにしましょう」

ゆき&信慈

「「うん（ああ）」」

雪

「この小説を読んでくださる方々に感謝を」

信慈

「感想・質問等は随時、受け付けてるぞ」

ゆき

「お願いします」

雪

「次回は遂にあの少女が出てきます」

ゆき

「あの少女って誰？」

雪

「それは次回のお楽しみです」

ゆき

「むう、教えてくれてm むぐうつ!？」

信慈

「では、次回もお楽しみに」

ゆき

「む、むぐう」(お楽しみに)」

第十八話 「アルフとのエンカウト、そして……」(前書き)

雪

「第十八話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、マーボーさん、感想ありがとう」

ゆき

「では本編をどうぞ」

第十八話 「アルフとのエンカウント、そして……………」

……… 第三者SIDE ……

「艦長！ 第三部隊、撃墜されました！」

「第三部隊を収艦！ 第四部隊、出撃させる！」

「はい！」

「……………これは、一体……………」

ある無人世界で任務に当たっていたオートマ艦艦長・ウッド・レイ
ンズは驚いていました。それは、昨日までコウキィ・ダークネスと
ミル・アーシルを搜索していた第一部隊と第二部隊の隊員たちが、
突如として反旗を翻し、こちらに攻撃をしかけてきたからです

「第三部隊、収艦できません！ 何者かに邪魔されております！」

「何だと……………」

ウッドが顔を歪ませていると、艦内全てのモニターに一人の男が映
しだされました

『ふはははは、管理局の諸君。 味方のはずの者から攻撃を喰らう

というのはどんな気持ちかな？」

「・・・・・・・・貴様がコウキィ・ダークネスか・・・・・・・・！」

モニターの男・コウキは不敵な笑みを浮かべます。ウッドは顔を更に歪ませながら、コウキの傍らに映る隊員たちを見つめていました。隊員たちの目には生気が一切感じられず、淡々と味方である第四部隊を攻撃していたのです

「私の部下たち一体、何をした・・・・・・・・？」

『ただの洗脳だよ、洗脳。一週間かかったが、お前らの隊員たちは俺らの指示に従うだけの人形になっただけのさ。さあて、俺らは行かなくちゃいけないところがあるのでな。ここら辺でお前達にはおさらばしてもらおうか』

「何・・・・・・・・？ それはどういこと　ふう。通信を切ったか・・・・・・・・」

ウッドはコウキの言葉に身を乗りだしてどういことなのか聞こうとするが、通信を切られたため椅子に座り直しました

「艦長！　大量の魔力が集束してってます！」

「何だって！？」

部下がそう報告してきたため、モニターに視線を戻すと、コウキを中心に全ての隊員が入れるほどの巨大な魔方陣が展開していました

『うわっ!?!』

『な、何だ!?!』

『す、吸い込ま』

すると、魔方陣内の全ての隊員たちが徐々に魔方陣に吸い込まれていき、それに呼応するかのようにデバイスから魔法球が現れて大きくなっていきます

「あ、あの魔法は……………」

それを見たウッドは息を飲みました。そして、モニターを見つめたまま

「……………任務失敗か……………」

と呟きました

一旦、眼を瞑ったウッドは両手の薬指にはめた対の指輪に艦橋にい

ブリッジ

る隊員たちに気付かれないように念話します

「ヘイル、スリート。 コウキにバレないように俺以外の全ての隊員及び犯罪者を他艦まで転移させる。 できるか？」

「Of course」

「But」

「私のことならかわん。 今なら転移障害はないだろう、やれ！」

「Yes , master」

対の指輪が輝くと、ウッド以外の艦内にいる者全ての足元に魔方陣が展開されました

『『『『『!! 艦長!?!?』』』』』

「. あれはこのオートマ艦搭載の全てを使っても防ぎようがない魔法だ。 だが、死ぬのは私だけで良い。 今までありがとうな」

『『『『『艦C』』』』』

「Completion」

ブリッジ
艦橋及び艦内中の全ての者が転移され、オートマ艦にはウツドのみが残されました

『じゃあな』

オートマ艦にウツドしかいないことに気付かず、コウキは充填し終えた魔法球を放ちます。ウツドはそれを確認すると、懐から一枚の写真を取りだして

「……………すまないな、エディ。お前との約束は守れそうにはない。お前の分まで生きて犯罪者を捕まえる約束を……………」

「

と呟くと目を瞑りました。その後、巨大な魔法球がオートマ艦ごと、ウツドを呑み込んでいきます。そして、跡形も残さず消えてしまいました

……………コウキSIDE……………

「ミル、完了だ。このまま、目的の場所へ転移して時期がくるまで隠れてろ。時期は追って伝える。その時は手はず通り、八神はやてを拉致するんだ、いいな」

「へ、へい」

邪魔な管理局の艦が消えたのを確認した俺は、ミルを先に地球に行かして隠れさせる

決行は原作第五話、温泉旅行の日だ。それまで俺は魔力の回復に務めないとな。あの魔法・マジックボールは俺の魔力を核に周囲の者の魔力（生命力）を全て取りこんで巨大な魔力球を作って放つ砲撃魔法（イメージは元氣玉）だ。それを使用すると一定期間魔力が少なくなるから、あんまり使いたくなかったがな

まあ、良い………時間はまだある。待つてろよ、高町なのは、フェイト・テストロッサ、八神はやて。必ず俺の者にしてやるからな

【この時のコウキはあんな事態になるとは露とも思っていないませんでした】

………第三者SIDE………

「……………」

コウキがオートマ艦を撃破してから一週間後。とあるビルの屋上に金髪の少女とオレンジの狼が降り立ちました

「……………ロストロギアはこの付近にあるんだね？」

屋上から町並みを見つめていた少女が誰かに話すように口を開きます

「形態は青い宝石。一般呼称はジュエルシード。そうだね、
すぐに手に入れるよ」

「わお〜ん!」

少女の言葉に同意するかのように狼が遠吠えをします

そして夜は、静かに更けていきました

…… S I D E E N D ……

【次の日】

今日はすずかの家でお茶会の予定だ。俺はいつもの通り、強制参加ではやてを連れて月村家に向かった

「で、ここがその月村家だ」

「信慈君、誰に言っとんのや」

「ん？ いや、何でもない。よし、入るか」

「うん」

【ピンポン】

インターフォンを押して少し待っていると、ドアが開いて一人のメイドさんがでくる。月村家メイド長のノエルだった

「信慈様、はやてお嬢さま。いらっしやいませ」

「こんにちは」

「どうも」

「どうぞ。こちらです」

ノエルさんの後をついて行くと、一つの部屋に案内された。ここはテラス、か……

「あ。信慈君、はやてちゃん」

「あ、もう皆きとったんやね」

「うん」

中へと入ると、なのはとゆきが声をかけてきた。アリスもいるということは、俺らが最後……

「信慈、元氣そうだな」

「あ、はい。 恭也さん、お久しぶりです」

入口の方にいた恭也さんが声をかけてきたのでそちらを向いて返事をする。 恭也さんとは三年生になってから会う機会がなかったが、元氣そうで何よりだ。 ちなみに恭也さんは原作通り、忍さんと付き合っているぞ

「では、お茶をご用意いたしましょう。 何がよろしいですか？」

「まかせるよ」

「「私たちもおまかせします」」

「信慈様とはやてお嬢さまは？」

「俺らもおまかせで良いですよ。 なあ、はやて」

「うん」

ノエルさんにお茶の希望を聞かれたのでそう答える。 全員の希望を聞いたノエルさんは

「かしこまりました。　ファリン」

「はい、了解です。　お姉さま」

とファリンさんと呼んだ。　すると、忍さんが恭也さんの手を取って

「じゃあ、私と恭也は部屋にいるから」

「はい。　そちらにお持ちします」

ノエルさんにそう伝えてテラスを後にする。　そして、ノエルさんとファリンさんも一礼してテラスからでいった

「おはよう」

「「「おはよう」「」」

「うっす」

俺らが席につくとアリサが挨拶してきたので、挨拶を返した

「ライト、何か動きはあったか？」

「いいえ、今だ動く気配はありません」

「そうか……………」

はやて達がしゃべっているのを聞きながら、ライトに念話をする

一週間前（なのはとゆきを励ました日の夜）、何者かが転移してきた。すぐに臨戦態勢をとったが、しばらく経っても攻撃をしてくる気配がない。気のせいではないということは分かっているのだから行こうとしたが、猫姉妹の監視が頻繁になってそれをかい潜るのは面倒なので仕掛けてくるのを待つことにした。それから一週間、未だに動きを見せないということは、時期を待っているということか……………まあ、考えても仕方がない。いつでも動けるようにしておくか……………

「引き続き、警戒はしておいてくれ」

「かしこまりました」

ライトに指示をだして念話を終了した時

「キュー……………ッ!!」

ユーノの悲鳴がしたため、そちらを向くとユーノが猫に追いかけていた。何やってんだ、アイツは……………?

「わああ!？」　なのは

「ユーノ君!？」　ゆき

「あ、アイン。　ダメだよ!」

「はい、お待たせしました。　紅茶と苺ミルクティとクリームチー
ーズクッキーです」

なのはとゆきとすずかの三人が驚いて立ち上がると、そこにお茶の用意をしていたファリンさんがやってくる。　丁度その時、ユーノと猫（アイン）がファリンさんの足元に走ってきたため、ファリンさんが慌てて避けようとする

「あれは危ないな」

「そうやな。　信慈君・・・・・・・・」

「はいよ（纏）」

俺は二十歳ぐらいの姿になり、眼を回して倒れそうになったファリンさんを抱きかかえる。　そして、投げだされたお盆中ものを溢さずに受け止めた

「ふう・・・・・・・・」

「間一髪やったなあ」

「うんうん」

「信慈、よくやったわ!」

「ファリン、大丈夫?」

さすがファリンさんに声をかけると、眼を覚ましたファリンさんが勢いよく立ちあがって

「う、ごめんなさい!」

と家中に聞こえるほどの音量で謝ってきた。近くにいた俺は、その大きさに耳を押さえてしまう。な、何て大きさだよ……

ファリンさんを何とか宥めた俺らは庭のテーブルへと移動した。
そしてテーブルの周りでは数十匹の猫たちが思い思いに遊んでいる
ちなみにユーノはなのはの膝の上におり、アインは何故か俺の頭の上で寝ている

「信慈君、ごめんね。 大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

猫一匹ぐらい何ともない。 まあ、一般の猫に比べて重いがな

「しかし、相変わらずずずかん家は猫天国よね」

「そうやな」

「えへへへ」

遊んでいる猫たちを見ながらアリサがそう呟くと、はやても同意する。
確かに、この家には多くの猫がいる。 そして、どの猫も

「でも。 子猫たち、可愛いよねえ」

「うん」

生き生きとしていて元気があって可愛い。猫好きにはたまらない家だろう。ちなみに、俺は亀がすきだ

【信慈の部屋には五種類の亀がいます】

「里親が決まっている子もいるからお別れもしなきゃならないけど・
・・・・」

「そうなんや」

「ちょっと寂しいね」　なのは

「そうだね」　ゆき

はやて達三人が寂しそうな表情をするが、すずかは微笑んで

「でも、子猫たちが大きくなってきてくれるのは嬉しいよ」

と言うと、四人も微笑む

その時、ジュエルシードの気配を感じ、気付かれないようになのはとゆきの方を見ると、二人はユーノの方を見ていた。今回はちゃんと秘匿回線で話をしているのか内容は聞こえてこないが、なのはとゆきの表情を見ると、困っているのが分かる。ここで魔法を使うわけじゃないからな

仕方がないか………

『アイン、聞こえるか？』

獣語で頭の上で寝ているアインに話しかける

おお！ あんさん、わての言葉が分かるんか！？

まあな。アイン、ちょっと頼みたいことがあるんだが、良いか？

あんさんには、頭に乘せてもらつとる恩があるさかい。良かよ

そうか。じゃあ、あのフェレットを見つめてくれ

分かったわ

アインはそう言つと、立ち上がつてユーノの方を見つめて

「ニャ」

と鳴いた。すると、ユーノが

「キュッ!？」

と鳴いてなのはの膝から飛びだして森の方へと走って行ってしまっ
で、アインは任務完了とばかりにまた眠り始めた。 Goodだ、
アイン

「「ユーノ君!？」」

「あらら。 アインにまた襲われると思ったのかしら？」

「もう、アインったら……」

「まあまあ」

「あ! 私、ちょっと探してくるね!」

なのはは俺らにそう言つと、森に逃げたユーノを追いかけて行こう
とする

「一緒に行こうか？」

とすずかが心配してなのはに言つが、ゆきが立ちあがって

「大丈夫だよ。私と一緒に行くから、先に部屋で待っててね」

と笑顔で言うと、なのはと森の中へと入っていった

「さてと……………」

「どないしたんや、信慈君？」

「ん？ ああ、あの二人だけかと心配だからな。俺も行ってくるわ」

「あ、それは良いわね。じゃ、私たちはすずかの部屋で待ってるからね」

「信慈君、気をつけてね」

「はいよ」

「迷ったらあかんよ」

「へいへい」

俺はそう返事をしながら、アインをアリサに預けてなのは達を追っていった

……………はやてSIDE……………

「なのはとゆきは何を隠してるのかしら？」

信慈君が森の中へと入って行った時、アインを撫でながらアリサちゃんがそう呟いた。あたしとすずかちゃんも頷いて

「そうだね。何か、心配事があるんなら話してくれないかなあ？」

「そつやね」

と答える。信慈君は『大丈夫だと思うぞ』と言ったけど、心配なもんは心配や

「まあ。信慈が追いかけて行ったし、ここで心配しても始まらないわね。私たちは部屋で待つてましょ」

「「そうだね（そつやね）」」

あたし達は二人を信慈君に任せて部屋で待つてることにした。信慈君、二人を頼むで

……SIDE END……

「ジュエルシードが発動したみたいじゃな」

「はい」

森の中に入り、はやて達三人からこつちが見えないのを確認し、爺さんの姿になる。そして、バリアジャケットを身につけた時、ジュエルシールドが発動した気配を感じると、結界が展開された

「さて、ライト。“小銃”にフォルムチェンジじゃ」

「Yes , form change “ R I F L E ”」

わしはライトを第三形態の小銃（89式小銃、5・56mm）に変形させるとスコープを覗き込む

なのはが巨大化した猫に向かって放たれた無数の魔力の槍を広範囲障壁で防いでいるのが見えた

「今度は猫みたいじゃな」

「そのようですね」

恐らく、子猫の早く大きくなりたいという願いにジュエルシールドが反応したのじやろう。む？ 誰かがこちらに向かってくるみたいじゃな……。やれやれ、気付かれてしまったかい

「旦那様……」

「うむ。わしらはお客さんのお相手でもしよつかのう」

「はい」

ライトと会話をしながら振り返ると、そこには一人の女性が驚いた様子で立っておった

こやつは……フェイトの使い魔・アルフか……？
うゝん。なるべく逢いたくなかった相手じゃのう……
まあ、逢ってしまったのは仕方がないわい……

……アルフSIDE……

結界の中に入った時、フェイトは気付かなかったほどの小さな魔力反応を感じた。だから、フェイトと別行動をとって反応があった場所へと向かう

で、そこにいたのは、以前リニスとの勉強で見た軍人とか言う奴の格好をして白髪を後ろで纏めた爺さんだった

その爺さんが急に振り返ったから驚いてしまった。ちゃんと気配を抑えて近づいたはずなんだけど、かなり勘が鋭いみたいだね……

「だ、誰だい、アンタ？」

「わしかい？ わしはただの」

デヴァイスを待機状態に戻しながら、あたしの問いに爺さんが答える。そして、その言葉が途切れた瞬間、言いようのない強烈な殺気を浴びせられた。あたしは思わず半歩退いてしまい

ヤバい！ 殺される！ 逃げろ！

とあたしの中の野生の本能がそう告げてくる。 な、何なんだい、この爺さんは！？

「軍人じゃ」

「あ、あの子の……邪魔はさせないよ！」

爺さんがそう言いきると、益々濃密な殺気を浴びせられる。ダメだ！ 絶対勝てっこない！ 口先で威勢を張るのが精一杯だった。そして一歩も踏み出すこともできず、今すぐ逃げたいと警告を鳴らす

けど、それでも、だからこそ！ あの子の……フェイトのために！ あたしは爺さんの足止めをしなくちゃならないんだ！ す、全てはフェイトのために！ あたしの全てを賭けてでも！

「う、うおおおおっ!!」

気合と共に駆けだす。この数歩がこんなにも辛く感じるのは初めてだよ。爺さん目掛けて突きだした拳を楽々とガードされ、その勢いをそのままに腕をとられて投げられる

く……………っ!

咄嗟に半身をひねってバランスをとり、着地。そして、迫る爺さんの脇腹目掛けて蹴りをくりだすが、その足をがちりホールドされて空へと放り投げられてしまう

「く……………っ! 畜しッ はっ!」

放り投げられた勢いを殺して踏み留まって悪態を突こうとしたが、爺さんが一瞬で間合いを詰めてきたのに気付いた。咄嗟に全身を強張らせて、両腕が碎かれるのを覚悟で防御する

その防御ごと蹴落とされ、木々に突っ込んでいく。全身が傷だらけになるがそれを気にしている場合ではない

「うおおおおっ!!」

地面を勢いよく蹴り、爺さん目掛けて飛びだして連続で拳を突きだしていくが、全て受け止められてしまう。けど、これで良いんだ。

あたしはフェイトがジユエルシードを封印してくれると信じ、それまで爺さんを足止めしてれば良いんだから！

「・・・・・・・・うむ（ガシッ）」

「しま・・・・・・・・っ！」

夢中で拳をくりだしていると、両腕をがちりホールドされて身動きがとれなくなってしまうた

「・・・・・・・・・・ブラック・トータス 万年の霊甲・玄武」

「く・・・・・・・・っ！」

爺さんがそう呟くと、亀の甲羅のようなものが現れる。咄嗟に身体を強張らせたけど・・・・・・・・

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

白い霧のようなものがあたしの全身を包み込んだかと思った瞬間、全身の傷がみるみるうちに治っていく。こ、これはどういうことだい・・・・・・・・？

あたしの身体から傷が消えたのを確認した爺さんがホールドした腕

を放す

「……………どうやらあっちの戦闘が終わったようじゃ。今は金髪のお嬢さんに逢うわけにはいかんな。わしはこれで失礼する（シュッ）」

「お、おい！　爺さん！」

爺さんはそう告げると一瞬で姿を消してしまった。一体、何なんだ……………あの爺さんは……………

【アルフはその後フェイトが探しにくるまで呆然と立っていました】

……………ゆきSIDE……………

お姉ちゃんが突然現れた女の子にやられたのを見て慌てて近寄りました

「ゆ、ユーノ君。お姉ちゃん、大丈夫かな？」

「うん、大丈夫。　　気絶してるだけだよ。　　でも、傷があるから手当てしないと」

ユーノ君の言葉に少し安心しました。　ふと見ると、女の子がジュエルシードを封印してこっちを見つめているのが見えました。　し

ばらく見つめ合っていると、女の子はどっかに行ってしまいます。
お姉ちゃんをこんな目にあわせたのが許せませんでした。さっ
きの女の子の目を見たら……

って、そんなことより、お兄ちゃん達を呼んでこないと!!

「ユーノ君、結界を解除して!」

「あ、うん」

ユーノ君に結界を解除してもらい、お兄ちゃん達を呼びに行こうと
したら

『おい。なのはー、ゆきー、どこだー?』

「あ。信慈君の声だ。信慈くん、ここだよー!」

『お! こっちか!』

信慈君の声がしたので信慈君を呼びます。あ、この状況はマズい
かも! な、なんて説明しようかな……

「うむ。これはいかな」

「!?!」

その時、突然後ろから声がかかったので驚いて振り返ると、そこには軍人さんの格好をしたお爺さんがお姉ちゃんを抱きかかえていました。あ、このお爺さんは前にわたし達を励ましてくれた……

「あ、あのあの（スツ）え？」

「わしのことより、このお嬢さんの手当てをしないといかんぞい」

この前にことをお礼しようとした時、お爺さんがわたしの口元に指を持ってきてそう言いました。そうだったの！ 今はお姉ちゃんのことを考えないと！

「えっと、あつちに友達の家があります！ ユーノ君、肩に乗って

」

「う、うん」

「うむ」

私はユーノ君を肩に乗せてお爺さんをすずかちゃん家へと案内します

【ガサガサ】

その時、横の草の葉が揺れる音がして

「おっ！　ここにいたのか、ゆき！」

と信慈君がそこから顔をだしました。そして、お姉ちゃんを見て驚いて駆け寄りましたが、お爺ちゃんを見て何かを悟った表情をして

「たく、仕方がねえな」

と頭をかきながらそう言いました。そして、私にウィンクをしてお爺さんを案内していきます。ひよつとして、信慈君……

「おゝい、ゆき。置いてくぞ」

「あ、うん！」

信慈君に呼ばれて我に返ります。きっと気のせいだよね、うん。

そう思った私は信慈君とお爺さんに追いつき、すずかちゃん家に向かいました

今、私たちは一つの客室のベッドで手当てをされて眠っているお姉ちゃんの周りにいます。お姉ちゃんが目が覚めるまで待つてるといっわけです

向こうのソファーにはお兄ちゃんと忍さんとお爺さんが座り、その後ろでノエルさんとファリンさんが控えていました

「魔宮さん、なのはを連れてきてもらってありがとうございます」

「いや、何。たいしたことなくて良かったのう」

「ええ」

魔宮さんと言っのはお爺さんの名前です。魔宮邦夫さんと言って元・軍人さんだそうです

「<なあ、信慈君>」

「<何だ?>」

「<あのお爺さん、前にあたし達を助けてくれた人とちゃっう?>」

「くん？ 前っていうと………？>」

「<ほら、一年生の時にあたし達が誘拐された時や………>」

「<ああ、あれね。だが、あの時、俺は寝惚けていたからなあ。正直、助けてくれた人の顔なんか覚えてないなあ>」

「<そうなんや。じゃ、すずかちゃんとアリサちゃんはどつや？>」

「<確かに似てるわ。ね、すずか>」

「<くん>」

お姉ちゃんの傍でお兄ちゃん達の様子を見ていたはやてちゃん達がそんなことを話しています。へえ、あの時にすずかちゃん達を助けたのはあのお爺さんなんだあ

【すずかとアリサは樹木事件でお爺さんに再会したことを忘れています】

「あの、つかぬことをお聞きしますが………」

「ん？」

今まで黙っていた忍さんがお爺さんに話しかけます。 どうしたん

だろう・・・・・・・・？

「三年ぐらい前に、女の子たちを誘拐犯から助けたことはありますか？」

「三年前・・・・・・・・？ ああ、助けたことがあるが。 ん？ おお、そう言えばあの時のお嬢ちゃん達に似てるのう」

忍さんの言葉にお爺さんがすずかちゃん達の顔を見ながらそんなことを言います。 すずかちゃん達が言っていた通り、お爺さんがあの誘拐事件ですずかちゃん達を助けてくれた人みたいですよ

「似てるのは当たり前です。 あの時の女の子たちは私たちですから」

「おお、そうじゃったのか！」

「はい。 あの節はお助けいただきありがとうございました」

「いや、何。 元気そうで何よりじゃ」

忍さんのお礼にお爺さんは笑顔で返します。 それを聞いたすずかちゃん達も

「」「」「ありがとうございます」「」「」

と立ち上がってお礼を言いました。 お爺さんはすずかちゃん達の方を見て

「うむ。 それにしても、ここにいるお嬢ちゃん方は皆、べっぴんさんじゃのう。 そう思わないかい、恭也君？」

「あ、はい。 そ、そうですね……」

「ふふ、ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「「「えへへ／＼／＼」」」

「やれやれ……」 信慈

と微笑んで告げました。 その言葉に私たちは照れてしまいました。 うう、べっぴんさんって言われたの初めてなの！

「さて、わしはそろそろ行くかの」

「あの、もしよろしかったら泊って行ってくれませんか？」

「お誘いは有難いが、これから用事があるのでな。 すまんのう」

「いえ、お引き留めしてすいませんでした。では、お見送りを、恭也、ノエル、ファリン」

「ああ」

「「はい」」

お爺さんがもう帰るみたいです。お兄ちゃんと忍さんはノエルさんとファリンさんと一緒にお爺さんをお見送りをするため、客室を出て行きました。爺さんとお話したかったけど、用事があるなら仕方がないよね。私はまたお爺さんと会えないかなあとか、もし会えたらお姉ちゃんと何かお礼をしたいなあとか色んなことを考えながら、未だに起きる気配がないお姉ちゃんを見つめます。お姉ちゃん、早く目を覚まさないかなあ……

【それから、なのはが目を覚ましたのは空が夕暮れに染まる頃でした】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お爺さんが月村家の屋根の上で月を眺めていました

「ふう・・・・・・・・疲れた、疲れた」

とそこに信慈が顔をだします。お爺さんは信慈の方を振り向くと

「今日は泊りかい・・・・・・・・？」

と尋ねました。信慈は背伸びをしながら立ち上がり

「ああ、なのはとゆきに元気を取り戻すにはどうするかを話し合ってたら遅くなったんでな。まあ、はやては元々泊るつもりだったらしいが、俺はいつも通りの強制だ（苦笑）」

と答えます。お爺さんは『そうかい』と苦笑しながら信慈の方へと近づきます

「俺は今、風呂に入っていることになってる」

「うむ。 分かったわい」

お爺さんが信慈とすれ違います。 すると、お爺さんを残して信慈がいなくなりました

「さて・・・・・・・・・・」

そう呟いたお爺さんは屋根から飛び降ります。 そして、空にいる窓から中に入った瞬間、そこにいたのはお爺さんではなく信慈でした

…… S I D E E N D ……

「ふう、 良い湯だった」

「信慈く、 こんちや」

「ん？ ああ」

入浴後、寝間着（はやてが俺に内緒で持参したんだろう）に着替えて風呂場をでると、はやてが部屋の前で俺を呼ぶ。 そこまで行くと、中の様子が見えた。 部屋の中には、布団が四つ敷いてあった。 しかも、くっ付いて・・・・・・・・

「なあ。これは何だ・・・・・・・・・・？」

「何って、布団やけど？」

「いや、それは知ってる。何故、四つもあるんだ？（しかも、くっ付いて）」

まさか、俺もはやて達と寝ると、そういうことなのか・・・・・・・・・・？

「それは信慈君も私たちと一緒に寝るからだよ」

「信慈、早くしなさいよ。寝られないじゃない」

と部屋の中からずかずかとアリサが顔をだしてそんなことを言う。予感的中ってか・・・・・・・・・・

「ほら、アリサちゃん達も言っとんのやから、早く早く」

「はぁ・・・・・・・・分かったよ・・・・・・・・」

俺はそう呟きながらはやてを布団に寝かし、その横の布団にもぐりこんだのだった

【ちなみに信慈 はやて ずずか アリサの順です（悪笑）】

第十八話 「アルフとのエンカウト、そして……」(後書き)

雪「雪と！」 ゆ「ゆきと！」 信「信慈の！」

雪&ゆき&信慈

「「座談会！」」

雪

「今回は原作第四話のお話です！！」

信慈

「なのはが最初に敗北した回だな」

ゆき

「そうなの！ だから、あの子は許せないの！！」

雪

「まあまあ」

ゆき

「むう………もう良いもん」

信慈

「やれやれ（苦笑）」

雪

「気を取り直して座談会スタート！！」

ゆき

「信慈君。　獣語って何なの？」

信慈

「ああ、あれね。　動物達と話ができるんだ。　転生前に爺ちゃんに教わったんだよ」

ゆき

「へえ、すごいの！」

信慈

「まあな。　ちなみに色々な国の言葉を覚えるという趣味も爺さんの影響がでかいな」

ゆき

「へえ。　あ、そうそう。　信慈君とお爺さんがエンカウントしたみたいけど、あれはどういうこと？」

信慈

「ああ、あれね。　ただの分身の術だ」

ゆき

「ただのって……」

雪

「ははは（苦笑）」

信慈

「まあ、そうだなあ。　『纏てんぶん』の応用技で『纏てんぶん分』と言ってな。　魔宮新陰流の一つだ」

ゆき

「へえ」

信慈

「まあ、魔力は分けられないというのが厄介だな」

ゆき

「そうなんだ」

信慈

「お前、完全に聞き流してるだろ（ボソッ）」

ゆき

「へえ」

信慈

「おーまーえーなあー（ギシギシ）」

ゆき

「痛いのー（TOT）」

雪

「ははは（苦笑）では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

信慈

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げる（ギシギシ）えー、感想・質問等あればどしどし送ってくれ（ギシギシ）」

雪

「次回からは温泉旅行のお話です」

信慈

「お楽しみに」(ギシギシ)

ゆき

「痛い」(TOT)」

第十九話 「温泉旅行、そして……（再会編）」（前書き）

雪

「難産でしたが、第十九話、更新しました」

信慈

「ヒヨウガさん、感想ありがとう」

はやて

「では、本編をどうぞ」

第十九話 「温泉旅行、そして……（再会編）」

……「ウキSIDE」……

管理局の艦隊を撃破してから数日。魔力の回復をしながら、警戒はしていたが、管理局連中は未だ襲撃してくる気配がない。どうやら、俺たちの場所を見失ったようだ

「……………よし」

魔力が全回復したため、いよいよ行動開始だ

「ミル。聞こえるか？」

「へい。いよいよですかい？」

「ああ。行動開始は、今夜十時だ。ぬかるなよ？」

「へい！」

よし、俺も地球に向かうか。待ってるよ、なのは・フェイト・はやて

……ゆきSIDE……

今日から全国的に連休なので、私たちは恒例の旅行に出かけることになりました。近場で二泊、のんびり温泉につかって日頃の疲れを癒そうというプランです

旅行にはアリサちゃん、すずかちゃん、忍さん、そして月村さん家のメイドさん達も一緒です。はやてちゃんは定期の検査のため、信慈君は外せない用事があるとかでいないけど明日合流する予定なの

「はあ。見て見て凄い緑」

「ほんとだあ」

私の横でアリサちゃんとすずかちゃんが楽しく談笑しています。でも、お姉ちゃんは静かに窓の外を見てるの。やっぱり、先週の女の子のこと考えてるのかな？

「なのは……旅行中くらいはゆっくりしなきゃ駄目なんだからね」

「そうだよ。お姉ちゃん」

「うん、分かってる。大丈夫だよ」

ユーノ君の言葉に賛同する。だって、お姉ちゃん。先週であった黒い魔法使いのこと、あれから一つも見つけられてないジューエル

そんなユーノの様子に気づかず、服を脱いでいくのはとゆき。
これは完全に動物だっと思ってますね、二人とも

「えへへへへへ」

「温泉は良いよ」

「本当？」

ユーノは振り向くが、目の前の光景に目を瞑ってしまいました

「な、なのは、ゆき／／／／／／／／／／僕はやっぱり／／／／／
／／／／／」

「「え？」」

「だあああああ／／／／／／／／／／／／／／／／その、恭也さんと
士郎さんと一緒に男湯の方へ．．．．．」

なのはとゆきがユーノ方へ向いたため、ユーノはのぼせたかのように
倒れてしまいました

「ええ、いいじゃない」

「うん。一緒に入ろうよ。」

そんなユーノを抱えて温泉に入っていくゆき達でした

……ゆきSIDE……

「うわあ、ファンタスティックFantastic!」

「すごい、ひろい」

「うわあ」

私たちは温泉を見て目を輝かします。 やっぱ、温泉は凄いの!!

「お姉ちゃん、背中流してあげるねえ」

「ありがとう、すずか」

「じゃ、私達も」

「ありがとう、洗いっこしようか」

「うん」

すずかちゃんも忍さんの背中を流すということなので、私とお姉ちゃんも美由希お姉ちゃんと背中を洗いつくをすることにしました

で、アリサちゃんもユーノ君を？んで

「うふふん。じゃ、アンタはわたしが洗ってあげるね」

「キュ！！ キュ！！ キュ！！ キュ！！」

「うははは 心配ないわよう。私、洗うの上手いんだから」

そう言っただけで私たちの隣に座りました。ユーノ君も何だか嬉しそうなの

【慌ててるのに気付かれないなんて………哀れですね、ユーノ】

……「ウキSIDE……」

無人惑星から転移してきたら、そこに土郎と桃子が散歩しにやってきているのが見えた

「はあ、いいわね。こういう休日……」

「ああ、そうだな」

「お店も少しは若い人たちに任せておけるようになったし」

「子供たちも、まあ実に元気だし」

少し隠れて様子を窺っていると、士郎と桃子のそんな会話が耳に入ってくる。ふっ、夜は俺のものになるとも知らず、いい気なものだな

「それに、あなたも・・・」

「ああ、そうだな」

見つめ合って笑う二人。 実に仲が良いねえ。 まあ、それも今夜までだ

「結構、時間がかかったもんな」

「・・・うん」

「まあ、もう桃子や子供達に心配をかけるようなことはないさ。俺は、これからはずっと翠屋の店長だからな」

「うん。 ありがとう、あなた」

「（・・・良いねえ、仲が良いというのは。 まあ、今はこの瞬間を楽しみたまえ。 くくくくく・・・）」

俺はそんな事を思いながら、士郎と桃子が旅館の方へ向かうのを見ていた

「さて、今夜に備えて眠って　うお!？」

滝壺に身を潜めようとしたら、いきなり斬撃が飛んできたため、慌てて避ける。　な、何なんだ!？

「うむ。　外したか……………」

「誰だ!？」

頭上で声がしたため、叫びながら振り向くと

「……………」

軍服を着た爺が滝の上で刀を肩に担いでいた。　な、何なんだ!？
ヤツは……………!?　こんな奴原作に出てこなかったぞ!？

い、いや……………違う。　コイツは原作に登場しないモブキャラだ。　そうに違いない。　だったら、俺より強いはずがないじゃないか。　しかし、なのは達を俺のものするためにはコイツを何と

かしないといけならしいな。 ふっ！ ちゃっちゃと片付けるとするか

「お前さんは誰じゃ？」

そう思っていると、爺の方から口を開いた。 俺が誰かだと………

「ふん。 爺に言う名はねえな！」

「そうかい………なら、力づくで聞こうとするかのう」

「ふん！ やってみろ！」

爺はそう呟くと刀を構えた。 俺は、デヴァイスを構えて爺と対峙する

「さあて、肩慣らしに爺を殺すか………！」

「……………」

俺は爺を見据えて言い放ち、スレーブを戦斧に変形させる。 そして、なのは達に気付かれるとマズいから、俺と爺の周りに結界を張っていった

……ゆきSIDE……

私たち四人はお風呂からあがって旅館を探検しています。そして、談笑しながら廊下を歩いていると、向こうからやってきた女の人が声をかけてきました

「はい、おチビちゃん達」

「「「ん？」「」「」

「うん、うん。君たちかね、うちの子をアレしてくれちゃってるのは」

その女の人は私とお姉ちゃんに顔を近づけてきました

「「え、ええ？」」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンちどもに見えるんだけどなあ」

な、何なの？ この女の人は………？

そ、そんなことを思っていると、女の人と私たちの間にアリサちゃん割って入ってきました。そして、女の人を睨みつけます

「なのは、ゆき。 お知り合い？」

「「ううん」「

アリサちゃんの間に首を振ります。 この女の人には会ったことも
ないの……

「この子達、あなたを知らないそうですが、どちら様ですか？」

「あはくん」

余裕たつぷりに女の方は私たちを見つめます。 な、何なの？

【ユーノはその女性に何か感じたのか睨みつけます】

「あははははははは」

急に女の方が笑ったので、私たちは呆気にとられてしまいました

「あはは。 ごめんごめん、人違いだったかなあ。 知ってる子に
よく似てたからさ」

「ああ、何だ」 ゆき

「そうだったんですか」 なのは

だったら、私たちが知らないのも頷けるの

【簡単に信じすぎですよ、なのは、ゆき】

でも、女の人が私たちに顔を近づけてきて

「忠告しとくよ。 子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。
オイタが過ぎるとガブツといくよ」

「「!」」

そう念話を送ってきました

「さて、もうひとつ風呂行ってこよう」と

女の方はそう言うと、私たちから離れてお風呂場の方へと向かいま
した。 私とお姉ちゃんはまだただ見つめることしかできませんで
した

「なのは、ゆき」

「「うん」」

「なのはちゃん、ゆきちゃん」

「「うん」」

「なぐに、あれ!!」

「「その、変わった人だったね」」

「昼間っから酔っぱらってんじゃないの!? 気分悪」

「まあまあ」

「寛ぎ空間だし、色んな人がいるよ」

物凄く怒ってるアリサちゃんを私とお姉ちゃんは困った顔で宥めま
す。 本当は知り合いつばいけど、これは言えないもんね……………
・

「だからといって節度つてもんがあるでしょ!? 節度つてもんが
!?!」

「「にやははは……………」」

私たちは笑って誤魔化しました。 でも、大丈夫かな……………

私の横でスヤスヤと眠っているアリサちゃんとすずかちゃん。私
と、多分お姉ちゃんもだけど、昼間の女の人のことを考えていまし
た。一体、あの女の人是谁なの………？

「ユーノ君」

「起きてる？」

「う、うん……………はあ」

アリサちゃんに抱かれていたユーノ君が、抜け出してきたため息を
吐きます。 私たちとお姉ちゃんは起き上がってユーノ君の方を向
きました

「昼間の人」 ゆき

「此間の子の関係者かな？」　なのは

「多分ね」

「また、此間みたいになっちゃうのかな？」

「多分。なのは、ゆき、僕ねあれから考えたんだけど、やっぱりここからは僕が」

私はユーノ君が最後まで言う前に遮って

「ストップ！　そこから先言ったら怒るよ」

と口にします。　お姉ちゃんが私の言葉に続いて、こう話を切り出しました

「ここからは僕が一人でやるよ。　これ以上、二人を巻き込めないから・・・とか言うつもりだったでしょ？」

「うん・・・」

ユーノ君がお姉ちゃんの言葉で俯いてしまいました。　お姉ちゃんはユーノ君を抱きかかえて

「 ジュエルシード集め。最初はユーノ君のお手伝いだっただけ、今はもう違う。私が自分でやりたいと思ってやってることだから」

と呟いて微笑みました。私はお姉ちゃんのような魔法なんて使えないけど、お姉ちゃんの気持ちは分かるの。だから、私もユーノ君に微笑みます

「私（お姉ちゃん）を置いて一人でやりたいなんて言ったら、怒るよ」

「……………うん」

ユーノ君は私たち（主にお姉ちゃん）の決意が分かったのか頷いて微笑んでくれました。良かった……………

「少し、寝むところ？」

「また今夜にも何かあるかもしれないからね？」

「うん」

そう言って私たちは眠りにつきました

眠りについた数十分後、ジュエルシードの気配がしました。お姉ちゃんは起き上がると、ユーノ君と一緒に部屋をそっと抜け出していきました。私も立ちあがって部屋を抜け出して廊下に出ます。そして、お姉ちゃんが走っていく後ろ姿を見ながら

「<お姉ちゃん、頑張つて>」

と呟き、しばらくお姉ちゃんの方角を見つめていました。そして、部屋の中へと入ろうとした時

「・・・・・・・・コイツは使える」

「え？ ムグツ!？」

という声が聞こえたので振り返った瞬間、口を塞がれてしまいました。な、何!? 何なの!?

「俺の役に立ってくれよ」

そして、そんな言葉を聞いたのを最後に、私の意識は遠退いていきました。だ、誰か……………助けて……………

……………第三者SIDE……………

その頃……………

「はぁ、はぁ、はぁ……………」

なのはは森の中を一生懸命走っていました

「なのは」

「大丈夫。急ご、ユーノ君……………レイジングスハート、お願い」

「Standby Ready, Set Up」

なのははバリアジャケットに身を包むと、ジュエルシードの反応があった場所に到着しました。そこには丁度、ジュエルシードを封印したフェイト、アルフの姿がありました

「あゝら、あら、あら」

「あつ」

「子供は良い子でって言わなかったけか？」

「それをジュエルシードをどうする気だ！ それは危険なものなんだ！」

「さあね。 答える理由が見当たらないねえ。 それにさ。 あたし親切に言っただよね。 良い子でないとガブツと行くよって」

アルフはそう言う人と人型から狼型へと変化しました

「やっぱりあいつ黒い魔導師の子の使い魔だ」

「「使い魔！？」」

その言葉になのはは驚きながらも、視線を外さずにフェイトとアルフを見つめます。すると、フェイトがアルフの下に近づいてきました

「そうさ、あたしはこの子に創ってもらった魔法生命。 製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てをかけて守ってあげるんだ」

アルフはフェイトの方を見ながら自分が何者であるかを説明します

「フェイト、先に帰ってて。すぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね」

アルフはそんなフェイトの言葉に頷くと、なのは目掛けて襲いかかります。しかし、ユーノが飛び出してなのは守るように障壁を張りました

「なのは、あの子達をお願い」

「させるとでも思ってたの!!」

「させてみせるさあ!!」

ユーノはそう叫びながら移動魔法を発動させて、アルフと共にどこかへ移転しました。残されたフェイトとなのはお互いを見つめ合います。フェイトは睨みつけるように、なのはは少し怯えるように……

「結界に強制転移魔法。いい使い魔を持っている」

「ユーノ君は使い魔ってやつじゃないよ。私たちの大切な友達」

フェイトはその言葉にさらに睨みを強めます

「で、どうする？」

「話し合いでなんとかできるってことない？」

「私はロストログアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。そして、あなた達も同じ目的なら、私たちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる」

「だから、そういう事を簡単に決めつけないために話し合いって必要なんだと思う」

なのは真剣な目でフェイトを見つめ続けるが、フェイトは目を瞑って

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃきつと何も変わらない……
伝わらない!!」

フェイトはバルディッシュをなのはへと向けて構えました。 なのは
はも思わず、レイジングハートを構えます

そして、フェイトはなのはの後ろを取り、バルディッシュを一閃さ

できます。　しかし、なのはは咄嗟にしゃがみ込んでかわしました

「Flier fin」

更にフェイトがバルディッシュで一閃させて来るとなのはは空へと回避しました

「かけて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトはなのはより高く飛ぶと落下する速度を利用してなのはを襲いますが

「Protection」

なのははそれを防御してフェイトと距離を取ります。　フェイトは再度、上空に飛び、バルディッシュをなのはへと向けます。　なのはもレイジングハートをシューティングモードに変えてフェイトに向けました

「Thunder Smasher」

「Divine Buster」

二人のバルディッシュとレイジングハートから直射砲撃魔法・サンダースマッシュと直射砲撃魔法・ディバインバスター放たれ、ぶつかり合います

「レイジングハート、お願い」

「All Right」

ディバインバスターの威力が増してフサンダースマッシュを呑み込んでフェイトを襲いました。そして、フェイトもディバインバスターに呑み込まれたと思われましたが……

「Scythe Slash」

「はっ！」

フェイトは上空にと回避していました。それをなのはが気づいて上を向くが、すでに遅くフェイトがなのは目掛けて襲ってきていました

なのはは思わず目を瞑って身体を硬直させてしまいます。そして、なのはが恐る恐る目を開けると、フェイトが寸止めでバルディッシュを構えていました

「Put Out」

「レンジングハート、何を!？」

「きっと、主人思いの良い子なんだ」

レンジングハートがジュエルシードを吐きだしたため、なのはは驚いてしまいました。その様子にフェイトはそう呟きながら、ジュエルシードに手を伸ばそうとしました

「フェイト! 危ない!」

「え? きゃあああああつ!？」

「フェイト!」

しかし、茂みの中から魔力弾がフェイトの死角から飛んできました。アルフが気付いて叫ぶが、一足遅くフェイトに直撃してしまいます

直撃を喰らったフェイトは気絶してしまい、そのまま落下していきます。アルフは叫びながら、人型になると落下していくフェイトを受け止めました。そして、魔力弾が飛んできた方向を睨みつけました

「誰!？」

呆氣にとられていたなのは我に返ると、魔力弾が飛んできた方向を向いてそう叫びます

【ガサガサ】

「え？」

「・・・・・・・・・・」

なのは茂みの中から出てきた人物を見て言葉を失いました。なのはと対の青いバリアジャケットを身に付けたゆきだったからです。そして、ゆきに遅れて

「はははははははは」

とボロボロなバリアジャケットを着たコウキが現れました。一体、ゆきの身に何が起きたのでしょうか・・・・・・？

……SIDE END……

第十九話 「温泉旅行、そして……（再会編）」（後書き）

雪「雪と！」 ゆ「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「「座談会！」」

雪

「今回から温泉旅行のお話です！！」

信慈

「今回、俺は出番なしか」

はやて

「でも、お爺さんが出てるやん」

信慈

「まあ、ネタばれになるが、あれは俺の分身体だ」

はやて

「そうなん？」

信慈

「ああ」

雪

「運悪くはやてとなのは達が離れてしまったため、苦肉の策で分身して両方の守りに着いたということです」

はやて

「へえ」

信慈

「まあ、魔力がない分、俺の爺の姿より弱いかな」

はやて

「ふん。でも、コレを見ると……………」

信慈

「ああ、俺がなのは達の方を守っていた方が良かったな……………」

「

雪

「ここからはネタばれになりそうなので、言わないでくださいね」

信慈

「ああ、分かってるよ」

はやて

「……………ゆきちゃん、どうなるんや……………」

雪

「それは次回のメインなので言えません」

はやて

「そ、そうなんや……………」

雪

「では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

信慈

「この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げます。また、感想・質問等もあればどしどしと送ってくれ」

雪

「次回は温泉旅行・戦闘編です」

信慈&はやて

「「お楽しみに」」

第二十話 「温泉旅行、そして……（戦闘編）」（前書き）

雪

「戦いの描写は難しい……そして、今回も難産でした。
第二十話、更新です」

信慈

「ヒョウガさん、ユートピアさん、Rainさん、感想ありがとうございます」

はやて

「では、本編をどうぞ」

第二十話 「温泉旅行、そして……（戦闘編）」

なのは達が出発した後

はやての診察が終わった後に用事があるという事にしてなのは達の温泉旅行を断った俺は、今病院の屋上にいた

「……さて、なのは達も転生者から守らないといけないが、どちらに転生者が来るか分からないんだよね。ライト、お前はどっちに来ると思う？」

「分かりません。監視している者の場所は、なのは様たちがいらっしゃる場所とこの場所のほぼ中間地点でございますので」

「だよな……」

ふう……仕方ない。ここは……

「纏分……」

俺は分身の術で俺の分身体を作る。そして、即行でクジを作り、俺（分身体）に引かせる

大事な場面でクジというのは、何だか違う気がするが、今の俺にはこれくらいしか思いつかない。

で、俺（分身体）が引いたのは、『なのは達』と書かれた方だった

「なのは達を頼むな」

「ああ、分かってる。纏」

俺は俺（分身体）になのは達の事を頼むと、俺（分身体）は頷いて爺さんに変身する。そして、瞬により姿を消した

「頼むぞ、俺・・・・・・・・」

俺はそう呟くと、はやてを守るために病院の屋上を後にしたのだった

………第三者SIDE………

なのは達が風呂に入っていた頃

コウキはなのは達に気付かれるとマズいため、結界を張ります。

信慈（分身体）は驚きもせずに滝の上でコウキを見据えていました

「（けっ！ すました顔をしゃがって。 良いだろう。 その顔を
驚愕に染めてやる！）スマッシュサンダー・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（スッ）」

「何!？」

そう思ったコウキは、手っ取り早く片付けようと雷の速度の斬撃を飛ばします。しかし、信慈はそれを難なく避けたため、コウキは驚いてしまいました。なぜなら、今までこの斬撃を避けた人物がいなかったためです

「（チッ！ モブキャラの癖に・・・・・・・・!）」

「・・・・・・・・もう終わりかのう？」

「このクソ爺・・・・・・・・!！」

その言葉にキレたコウキは、信慈に向かって突撃していきます。しかし、信慈はそれを待っていたかのように口元を歪めると

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふん！」

「何!？ ぐはっ!？」

影打刀（信慈がライトの第二形態に似せて創った）を斬りつけました。予想外の出来事にコウキはそれを食らってしまい、滝壺に叩きつけられてしまいました

数秒後、滝壺から出てきたコウキが怒り心頭に発している様子で、
ゆっくりと上空へと飛んでいきます

「・・・・・・・・殺す・・・・・・・・」

コウキの発する雰囲気が変わり、ピシピシと信慈に殺気をだしています。
信慈を倒すという目的から確実に殺すという目的に変わったのでしよう

信慈は殺気を浴びながら

「（やれやれ、あの攻撃でバリアジャケットしか壊せないとは・・・
・・・これは流石にワシ（分身体）じゃと厳しいのう。ヤツが転
生者である事は確定じゃな。さて、能力は未知数じゃし、どうす
るかのう）」

とバリアジャケットがボロボロだが、身体が無傷なコウキを見据えて
そう考えていました。分身体である自分には荷が重いと感
じていました。しかし、なのは達を守るためにもここでくたばるワ
ケには行かないため、コウキとの戦いに挑まなければならないと影
打刀を構えます

「・・・・・・・・リミッター・・・・・・・・解除・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コウキがそう呟くと、魔力が大幅に上昇していきました。 信慈は本気で来たかと思い、気を引き締めてコウキを見据えます

リミッターを外したコウキは嫌な笑みを浮かべ、大量の魔力をただ漏れにしていました。 その強大な魔力により、結界内が禍々しい表象になっていきます

「・・・・・・・・リミッターを外して戦うのはお前が初めてだ・・・・・・」

「ほお。 ということは、それがお前さんの本来の魔力ということかい？」

「ああ・・・・・・・・じゃあ、爺・・・・・・・・死にな」

「（シュン）・・・・・・・・やれやれ・・・・・・・・（破れるには破れるが・・・・・・・・間に合わんな。 それに・・・・・・・・あの攻撃は、ちとヤバいのう。 耐えきれるか・・・・・・・・）」

コウキはその身体に収まりきれずに漏れている魔力をデヴァイスの先端に集束させていきます。 そして、信慈が動くよりも早く、身体に強力なバインドをしていきました

バインドにより身動きがとれなくなった信慈は、集束されていく魔力を見つめ、分身体の要である気を巡らして防御の体勢になりました

「じゃあな……………」

ドン！という音とともにデヴァイスから放たれるコウキ（魔力解放時の最大砲撃魔法・ダークネスブレイカー）。その砲撃が信慈を呑み込んだ瞬間、大爆発を起こして辺り一面に煙が立ち込めました

「……………（フッ）」

コウキは信慈がいた場所（滝の上）を見据え、不敵な笑みを浮かべました。このダークネスブレイカーに呑み込まれた人間が最早生きていたとは思えないからでした

煙が晴れていくと、そこに首を垂れる信慈がいました。そして、コウキがバインドを外すと滝壺へと真つ逆さまに落ち

「何！？」

「……………（ヒュッ）」

「（グサッ）グハッ！？」

ずに影打刀をコウキ目掛けて投げつけ、コウキの足にヒットしました

その攻撃により、森の中へと落ちていくコウキ。　その直後、結界がなくなっていくます

「・・・・・・・・こ、これまでか・・・・・・・・後は頼んだぞい・・・・・・・・
・・ワシよ・・・・・・・・」

そのなくなっていく結界を見ながら呟いた信慈は真つ逆さまに滝壺へと吸い込まれるように落ちていきました。　最後のコウキに食らわせたのが、最後の力を振り絞って放った攻撃だったようです

そして、滝壺へと落ちると同時に信慈の身体は消えてなくなったのでした

.....SIDE　END.....

「はっ！」

「？　どないしたん、信慈君？」

はやてと共に家に帰っている途中、分身体である俺が消えたのを感じた。　どうやら、あっちに転生者が現れたらしい。　ちっ。　このままだとなのは達の身が危ない・・・・・・・・しかし、はやての事もある。　ここで焦ったら、誰も助けなくなるぞ。　落ち着け、俺・・・・・・・・

「い、いや、何でもない。さて、さっさと帰るぞ、はやて」

「はいな」

俺は焦る気持ちを抑えながら、はやてと共に家に帰っていく。待つていてくれ、必ず助けに行くからな……！！

……「ウキSIDE」……

夜

「……………」

足の治療をしていたら、夜になっていた。身体はボロボロ、魔力もあまりない。ちっ……………爺のヤツ、やってくれる

時間を確認すると、午後十時。行動開始の時間だったため、ゆっくりと立ち上がる。そして、なのは達がいるであろう旅館に向かった

しかし、この状態でなのは達と対峙するのは億劫だな。どうするか……………

「……………ジュエルシードが発動したか……………」

旅館が見えたところで、ジュエルシードの発動を確認した。そして、廊下に人影があるのに気がついた

「なのはとボケフェレットと・・・・・・・・誰だ？」

茂みで様子を窺うと、なのはとフェレットモードのユーノが今、ジュエルシードの発動場所まで向かうところだった。そして、なのは達が走っていくのを確認した直後に、同じ顔の少女が部屋の中から出てきたのに気づく。あの娘は・・・・・・・・

「<お姉ちゃん、頑張つて>」

転生者ではないな。転生者なら、なのはと一緒に向かっているはずだ

という事は、この世界はなのはには双子の妹がいるということか・・・・・・・・

「・・・・・・・・コイツは使える」

「え？ ムゲッ!？」

少女が部屋の中へと入ろうと後ろを向いた時、一瞬のうちに間合いを詰めて口を塞ぐ。そして、スリープの魔法をかける

「俺の役に立ってくれよ」

そう呟くと、もがいていた少女の意識がなくなったのかダランとなった。ふふ、これでなのは達を洗脳することができるぞ

「では、まずはこの少女を洗脳するのでしょうか……………」

……SIDE END……

午後十時に転生者の仲間が動き出したことを確認した俺は、爺さんに変身すると迎撃に出た。ちつ……………こんな夜遅くに動き出すと分かっていたら、なのは達の方に向かっていたのに……………

「ぐはっ!?!」

「……………」

俺の家と潜伏していた場所の丁度中間地点で、敵を迎撃。倒れ伏す敵を黙って見下ろす

「旦那様・
・
・
・
・
・
」

「分かつておる。後悔は先に立たずじゃ。こ奴を管理局に送つたら、急いでなのは達のところへ行くぞい」

「はい・・・」

ワシはライトの言葉を遮り、そう呟くと倒れ伏す敵を縄で縛って管理局へと送る。そして、なのは達がいる旅館へと向かう。もちろん、はやてのところに分身したワシを残して……

.....
 なのはSIDE.....

私は茂みの中から出てきた人物を見て言葉を失いました。だって、その人物がゆきちゃんだったから……

「はははははははは」

そして、ゆきちゃんの後ろから笑い声を発しながら男の人が現れたの。誰……？

「ご苦労だつたな」

「はい・・・・・・・・」

その男の人はゆきちゃんの横に並ぶとそう言ったの。 ゆきちゃん
は返事をするけど、その目は何だか生気が感じられないの。 ゆき
ちゃん、どうしたの・・・・・・・・

「あ、あんたは誰だい!？」

「俺か？ 俺はコウキ・ダークネス。 お前たちを俺のものにする
ためにやってきた者だ」

「な、何だつて!？」

フエイトちゃんを抱えた使い魔さんが男の人に訊ねると、その人は
笑顔でそう言い放ちました。 私たちを自分のものにする？ な、
何を言ってるの？

「ゆきに何をしたんだ!」

「ゆき？ ああ、こいつのことか？ ちょっと洗脳した」

洗脳・・・・・・・・？ な、何を言ってるの？ え？

「混乱してるみたいだから説明してやるよ こいつは最早、お前

らの知っているヤツではない。俺が命令すれば何でもする、すなわち人形になったってワケよ。ああ、そうそう。こいつが持っていた翠色の玉を改良して魔法少女してやったわ。はははは」

「何だって!？」

え? え? どういうこと? え?

「ええ、なのはが混乱してるので視点を変えたいと思います（苦笑）」

……第三者SIDE……

「さあ、ゆき。お前の力でこいつらを痛めつける!!」

「はい……………」

「ゆきちゃん!？」

コウキがゆきに指示を出すと、生気が感じられない表情をしたゆきは返事をします。そして、気絶しているフェイトを抱えたアルフに向かって杖を構えたため、混乱していたなのは驚いてゆきの名前を叫びました

「……………」

「く・・・・・・・・つ!？」

しかし、ゆきはそれを無視し、アルフに砲撃を放ちました。それを
を防御するしかないアルフの額には汗が滲んでいきます

「はははは!! いいぞ、いいぞ! もっとやれ!」

「ゆきちゃん、やめて!」

「ゆき!」

その様子に喜びをあげるコウキとやめさせようと叫ぶのはとユーノ

「くううつ・・・・・・・・!!」

反撃に出られないアルフはフェイトを絶対守ってやるという思い一
つで防御していました。しかし、それも限界に近付き、徐々に圧
されていきます

「全力全開だ、ゆき!!」

「はい・・・・・・・・」

コウキの言葉を受けたゆきは頷くと、魔力を杖に送っています。その魔力を受けて砲撃が大きくなってアルフの防御を破壊。そのまま、砲撃がアルフを呑み込んでいきました

誰もがアルフとフェイトは倒れていると思っていました。それほど、ゆきの砲撃が強大だったからです。しかし、砲撃がやみ、煙が晴れると・・・

「あ、あんたは！」

「・・・・・・・・えへへ・・・・・・・・間に合って良かった・・・・・・・・」

「なのは!？」

いつのまにかアルフとゆきとの間に潜り込んだのはがバリアジェケットをボロボロにして立っていました。そして、アルフが驚愕の表情をしていると、なのはは振り返って笑顔でそう呟いて倒れてしまいました。慌ててユーノは駆け寄り

「良かった・・・・・・・・脈はまだある・・・・・・・・」

なのはの状態を確かめ、命には別状がない事に安堵の表情を浮かべます。しかし、まだ助かったワケではありません。ユーノはなのはを護るようにゆきの前に立ちます

「はははは！！ 計画は多少狂ったが、これでお前たちは俺のものだ！ ゆき！ 後の二人もやつつける！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

コウキは計画の成就を確信したのか高笑いをあげ、ゆきにアルフとユーノも倒すように命令します。しかし、ゆきは動こうとしませんでした

「おい、どうした！ いけ！ 俺様の言うことが聞けないのか！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゆ、ゆき？」

コウキは動かないゆきにそう叫ぶが、ゆきは一向に動こうとしません。さっきまでのゆきの雰囲気とは違う事に気がついたユーノはゆきの名前を呼ぶと

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ポタポタ）」

表情は無表情だが、その目から大粒の涙が溢れてきたのです

「な、何だこれは!？」

「ゆき! まだゆきの心が残ってるんだね!」

「何!？」

ユ一ノの言葉に驚くコウキ。それもそのはず、コウキの洗脳で心が残っていることなど、今までなかったからでした。いえ、あつたかも知れないが、自分の力に過信しているコウキには信じられないことだったので

「ちっ……洗脳のし直しだ!」

コウキは舌打ちすると、ゆきの頭に手を翳しはじめます

「……いや……」

「何……?」

「……いやああああっ!？」

「な、何だ!？」

「ゆき!？」

再洗脳されようとしたゆきが叫び声をあげると、後ろから黒い空間が現れ、辺り一面を覆っていきました。そして、ユーノが気がつく
と・・・・・・・・

「ゆき？」

ゆきとコウキの二人がいなくなっていたのです

果たして二人は何処に？　そして、なのは達の運命は・・・・・・・・

.....SIDE　END.....

第二十話 「温泉旅行、そして……（戦闘編）」（後書き）

雪「雪と！」 は「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「」「座談会！」「」

雪

「まずは……すいませんでしたー……っ……！ m
——」m

はやて

「信慈君。 作者さんは何で謝つとるんや？」

信慈

「多分、今回の話で意見を言われる前に謝つと……ということじゃないのか？」

はやて

「ああ、納得や」

信慈

「さて、作者はほつとくぞ、はやて」

はやて

「うん。 で、お爺さんは残念やったね」

信慈

「ああ、どうにか耐えられたが、ほとんど反撃する力は残ってなか

「ったからな」

はやて

「で、信慈君の方は物凄く早かったんやな」

信慈

「まあ、そうだな。描写するほど濃密な戦いではないしな。しかし、クジで決めたのは、本当にマズかったなあ」

はやて

「信慈君も言ってたやん。後悔は先に立たずやて。これからどうするかが大事やよ」

信慈

「そうだな」

はやて

「話は変わるけど、ゆきちゃんは大丈夫なん？」

信慈

「それは……………」

雪

「それはネタばれになるので言わないでください」

信慈

「分かってるよ。はやて、耳を貸せ」

はやて

「何や？」

信慈

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ゴニョゴニョ）」

はやて

「ふむふむ・・・・・・・・」

雪

「ええ、信慈がはやてにこの後の出来事を説明している間に座談会を終了させていただきました。この小説を読んでもくださる方々に感謝を申し上げます。また、感想・質問等もあればどしどしと送ってください」

信慈

「こんな感じだな」

はやて

「へえ、そうなんや」

信慈

「おっと、はやて、挨拶だ」

はやて

「はいな」

雪

「次回は温泉旅行・暴走編です」

信慈&はやて

「「お楽しみに」」

第二十一話 「温泉旅行、そして……（暴走編）」（前書き）

雪

「今回も難産につぐ難産でした。 第二十一話、更新です」

信慈

「ユートピアさん、ヒョウガさん、七さん、感想ありがとう」

はやて

「では、本編をどうぞ」

第二十一話 「温泉旅行、そして……（暴走編）」

……ゆきSIDE……

気がつくと、私は暗闇が広がる空間にいました……

「え？ え？ ええ！？」

ここどこ……！？

あ。そ、そうなの……誰かに口を塞がれて……

「……あ……光が……」

暗闇の奥の方につつすらと光が見えました。私はその光に引き寄せられるように、ゆっくりと近づいていきます

近づくにつれて光は強くなり、やがて眩しいぐらいの光となって私を包んでいきました

そして、気がつくと……お姉ちゃんが倒れるのが見えま
した……え？ 何、これ……？

「はははは！！ 計画は多少狂ったが、これでお前たちは俺のもの

だ！ ゆき！ 後の二人もやつつける！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何を言ってるの・・・・・・・・？ 私がやつつける？

視線を横に向けると、私は杖を構えていました

え？ それじゃ・・・・・・・・お、お姉ちゃんが倒れたのって・・・・・・・・私が・・・・・・・・？

「おい、どうした！ いけ！ 俺様の言うことが聞けないのか！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゆ、ゆき？」

うそ・・・・・・・・私が・・・・・・・・お姉ちゃんを・・・・・・・・？
そ、そんな・・・・・・・・大好きなお姉ちゃんを・・・・・・・・私が・
・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ポタポタ）」

私の心にどうしようもない感情が渦巻き、目から大粒の涙がこぼれ
落ち始めました

「な、何だこれは!？」

「ゆき! まだゆきの心が残ってるんだね!」

「何!？」

ユ一ノ君や知らない男の人が何かを言ってます。でも、聞いている余裕なんて私にはありませんでした

お姉ちゃんを傷つけたという事実に関心が締め付けられる思いだったからです……

「ちっ……洗脳のし直しだ!」

「……いや……」

「何……?」

「……いやああああっ!？」

「な、何だ!？」

「ゆき!？」

心が耐えられなくなった私は叫び声を上げると同時に意識を手放し

ました

……SIDE END……

温泉旅館へと向かう途中、ゆきの魔力が大きくなったのを感じた。
恐らくゆきが敵の手に落ちたのじゃろう

「旦那様…….」

「ち…….っ！　ライト、速度を上げるぞい…….！
待機状態へと戻るんじゃ！」

「はっ！」

ワシはライトを待機状態へと戻し、速度を上げて旅館へと急いだ。
そして、旅館まであと少しというところで

「いやあああああっ！？」

ゆきの叫び声が聞こえた。　その前にフェイトとなのはの魔力が小さくなったと感じた矢先であったため、物凄く嫌な予感が頭をよぎったが、頭を振ってその馬鹿な考えをなくす

その直後、ゆきと敵の魔力が消える。　何かあったと思い、急いでなのはとフェイトの魔力がある場所へと向かった

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・」

「あ、あんた・・・・・・・・！」

目的の場所に到着し、その現状を目の当たりにしてそう呟く。　その
の呟きに気づき、アルフが驚いた表情をする

「・・・・・・・・そのお嬢さんは大丈夫かい？」

「・・・・・・・・あ、ああ」

「そうかい・・・・・・・・」

ワシはフェイトの容態をアルフに尋ね、フェイトが無事であると確認すると、静かに浮いているジュエルシードをつかみ

「 持って行きなさい 」

「 いいのかい？ 」

「 別に良いじゃろ。 そのフェレット君には文句は言わせんよ
」

「 分かった。 礼は言わないよ 」

「 礼を言われることはしとらん。 ああ、あとそのお嬢さんには、
気絶した後のことは黙っておいた方が良い 」

「 分かった。 言わないよ 」

アルフに渡し、ユーノに聞かれないよう、念話にする。 そして、
話終えたアルフはフェイトをおぶって飛び去っていった

アルフが見えなくなったのを確認したワシは、後ろを振り返り、な
のはとユーノの前に近づく

「 」

ユーノはじーっとワシを見つめている。 どうやら、ワシの真意を
探つとるのじゃろう。 まあ、ユーノの前でジュエルシードをアル
フに渡したのだから仕方がないか。 ワシはそう思いながら、ユー
ノを数秒見つめると、なのはに近づいてなのはの容態を確認してい

随分とやられたようじゃな。 バリアジャケットがボロボロじゃ。

一応、ユーノが治療しとるようで、傷自体はそれほど酷くはなっていない。少し安心じゃな……

しかし、ゆきはどこじゃ……？　ずっとゆきの魔力を探つとるのに、一向に何も感じんとは……どういうことじゃ……？

「…………お爺さん……………」

軍帽の鍔を手で抑えながらゆきの事を考えていると、今まで黙っていたユーノが言葉を発した。どうやら、ワシがユーノ達と同じ魔導師であることに気づいたらしい。まあ、魔力を抑えとらんから当たり前じゃがな

「……………何じゃ……………」

「……………あなたが何者なのか、敵なのか、味方なのかは聞きません……………以前、なのはを助けてくれたことのあるお爺さんにお願いがあります！　ゆきを……………ゆきをどうか助けてください！　お願いします！」

ユーノはそう叫ぶとこれでもかと言うぐらいに頭を下げる。ワシはそれを黙って見つめる中、ユーノは動こうとしない

ふふ、敵か味方が分らんワシに対して、ゆきを助けてくださいか……………

「（スッ）え？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（フッ）」

「あ、ありがとうございます・・・・・・・・・・！」

ワシは肯定する代わりに、ユーノの頭に手を乗せて微笑んで見せる。
ユーノはワシが何を言いたいのかわかったらしく、お礼を言ってきた

「・・・・・・・・・・で、何があったのじゃ・・・・・・・・・・？」

「はい。実は・・・・・・・・・・」

ワシは表情を堅くすると、ユーノに向き合って何があったのか尋ねる。
ユーノは頷くと今までの出来事を語っていった

その話を聞きながら、ゆきの魔力を今まで以上に丹念に探っていく。
どんな些細な魔力を見逃さない。必ずゆきを見つけたしてみせるわい

…………… 第三者SIDE ……………

コウキとゆきが黒い空間へと包まれた直後

「ここは、どこだ!？」

コウキは驚愕の表情をして叫んでいます。そこには暗闇の空間が広がっているだけで、コウキ以外は……いや、ゆきとコウキ以外誰もいませんでした

「……………」

「おい! ここはどこなんだ!？」

「……………」

コウキが黙っているゆきに怒鳴りつけるが、ゆきは頭を垂れて動きません。その顔には涙の後がくつきりと残っていました

「ち……………つ。 気絶してやがる。 これじゃ、ここがどこで、ここからどうやって出るのか聞けん。 まあ、良い……………俺様を邪魔する者はいないし、そこにゆきがいるからな。 洗脳し直して、ここから出る方法をゆつくりと身体に聞いても遅くはないだろう(ジュルリ)」

コウキは頭を垂れて立っているゆきの身体を見ながら舌なめずりをし、ゆきに近づいていきました。その時、ゆきの身体が小刻みに震えていることにコウキは気づいてはいませんでした

「ちっ、どうなってんだ？ 全然近づけねえぞ？」

コウキがそう呟くのも無理もありません。行けども、行けどもゆきとの距離が縮まらないのです。ゆきはそこに立っているだけなのに……

いな！ 立っている事をコウキは不思議に感じなければならなかったのです。なぜならば……

「（ゴゴゴゴゴ）な、何だ！？ 何が起きてる！？」

ここはゆきが作り出した空間なのだから……

……SIDE END……

「ユキがゆきに近づこうとしている時

「・・・・・・・・・・見つけた・・・・・・・・・・」

「え!？」

ほんの僅かじゃが、ゆきの魔力を感じることができた。 じゃが・
・
・
・

「・・・・・・・・・・ライト、これは・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はい、間違いありません・・・・・・・・・・」

ライトに確認すると、どうやら間違いないらしい。 ち・・・・・・・・・・
つ! 何故、この世界にあるんじゃない? スペース・オブ・ルシファー魔王の空間が・・・・・・・・・・
!?

「お爺さん、ゆきは!？」

「あ、ああ・・・・・・・・・・生きておるし、無事じゃ」

「よ、良かった」

ユーノはゆきが無事である事が分って安堵の表情をする。 そう。

今は無事じゃ
・
・
・
・
・
今はな
・
・
・
・
・

第二十一話 「温泉旅行、そして……（暴走編）」（後書き）

雪「雪と！」 は「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「「座談会！」」

雪

「まずは……すいませんでした————っ！！ m
——」m

はやて

「今回も最初に謝るんや……」

信慈

「やれやれ」

はやて

「ほな、作者さんはほっとくで、信慈君」

信慈

「はいよ」

はやて

「ゆきちゃん、洗脳が解けるタイミングが悪いんやな」

信慈

「まあ、それは運だからな。（フェイト達が）攻撃されて、なのはが庇って倒れ、そこで洗脳が解けるといふのは誰にも想像できな

いことなんだからな」

はやて

「そうやな。 あ、そうや。 お爺さんはあの空間の事、知つとるみたいやけど、あの空間は何や？」

信慈

「ああ、それはな……（ゴニョゴニョ）」

はやて

「ふむふむ」

雪

「ええ、二人に無視されたので、自力で復活しました。 ここで前作『魔法少女リリカルなのは』ツインズ』と今作『魔法少女リリカルなのは』ツインズ』（改訂版）』の設定は同じところもあれば、違うところもあるという断りを入れておきます。 では、この辺で座談会を終わりにしたいと思います」

信慈

「というものだ」

はやて

「そ、そうなんや。 ゆきちゃん、大丈夫やるか？」

信慈

「今のところは大丈夫だ」

はやて

「ふん。 って、大丈夫じゃなくなること有り得るん!？」

信慈

「・・・・・・この小説を読んでくださる方々に感謝を申し上げる！
では、さらばだ！」

はやて

「あ、ちよい待ちい！ そこんとこどないなるんや！」

雪

「あらら、行っちゃいましたね・・・・・・えつと、感想・質問なども待ってます。 次回は温泉旅行・救出編です。 お楽しみに！」

第二十二話 「温泉旅行、そして……」（救出編）」（前書き）

雪

「第二十二話、更新しました」

信慈

「ユートピアさん、ヒョウガさん、感想ありがとうございます」

雪

「強引な話で展開していきます。それでも良いよという方は読んでください」

はやて

「では、本編をどうぞ」

第二十二話 「温泉旅行、そして……（救出編）」

……第三者SIDE……

『爺ちゃん、爺ちゃん』

『お、か。 どうしたんじゃ？』

『国語の宿題で物語を書いてこなくちゃいけなくなっただ。 それで爺ちゃんが話してくれた物語を書こうと思ったんだけど、ところどころ抜けてるところがあるからさ。 爺ちゃんにまた話してもらいたいんだ』

『うむうむ。 で、 はどの物語が聞きたいんじゃ？』

『子どもの頃に聞かせてくれたヤツで、“世界を救いし英雄”っていう物語』

『“世界を救いし英雄”じゃな。 あい、分かった。 話すとしてよ』

『よろしく』

『、この世界とは異なる世界があることは知ってるな？』

『うん。 並行世界説だよな』

『うむ。 その並行世界の一つに“ホワイトスノウ”と呼ばれる世界がある。 そして、その世界には代々受け継がれる物語が存在す

る。それが……」

『“世界を救いし英雄”だね』

『そうじゃ。その物語の冒頭はこうじゃ。昔々、世界は一人の王が統治する一つの国だった。その王は人々に魔王と呼ばれ、魔戦士と呼ばれる者たちが守っていた。そして、魔戦士は優れた武、優れた知、優しい心をもつ者であったとある』

『ふむふむ』

『そして、その中でも最強と言われたのが五代目魔王・ナナリーを守りし三人の女魔戦士、パティ・シャプロン、ルージュ・ブランシエ、セレーヌ・プティットじゃ。何故、その三人が最強と言われるのか、は覚えておるか？』

『えっと、三人が稀少技能レアスキルと呼ばれる能力をもっていたからだっけ？』

『そうじゃ。パティは“魔王の空間”スベース・オブ・ルシファーを、ルージュは“魔王の衣”アイズ・オブ・ルシファーを、セレーヌは“魔王の眼”アイズ・オブ・ルシファーを持っていたのじゃ。その三人が仕えたナナリーは初の女性魔王で、歴代魔王の中でも良い治世を行った事で有名であるが、事件が起こったのは……』

『ナナリーの死後、六代目魔王・リヴァルの統治時代だよね』

『うむ。その時……』

……SIDE END……

「はっ！ 今のは……………」

「お爺さん、どうしたんですか？」

「いや、何でもない」

ゆきの魔力変化が起きてないか探っていくうちに夢を見ていたらしい。ワシはそう誤魔化すと、再度ゆきの魔力変化が起きていか探る。うむ……………どうやら、まだ大丈夫じゃな……………

それにしても、今のはワシが転生する前……………中学生の頃に、生前の爺さんから物語を聞いている夢じゃった。恐らく、この状況でフラッシュバックしたのじやろう

そう、ゆきが発動していると思われる魔王の空間というのは爺さんが創作した（爺さん自身は本当の話じゃと言っていたが）物語のはず……………しかし、これは爺さんが言っていた特徴と一致しているから、紛れもない魔王の空間じゃのう……………

おっと。何故、この世界に魔王の空間が存在しているのかの詮索は後回しじゃ。今はゆきの事に専念せねばなるまい……………

「……………フレット君、いやユーノと言ったかの？」

「あ、はい」

「今から言つ事をよく聞きなさい」

「・・・・・・・・はい」

ワシはゆきの僅かな魔力変化も見逃さないように注意しながら、ユーノを見つめて爺さんに言われたことを語りだした

「今、ゆきがいるのは自らが創った空間じゃ」

「え？」

「その名は魔王の空間。その大元の特徴は『内外問わず、所有者以外入出不可能』と『絶対不可視』じゃ」

「え！？　じゃ、じゃあゆきは助けられないという事なんですか！？」

ワシのその言葉でユーノが詰め寄ってくる。　ワシはそれを手で制し、眼を瞑って首を横に振った

「落ち着きなさい。　これはあくまでも所有者の制御下で行使した場合じゃ。　今回、魔王の空間は暴走状態にあり、その場合は付け入る隙があるのじゃ」

「それじゃ、ゆきは助けられるのですね！？」

「うむ・・・・・・・・」

「良かった・・・・・・・・」

ユーノはゆきが助けられるのが分かって喜ぶ

そう、助けられないわけではない・・・・・・・・付け入る隙とは、暴走した魔王の空間は不完全であるための魔力の切れ目ということ。

じゃが、その切れ目は全体の僅か1、2%しかないうえに、そこを的確に攻撃を加えなければならぬため、困難であるのは間違いない

「・・・・・・・・ライト、フォームチェンジ“刀”」

「Yes , f o r m c h a n g e ” S W O R D ”」

たとえ困難でもゆきを助けるにはやらなければならない。　ワシはそう決意し、ライトを待機状態から第二形態の刀へと変形させると、その場を立ちあがる

「お爺さん？」

「時間がないのでな。　ワシは今からゆきを助けに行く。　お主はなのはを頼むぞ」

「あ。　はい！！」

ユーノは頷くと、なのはの治療に専念し始める。　ワシはそれに微笑むと、なのは達を背にするように前へと進み、ライトを上段で構えて全神経を集中させていく。　魔力の切れ目を見つけるために・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

魔力の切れ目はゆきの魔力が漏れ出しているところであるが、それを見つけ出すのは容易ではない。　しかし、ゆきを救うために見つけなければならぬ。　ましてや、ゆきに人殺しをさせるわけにもいかない

ワシは額に汗を滲ませながら、魔力が漏れ出しているところを探っていく。　その時、ゆきの魔力に変化が起きる

ち・・・・・・・・っ！　予定よりも早い・・・・・・・・！

「！！　旦那様・・・・・・・・！」

「分かっておる！！」

ライトの焦りの言葉にワシは怒鳴りながら、焦る気持ちを抑えて魔力の切れ目を探っていく

「・・・・・・・・・・・・・・・・そこだ・・・・・・・・！（ダシュッ！）」

遂にゆきの魔力が漏れ出している場所を発見した。そして、そこ目掛けて素早くライトを振り下ろすと、目の前に暗闇の空間が広がる穴が出現した

「ライト、フォルムチェンジ“銃”」

「Yes, form change ”GUN”」

その穴に飛び込んだワシはゆきの魔力を辿りながら、ライトを刀から第一形態の銃へと変化させてゆきの下へと急ぐ。ゆき、早まるでないぞ・・・・・・・・！！

……コウキSIDE……

行けども行けども、全然近づけねえぞ？ こりやどうなってんだ？

「（ゴゴゴゴゴ）な、何だ！？ 何が起きてる！？」

立ち止まった瞬間、空間が歪みだす。何が起きたのか分からず、パニックになってしまう

そして、気が付くと

「な！？ 動かねえ！？ って、何だこりゃ！？」

身体が動かなくなっていた。身体を見ると、空間から伸びた黒い触手が身体に巻きついていたのだ。さらにその触手によって徐々に身体が沈んでいっている。これはどういうことだ！？

「おい！ これはどういう　　っていねえ！？　どこ行っただ！？」

どうなっているのか訊ねるため、ゆきの方を見るが、さっきまでいたはずのゆきが消えていた。じよ、冗談じゃないぞ！？　こ、こんなところで一人になるなんて真っ平御免だ！！

「くそ・・・・・・・・っ！！」

何とか逃げ出そうとするが、触手によるホールドが強く動くことさえ出来ない。さらに徐々にだが魔力が少なくなっている気がする。ち・・・・・・・・っ！！　本当にどうなってんだ！？

「くそおおおおっ！！」

そう叫びちらしながら、残っている魔力を総動員して、触手から抜

け出そうと身体強化する。　こんなところでやられてたまるか！！

……第三者SIDE……

「……………」

コウキが躍起になって触手から抜け出そうとしている頃、今まで立っていたはずのゆきは蹲っていました

その身体には青白く膜が薄く覆っており、暗闇から伸びた触手を防いでいるようでした。　しかし、ゆきの瞳は生気が全く感じられず、ただ一点を見つめ、『お姉ちゃん、ごめんね』と繰り返していました。　大好きな姉・なのはを自分が傷つけたという自責の念が重くのしかかっていたのです

「……………ゆき、見つけたぞい」

そこに、全体に障壁^{バリア}を展開させた信慈（爺Ver.）が現れました

……SIDE　END……

無理矢理空間内へと侵入したワシを外に追い出そうとしたり、魔力に反応してワシを取り込もうと触手を伸ばしてきたりするのを障壁^{バリア}とライトで防ぎながら、ゆきを探していく

コウキとかいう輩の魔力が徐々に少なくなっているため、ワシと同様に身体ごと取り込まれようとしているのじやろう。魔力0＝死という図式が成り立つため、これが急がねばゆきが人殺しになりかねんわい

「あれは・・・・・・・・」

数十回目の触手攻撃を防いだ時、何かが青白く光っているのに気が付く。僅かだが人影のようにも見える。ゆきであると感じたワシは迫りくる触手を掻い潜りながら、光っている場所へと急ぐ

「・・・・・・・・ゆき、見つけたぞい」

人影はやはりゆきじゃった。ゆきは青白い薄膜で覆われ、蹲っていた

「これは・・・・・・・・」

その薄膜には聞き覚えがある。爺さんが言っていた魔王の衣ではないか・・・・・・・・魔王の空間に続いて、魔王の衣まで・・・・・・・・

いや、今はそんなことはどうでも良い。ゆきを助けねば・・・・・・・・

「ゆき、ゆき……」

蹲りながら『お姉ちゃん、ごめんね』と呟いているゆきの肩を揺する。すると、ゆきは顔を上げて生氣のない瞳をこちらに向ける

「……あ、お爺さん……」

「ゆき、迎えに来たぞい。さあ、皆のところへと戻るのじゃ」

「……私、戻れない……」

「……ゆき……」

「……このままここに……」

これは重傷じゃな……仕方がない……

「ゆき、よく聞きなさい。確かになのは傷つけたのは事実かもしれない。じゃが、それはお主に罪はない」

「……違う。お姉ちゃんを傷つけたの。私がこの手で……」

ワシがそう話を切り出すと、ゆきは生氣のない瞳から大粒の涙を溢

れだした。　ワシは優しく抱きしめながら、更に言い聞かせるように口を開いていく

「なのはは無事じゃ。　今ここでお主が消えたらどうなると思う？　なのはは悲しむじゃろ。　いや、悲しむではすまん。　自分があの時、倒れたからゆきが死んでしまったと、なのはは自分を責め続けるじゃろ。　そして、最悪ゆきの後を追って自らの命を絶つかもしれん」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

ワシの言葉にゆきが戸惑いの声をあげる

「ゆき。　なのはの・・・・・・・・お姉ちゃんの悲しい顔を見たいのかの？　いや、悲しむのはなのはだけではない。　お主の家族・友達もじゃ。　お主はその者たちが悲しむ顔を見たいのかの？」

「・・・・・・・・見たくない・・・・・・・・」

「そうじゃろ？　ゆき、お主が今やらなければならないのは、後悔ではない。　なのはに・・・・・・・・皆にお主の無事な姿を見せることじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無事な姿を見せること・・・・・・・・それがお主の成すべき事じゃ」

「……………成すべき事……………」

「そうじゃ」

ワシはそう叫びながら抱きしめるのを止め、ゆきの眼を見つめながら

「ゆき。　なのはに元気な姿を見せなさい。　そして、なのはにちゃんと謝りなさい。　なのはちゃんと答えてくれる。　なのははちゃんと許してくれる」

と言い聞かせていく。　すると、ゆきの瞳は徐々に生氣が戻っていき

「う、うわぁああああん!!」

今までにないぐらいの大声で泣き、ワシにしがみ付いてきた

「……………今は思う存分、泣きなさい。　悪いものを洗い流して、元気なゆきに帰るために……………」

ワシはそう呟きながら優しく抱きしめ、泣き続けるゆきの頭を撫でていく

「空間の暴走が止まりました。お疲れ様です、旦那様」

「ライトもご苦労さん」

ライトとお互いを労いながら、ワシは一息つく

凄く強引じゃったが……上手くいつて良かったわい。コ
ウキの魔力も若干じゃがあるようだし、ゆきが人殺しになる前に止
めることができたわかな……

「……………（すうすう）」

ゆきは泣き疲れて眠っている。その頬には涙の痕があるものの、
その寝顔には穏やかさがあった

「ゆきはもう大丈夫じゃな……」

「はい」

ワシはそう呟きながら、涙の痕を消してゆきを背負い

「ライト・・・・・・・・」

とライトを呼ぶ。待機状態のライトはワシが聞きたい事が分かっているのか宝石を光らせて応答する

「はい。魔王の空間は安定しております。もうじき外に出られるかと」

「そうか。コウキとかいう輩もかい？」

「はい」

「分かった」

そう返事をする、魔王の空間から元の森へと風景が変わった。魔王の空間から抜けだしたらしい

「朝みたいじゃな・・・・・・・・」

東空から夜明けを示す太陽が昇っている。それを帽子のツバに手を持っていきながら、眩しそうに見ていると

「ゆき!」

後ろからゆきの名を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、そこには・
・・・・なのはを背負った恭也さんとユーノを肩に乗せている土郎くんがいた

うむ。当然と言えば、当然じゃな・・・・・

第二十二話 「温泉旅行、そして……（救出編）」（後書き）

雪「雪と！」 は「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「「座談会！」」

雪

「まずは……すいませんでした————っ！！」 m
——m

はやて

「最早、クドいんとちゃう？」

信慈

「全くだ」

はやて

「毎度のこと作者さんは無視するで」

信慈

「了解」

はやて

「お爺さんのお爺さんのお話が最初に出てきたんやけど、これはどういうことやろ？」

信慈

「何故、ゆきの能力を知っていたのかという説明だな」

はやて

「そうなんや。 あ、そうそう。 お爺さんが焦る理由ってあの触手だったんやね」

信慈

「そうだ。 魔王の空間は暴走すると魔力を持つ者を身体ごと吸収するようになってしまふ。 これは所有者本人も例外じゃないからな」

はやて

「恐ろしいわ」

信慈

「まあ、ゆきはそれを無意識に魔王の衣で守っていたんだけどな」

はやて

「それでも限界があるんやろ？」

信慈

「ああ。 だから、魔王の空間の暴走を食い止めることができて良かったということだな」

はやて

「そつやな」

雪

「では、この辺で座談会を終わりたいと思います！」

はやて

「あ、復活しとる……………」

信慈

「やれやれ」

雪

「この小説を読んでくださる方々に感謝を」

信慈

「感想・質問などがあれば」

はやて

「送ってください」

雪

「お願いします。次回は温泉旅行・完結編です」

信慈&はやて

「「お楽しみに」」

第二十三話 「温泉旅行、そして……」（完結編）」（前書き）

雪

「第二十二話、更新しました」

信慈

「ユートピアさん、感想ありがとうございます」

雪

「場面の移り変わりが多分激しいです。 また、残酷な描写があるので注意してください」

はやて

「では、本編をどうぞ」

第二十三話 「温泉旅行、そして……………（完結編）」

「ゆき！！」

帽子のツバに手をかけながら、夜明けの太陽を眩しそうに眺めていると、後ろからゆきの名を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、そこにはなのはを背負った恭也さんとユーノを肩に乗せた士郎くんがいた

「お主らは……………そうか。　なのは達を捜していたのじゃな」

そこにいる理由は直ぐに理解したが、少し考える素振りを見せてそう呟きながら二人に近づく。二人は少し警戒したが、恭也くんがワシだと気づいて近寄ってくる

「魔宮さん、ゆきは……………」

「大丈夫。　疲れて眠っておるだけじゃ」

「そうですか。　良かった……………」

恭也くんは安堵の表情で、ゆきの頭を撫でる。　ワシは微笑むと、士郎くんの方を見る

「私はなのは達の父親の士郎と申します。 ゆきを助けていただいてありがとうございます」

「いや何、礼を言われることはしとらんよ。 顔をあげてくだされ」

士郎くんが頭を下げてきたので、そう言って頭をあげさせる

そう。 ワシが最初からなのは達の傍にいれば、最悪二人をこんなに傷つけることにはならなかったのじゃから……まあ、後悔をしても仕方がない。 これからどうするのが大事な事じゃからう

「おっと、名前を言っておらんかったの。 ワシは魔宮邦夫。 しがない元軍人じゃ」

「恭也から聞いております。 先日、なのはも助けていただいたそうで」

「通りすがったのでな」

ゆきを士郎くんの手渡しながら自己紹介をする。 名前は恭也くんから聞いているだろうが、直接この姿で出遭うのは始めてじゃから、礼儀として言わないといけないからのう

「 旦那様。 コウキの意識が戻ったようです。 逃走する前に 」

「分かった 士郎くん、ワシは今から行かねばならんところがある」

「どこへ？」

「この事件を起こした犯人の所じゃ」

「では、私 m」

「ダメじゃ！ ここから先はお主らの関わりないこと」

士郎くんが『私も行きます』と言うのを遮った。 士郎くんと恭也くんは今からすることを見られるわけにはいかん。 それに二人には別の役割があるからのう

「しかし………！」

「ここからはワシの領分。 これ以上踏み込むというのなら、お主らとて容赦はせん………！（カッ）」

「く………っ!？」

ワシはそれでも食い下がろうとする二人目掛けて少し殺気を放つ。
二人が後ずさったのを見て殺気を収めると

「……………お主らは旅館に戻りなさい。 皆が心配してるのじ

やろう？ それとユーノ。 事情を士郎くん達に話しなさい。 良
いね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクリ）」

「わ、分かりました」

ワシは三人にそう告げ、コウキの下へと向かった

コウキ、この世に転生してきたことを後悔させてやる・・・・・・・・
！ 決して逃がさん・・・・・・・・！！

……… 第三者 S I D E ……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「父さん・・・・・・・・」

「ああ、行こうか・・・・・・・・」

信慈が入った森をしばらく見つめていた二人だったが、そう呟くと
踵を返し、旅館に戻っていきます

「・・・・・・・・..なのはとゆきが何かを隠していたのかは知ってたけ
ど、こんなになる秘密って何だろう？」

「・・・・・・・・それは分からない。だが、なのはとゆきが考え抜いて決めたことだろう。私はそれを尊重しようと思う。恭也もそうだろうか？」

「ああ。母さん達もそう思ってるはずだよ」

「そうだな。さて、桃子たちが心配して待っているからな。急ぐぞ」

「ああ」

二人はなのはとゆきを起こさないように注意しながら、足を速めて旅館へと向かっていきました

……「ウキSIDE」……

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・」

荒い息をしながら俺はスレイブを支えにして立ちあがる

あの空間の触手のようなものに捕まって魔力を奪われてしまい、今は枯渴状態に近い。それに体力も残っていない

「はあ、はあ。転移できる魔力も残っていないか・・・・・・・・」

転移を試みるができなかった。また、さつきからミルと連絡がとれない。これはミルに何かがあったとみて良いだろう

「くそ………っ。　　はあ、はあ。　　ここまで来て逃げることになるとは………」

俺はそう呟きながらスレイブを支えにして歩いていく。　　どこか隠れる、魔力回復に専念できる場所を捜すために

「はあ、はあ。　　魔力が回復したら、今度こそなのは達を俺のものにしてやる。　　はあ、はあ」

「それはできぬよ………」

「な！？　　お、お前は………！？」

突然、目の前に昨日の爺が現れたため、驚いてしまった。　　こいつは確か死んだはず………！！

「ふっ………そんなにワシが生きているのがおかしいかい？」

心を見透かしたように爺は結界を張りながら、そう呟く。　　微笑んだ表情をしてはいるが、その目の奥は笑ってはいない。　　俺は苦虫を噛み潰したような顔で爺を見つめる

すると、爺は日本刀を下段に構えて

「・・・・・・・・・・さて、この世に転生してきたことを後悔するが良い・
・・・・・・・・・・!!（スッ）」

「何!?!? ぐはっ!?!?」

そう言い放ち、目にも止まらぬ速さで俺の腹に刀を当ててきた。
俺は避けることもできず、もろに食らって後ろの木に叩きつけられた

「ブハッ!! ぐぼ、ぐぼ。 はあ、はあ、はあ・・・・・・・・・・」

叩きつけられた時に内蔵でも傷つけたのだろう。 血の塊を吐いて
咳き込んでしまう。 起き上がる気力もない。 くそ・・・・・・・・・・
っ。 こんな身体じゃなかったら、こんな爺・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・・・」

帽子のツバに手を掛けて、ゆっくりと近づいてくる爺。 俺は息を
さらに荒くして苦痛に耐えながら、何とか睨みつける

そして、俺の目の前まで来て刀を突き付けると

「・・・・・・・・前にこんな輩がいた・・・・・・・・神からもらった能力を見せびらかし、なのは達を自分のものにすると言った・・・・・・・・そう。お主と同じ転生者じゃ・・・・・・・・」

「はあ、はあ、はあ・・・・・・・・」

昔話を語りだした。俺と同じ転生者？ 何故、俺が転生者だと知ってるんだ？

「・・・・・・・・そやつがどうなったか知りたいかい・・・・・・・・？」

「はあ、はあ、はあ。どうなったってんだよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・右腕を斬り落とされたのじゃよ。こんな風に・・・・・・・・」

「ぐおおおおおっ!？」

爺はそう言つと俺の右腕を斬り落とした。た、躊躇いなく斬りやがった、この爺・・・・・・・・!!

「・・・・・・・・ほう。まだ、睨みつけるだけの精神力はあるようじゃのう。以前の転生者はこれだけで泣きじゃくっておったのに」

俺は痛みを堪えて爺を睨みつけると、そう呟く。 ザコと俺を一緒にしてんじゃねえよ……………

「おっと、続きを話そう。 そやつは次に左腕を斬り落とされた……………」

「ぐわあああああつ!?!」

爺は当然と言わんばかりにそう言いながら俺の左腕を斬り落とした

「……………そして両足を斬り落とされた……………」

「ぐわあああああつ!?!」

同様に俺の両足を斬り落とす爺

な、何なんだ、この爺は!?! こ、こんなことを平然とやるなんて正気の沙汰じゃねぞ!?!

俺は苦痛で朦朧としながらも、爺を見つめると少し距離を取ってこちらを見据えていた。 その飄々とした態度に恐怖を感じた

「……………確かにワシは正気ではないかもしれんのう。 じゃ

がな。 お主らの様に人の人生を踏み躪るようなことはしては
おらん・・・・・・・・ライト、フォルムチェンジ“銃”」

「Yes , form change “GUN”」

爺はそう呟いて日本刀を銃に変形させ、俺に銃口を向けた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

眼が霞んでよく見えないが、幾つも魔力スフィアが形成されている
みたいだ

どうやら、俺はここまでらしい。 そう覚悟した時、俺は忘れてい
た転生前の事を思い出す

そうだった。 俺は“魔法少女リリカルなのは”が好きだったんだ。
なのは達とともに皆を守る自分を想像し、友人達と語り合ってい
ったっけ・・・・・・・・

俺は涙が止め処もなく流れてきた。 はは、思い出すのが遅すぎた
なあ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・Addis , Koki」

その言葉を最後に俺の意識は途絶えたのだった

……SIDE END……

コウキの目から涙が止め処もなく流れている。死にたくないという感じではない。これは自分のやってきたことの後悔なのだろう。そして、コウキもワシと同じく、神の被害者であると漠然と感じた。しかし、もう遅い……………

コウキよ、違う形で会いたかったのう

「……………Addi's , Koki」

ワシはそう呟き、ライトの引き金を引いた。複数の魔力スフィアから同時に砲撃するミラージュファイアシュート殺傷Ver.（ティアのクロスファイアシュートを参考に組んだ魔法）がコウキに直撃し、辺りを煙が立ち込める

「神といのはそんなに偉いのかのう」

「旦那様……………」

煙がはれると、コウキは跡形もなく消滅していた。ワシはコウキがいた場所を見つめてそう呟くと、ライトが声を掛けてきた。分かっておるよ。そんな神は一握りしかおらんというのはな

「・・・・・・・・さて、行くつかの」

「はい」

その後、ワシはコウキの墓を建ててしばらく黙禱を捧げる。そして、待機状態のライトに声を掛けてなのは達がいる旅館に向かった

……第三者SIDE……

神界のとある執務室で大きなスクリーンに信慈が旅館に向かっていく姿が映し出されていました。それをソファーに座り、つまらなそうに見つめる男性がいました。その男性こそ信慈を殺し、コウキや前の転生者を向かわした張本人、神・ジンでした

「・・・・・・・・ちつ。 ヤツも大したことない・・・・・・・・まあ良い。 次に期待だな」

「・・・・・・・・ジン。 反省しとらんみたいだな・・・・・・・・」

「！！ トウ、トウム様・・・・・・・・」

ジンがそう呟くと、後ろから声をかけられました。 ジンは驚いて後ろを振り向くと、そこには初老の男性、ジンの上司の創造神のトウムが立っていました

「……………取り返しのつかない事を、幾度も幾度も……………」

「……………」

「そして、今回は随分と派手にやってくれたものだな、ジンよ？」

「……………」

ジンは黙ってトウムの言を聞いていました。その顔は若干、青くなっていました

トウムは元大創造神、その力は他の創造神よりも強力でした。また、大創造神時代のトウムの二つ名が『鬼神』であることをジンは知っていたのです

「『仏の顔も三度まで』という諺が人の世にあるのを知っているかい？ お前はかれこれ四度もこういうことをしているな。いや、私が把握していないだけで他にもやっているかもしれないな」

淡々と話し続けるトウム。ジンはより一層顔を青くしていきます。

この後の自分の処遇が容易に推察できるため、逃げ出したい衝動に駆られるが、蛇に睨まれた蛙のように身体が硬直して動くことができないでいました

「・・・・・・・・・・さて、長々と喋ったが、お前の処遇を
言い渡すでしょう。お前は神を名乗る資格なし。永遠の無に還
れ、ジン!!」

「ぐわあああああつ!？」

そう言い放ったトウムが手を翳すと、ジンが叫びをあげながら溶け
ていき、最後にはそのばにトウムしかいなくなりました

「トウム様・・・・・・・・」

その時、ドアが開く。そこにはエリスがいて、トウムに声をかけ
ます

エリスはこの一部始終を見ていたのか、心配そうな表情をしていま
した

「・・・・・・・・これで良い、エリスよ。私は何度もチャンスをや
った。それを反故にしたのはジンだからな。それにジンをあの
まま放置すれば、罪のない者が傷つくことになる」

「分かっております。では、私は魂の浄化をしに行きます。失
礼します」

エリスはそう言う執務室を出ていきました。その場に残ったト

ウムはスクリーンを操作し、眠っているゆきを映しださせました

「……………ゆきは稀少技能レアスキルが発現することなく、翠屋の二代目として過ごす日々を送る予定だった。しかし、このままではゆきが……………いや、あの世界そのものが危うくなる。どうすれば……………ん？」

トウムは近い将来、ゆきの稀少技能が再暴走、それにより世界が崩壊することになることを危惧し、どのように防ぐかを考えていると、世界と神界との間で留まっている魂がいるのを感じました。

「あの魂は……………そうか、フェイトを思うあまり、あの場に留まってしまったのか。しかし、あのままでは悪霊化してしまう……………二人を救う方法はこれしかない。あの魂をゆきの稀少技能の管理者に……………」

トウムはそう結論付けると、まずゆきの稀少技能に制限を付け、次に留まっている魂を具現化し、ゆきの魔力を介して稀少技能を管理できるようにしました。また、ゆきの持つているデヴァイスをなのはのレイジングハートと同じ様に創り直しました。今回のジンのしてしまったことのお詫びとして……………

「ふう……………これで暴走する可能性が低くなっただろう」

トウムは少し微笑むと、執務室ごとスクリーンを消していきます。
そして、『信慈に』と呟きながら、ドア以外何もなくなつた部屋を出ていきました

……SIDE END……

ワシは旅館に着くと、ライトに聞いておいたなのは達の座敷に向かう

『なのは、そのまま寝ながら教えてほしい。 なのはとゆきが何をやっていたのかを』

『そ、それは……………』

座敷の手前で、そうういう声が聞こえてきた。 どうやら、なのはが目を覚ましたらしい。 ワシは様子を見るために気配を消し、壁（座敷と座敷の間）に寄りかかると、懷からキセルを取り出した

『……………それは僕が説明します』

『ユーノ君！？』

キセルに特別に調合した薬草（魔力回復、精神安定の効果がある）を入れて火をつけていると、意を決した声色でユーノが口を開く。
言いつけ通りに説明するみたいじゃな……………

『ほう、君は喋れたんだな』

『え？』

『はい。でも、驚かないんですね』

『ああ。普通のフレットとは何か違う感じがしていたんだな』

『そうなんですか』

『では、話してもらえるかな、ユーノ君？』

『あ、はい……。二人には僕の手伝いをしてもっていたんです。その手伝いというのは』

士郎くん言葉にうなずいたユーノはこれまでの事を掻い摘んで説明していった。ワシはそれを聞きながら空を見上げる。今日も良い天気じゃのう……。

『じゃ、じゃあ。あの動物病院の事件や町の樹木事件も、そのジュエルシードっていうのが起こしたことで、二人はそれに関わっていたって言うの?』

『はい』

一通りユーノの説明が終わった時、開口一番に美由希がそう話し出す。まあ、驚くのも仕方がないか……。あの事件がジュエルシードの暴走によるものというのは信じがたいことじゃからな

『では、先のなのはお嬢様が怪我をされたのも……………』

『はい。あの時はジュエルシードを封印する時に邪魔が入って……………』

『で、でもあの時、ゆきは転んで怪我をしたって』

『……………嘘ついてたの。ごめんなさい』

確かあの時、ゆきはユーノを捜していて転んでしまったと説明していた。それになのはも話を合していったところじゃろう

『なのは、謝らなくてもいいのよ』

『うん。あの時は仕方がなかったんだから』

『う、うん……』

『でも、ゆきが起きたら少し懲らしめようかしら』

『そうだね』

『ええ!?!』

『ははははは』

『え? え?』

『冗談よ、なのは』

『ふふふ』

『あ。も、もう二人とも……でも、ありがとう』

『なのは、良かったのう』

ワシはなのは達三人の笑い声を聞きながらそう呟くと、キセルを啜え直した

『………なのは』

『あ、うん』

『事情は分かった。　なのは、お前はそのまま続けたいかい……』

『………うん』

『………』

さて、士郎くんや皆はどう判断す
いや、もう決まっておるか

『分かった。　私たちはなのはが魔法使いを続けることに反対はない。　でも、無理はしても無茶はしないこと。　これだけは約束だ。　良いね』

『お父さん、皆………うん。　ありがとう』

予想通り、士郎くん達はなのはとゆきを見守ることにしたらしい
さて、頃合いじゃし………声をかけるとしよう。　そう思い、
ワシはキセルの灰を携帯灰皿に入れ、キセルを懷にしまうと、座敷
の前に立つ

「失礼。　お邪魔してもいいかい？」

『あ、魔宮さんですか？　ええ、どうぞ』

そして、ワシは断りを入れてから襖を開けると、なのはとゆきの周りに皆が集まっていた。二人は布団で横になっており、なのはは驚いた顔をして、ゆきは眠っていた。二人とも顔色は随分と良くなったように感じた

さて、なのははユーノが説明してくれるじやろうから、ここは話を進めるとしよう

「……………皆の顔を見るに事情は聞いたようじゃな？」

「ええ。あの魔宮さん。 犯人 （スッ） え？」

「くそれは聞かん方が良い。 お主のためにく」

「く……………そうですねく」

士郎くんが立ちあがってコウキの事を聞こうとしたので、手で制して耳元でそう告げる。ワシの言葉と態度で何かを感じ取ったのか、士郎くんは素直に引き下がる。悪いのう、こればかりは言うわけにはいかんのじゃ……………

ワシは心で士郎くんに詫びるとノエルくんが用意した座布団に座る。そして、なのはの方を見ると、ユーノに事情を聞いたのだろう、『ありがとう』と念話をしてきた。ワシは微笑むと『良い良い』と念話で返した

そして、ワシと士郎くん達はゆきが起きるまで、他愛もないことを

話していった

……第三者SIDE……

その頃、ゆきは夢の中である人物と出会っていました

「ゆきさん、起きてください。 ゆきさん……………」

「ううん。 あと五分」

「……………そういうボケはいりません!!」

「にゃああああっ!?!」

何故か夢の中でも眠っていたゆきは布団から追い出されて悲鳴をあげました

「何!? 何!?!」

ゆきは少し混乱して辺りを見回します。 そして、そこに女性が立っているのに気がつきました

「やっと起きましたね」

「あ、あなたは誰ですか？」

その人が知らない人物だったため、ゆきは少し警戒の色を示してそう訊ねました。その女性は姿勢を正して

「私はリニス。 ゆきさんの稀少技能を管理する者です」

「稀少技能？」

そう自分の名前と何者であるかを告げました。 ゆきが知らない単語がでてきたので首を傾げると、女性「（以下、リニス）は微笑んでこう説明しました

「稀少技能とは、通常の魔法……なの is さんが使用している魔法の他に保有する特殊な固有技能のことです。これを保有する者がごく稀なので、そう呼ばれているのです」

「へえ……って、それを私は持つてゐるって事ですか!？」

「はい」

ゆきはそんな凄い能力を持つていると知って驚きます。最早、警戒することも忘れるぐらい、信じられないものでした。 リニスは頷くが、直ぐに少し暗い表情をして

「本当はゆきさんの稀少技能は発現しないはずだったのです。しかし、一人の男のせいで、非常に危険な状態で発現してしまったのです」

「一人の男……非常に危険な状態での発現……？」

「その者の事は伏せておきます。その危険な発現によって暴走をしまい、ゆきさんの命も危ぶられたのです」

「……………あ」

リニスのその言葉で、ゆきはあの状況を思い出しました。自分が姉を傷つけたことを。それによって暗闇の空間に取り込まれたことを。お爺さん（信慈）が助けてくれたことを

「そうなの……私、お姉ちゃんに謝らないと!」

「……………ええ。でも、それはまだ待つてください」

「え？」

ゆきは、お爺さん（信慈）にも言われたのはに謝ることを思い出して立ちあがりましたが、リニスはそれを制します

「……………今、ゆきさんは稀少技能の暴走で少なくなった体力・

魔力の回復をするため、眠っている状態なのです」

「え？ 起きてますけど………？」

「これは、ゆきさんの精神に直接介入しているのです。夢の中と言った方が分かりやすいですが」

「そ、そうなんですか、リニスさん？」

「ええ。ですから、今は私の話を聞いてほしいのです。あと、丁寧な言葉で話さなくても良いですよ？ それにリニスと呼び捨てでもかまいません」

「は うん。じゃあ、リニスもゆきさんはやめて？」

「分かりました」

ゆきはリニスの言葉に頷くと、座り直してリニスにそう告げます。

リニスは微笑んで頷くが、直ぐに真剣な目をして話の続きを話し始めました

「………暴走は収まりましたが、近い将来必ず暴走してしまうでしょう。その時は誰にも止められないものとなり、世界そのものが崩壊してしまう可能性があります」

「ええ!？」

「大丈夫です。そのために私がいるのです」

「え？」

「私はその再暴走を危惧した神によって稀少技能の管理者になったのですから」

「そ、そうだったんだ。でも……………」

「でも……………」

ゆきはリニスの言葉に納得したが、少し考える表情をしました。
リニスは首を傾げながら、ゆきの言葉を待ちます

「……………私自身が自分の能力をコントロールできるように頑張らなくっちゃいけに気がするの。だから、リニス。コントロールの仕方、教えてほしいの」

「ゆき……………」

リニスはゆきが一瞬、とある少女と重なり合うのを感じました

「ダメ、かな……………」

「……………いいえ。むしろ賛成ですよ。私もそのつもりでしたから」

「ありがとう。じゃ、これからよろしくね」

「ふふふ。はい……………」

ゆきがそう言って笑顔になると、リニスもつられて笑顔になります。
そして、リニスはゆきとその姉・なのはならフェイトと仲良しになっ
てくれるはずと感じたのです

そして、リニスはフェイトのことを考えながら、ゆきと楽しく話
合っていました

……SIDE END……

「ん？」

士郎くんら三名の手合わせの申し込みを丁重に断っていると、誰か
に呼ばれた気がした。この声は……………

「どうしましたか、魔宮さん？」

「いや、何でもない。さて、温泉にでも入ってくるとしようかの」

ワシはそう言って誤魔化すと立ちあがる

「この温泉は良いですよ」

「ゆきももうすぐ起きるじゃろうから、ワシもそれまでには戻ってくるよ」

「はい」

ワシは士郎くん達にそう言いつと、座敷を出る。そして、温泉へと続く廊下をある程度進んだところで、周りに誰もいない事を確認し、変身を解いて屋根に飛び乗った

すると、そこには俺を転生させてくれた神さまがいた。やはり、俺を呼んだのは神さまか……………

「俺に何か用か、神さま？」

「ああ、ちょっとな（パチン）」

神さまはそう言つて指を鳴らすと、辺りが白い空間となった。ここは最初に会った場所かな？

「あそこでは人目につく可能性があるからな。場所を変えさせてもらったよ」

「それは良いが……………で、俺に用つて？」

「ああ。まずはお詫びだ。本来、我々創造神や管理神は創り上げた世界に不干渉でなければならん。しかし、今回は本当にすまなかった。私の部下のジンがそこまですると思わなかった」

神さまはそう言つと頭を下げてきた。俺は面喰つて

「顔を上げてくれ。か、神さまのせいではないんだから」

そう告げるが、神さまはそれでも顔を上げずにこつ口にする

「いや、これはジンの直属の上司である私の責任でもある。本当に申し訳ない。ジンは私の手で処罰をした」

「処罰？」

「ああ。処罰内容は伏せるが、これで邪悪な転生者は現れんから安心してくれ」

「そうか……………」

邪悪な転生者。そう聞いて俺はコウキの事を思い出した

多分、あのコウキはもともあんな人間ではなかったはずだ。それをジンとかいうやつが性格を捻じ曲げてしまったと考えられる

コウキも被害者だという思いがつのる

「・・・・・・・・一つ聞きたい。コウキはどうなった？」

「あの者は浄化によって本来の魂に戻ったよ。今頃は天国に向かっているはずだ」

「転生じゃないのか？」

「・・・・・・・・すぐには無理だ。あの者は単なる性格の改変ではなく、魂そのものが無理矢理改変させられたのだ。浄化で元に戻ったが、更に浄化させる必要がある。だから、天国に行かせないといけないのだ」

「そっか・・・・・・・・コウキの魂が元に戻ったのならそれで良い」

俺がそう返事をする、神さまは頷いて

「一つお前に話しておくことがある」

「？」

そう告げ、俺を見つめる。俺も見つめ返すと、神さまが口を開いた

「ゆきの稀少技能が非常に危険だったのでな。管理者を一人つけ

た」

「で、その管理者とは？」

「その者の名はリニスだ。魔力素体は山猫だな。恐らく、お前も知っている者だ」

リニス………？ ああ、A・Sのフェイトが闇の書に取り込まれた時に出てきた女性か………

「おっと、時間だ。ではな」

「あ、ああ」

神さまはそう言って消える。すると、白い空間も消えて屋根の上になった

俺はしばらくブーツとしていたが、我に返ると爺さんの姿になり、温泉に向かう。はやて達が来るまで待ってないといけないし、本当にひとつぶる入りたかったからのう

……ゆきSIDE……

「あれ？」

リニスと楽しくお話していたら、私の身体が薄くなってきました。
これって一体………？

「そろそろ、ゆきが起きる時間のようです」

「え？　じゃあ、もう会えないの？」

私が悲しそうな表情をすると、リニスは首を振って笑顔にこう答えました

「私は普段、魔王の空間内にいますし、外の世界にも具現化できるので、いつでも会うことはできますよ」

「それ本当？」

「はい」

「やった」

「では、またお会いしましょう。　なのはさんにちゃんと謝るのですよ」

「うん」

リニスのその言葉を最後に私は意識を失い、次に気が付くと私は布団で寝ていました。　ゆっくり首を動かすと

「あ、ゆきが起きたよ」

私が目覚めたことに気がついた美由希お姉ちゃんの声で、皆がこちらを向きました

「ゆきちゃん……………」

「あ、お姉ちゃん……………あの、私……………」

「うん……………」

私は横に眠っているお姉ちゃんに気付いて謝ろうと口を開きます

「ごめんね、お姉ちゃん……………」

「ううん。私が勝手にしたことだもん。ゆきちゃんが謝ることじゃないよ」

「……………うん」

お姉ちゃんは私が謝ると、自分が悪いと言ってそう告げて笑顔になります。私もつられて笑顔になりました。良かった。お爺さんの言う通りに謝って本当に良かった

「ん？ おお、起きたみたいじゃな」

「あ、お爺さん・・・・・・・・」

その時、風呂上がりの格好（浴衣）で座敷に入ってきて、起きた私に気が付きました。 お爺さんは私とお姉ちゃんの顔を見て

「仲直りしたみたいじゃな」

「「はい！」」

「うむうむ。 ん？」

笑顔でそう告げたので、お姉ちゃんと揃って大きく頷きました。
お爺さんは満足して座布団に座ろうとすると、私の横にあるユーノ君にもらった宝石を見て動きを止めました。 ど、どうしたんだろ
う？

「・・・・・・・・ユーノ」

「あ、はい」

「これはお主が作ったものかい？」

「はい。 僕が初めて作ったデヴァイスの試作品です。 通信手段にしか使えませんけど」

「そうか・・・・・・・・」

お爺さんはユーノ君の言葉にそう呟くと、宝石をつまみ上げてマジマジと見つめます。 どうしたんだろう？

「・・・・・・・・これはレイジングハートと同様の型、同様の能力が備わっておるな。 おそろく」

「はい。 神がレイジングハートと同型に創り直したのです」

『『『『・・・・・・・・・・・・・・・・』』』』』

お爺さんが宝石を眺めながらそう呟いた時、リニスが私の傍らに現れました。 リ、リニス、突然すぎなの・・・・・・・・皆、驚いて固まっちゃったじゃない

「・・・・・・・・えっと、あなたは誰だい？」

「大丈夫じゃ、土郎くん。 こやつは怪しい者ではない。 そうじやろ、ゆき？」

お父さんが我に返って、皆の代表でリニスにそう訊ねると、私の代

わりにお爺さんがそう言ってくれました。私は思いつきり首を縦に振りながら慌てて説明していきます

「うんうん。 リニスは怪しい者じゃないよ！ わ、私の能力の管理をしてくれてるの！」

「……………能力の管理者……………?」

「はい。 私の名はリニスと申し、神からゆきの稀少技能の管理者を任せられたのです。 それというのも」

お兄ちゃんが聞き慣れない言葉に首を傾げてしまいました。 その呟きにリニスが返事をすると、私が夢の中で説明された内容をお父さん達に説明していきます。 お父さん達は警戒をしながらもリニスの説明に耳を傾けてました

「……………なるほど。 それでリニスさん」

「リニスで結構です」

「そうかい。 なら、リニス。 君はゆきの能力の管理者としてゆきをサポートしてくれると言うわけだね？」

「はい」

「そうか。 今後も娘たちをよろしく頼む」

「はい」

話終えた時、お父さんがリニスに確認を取りました。 リニスが頷くと、そう言つて笑顔でリニスに握手を求めました。 リニスも笑顔で頷き、握手を返しました

よ、良かったの。 リニスはお父さん達に受け入れられたみたいで・
・・・・

それを機にその場の全員と名を交換し合つたりリニスは姿勢を正すと、お爺さんの持つている宝石に目をやりました

「そして、神はゆきの人生を脅かしてしまつたお詫びとして、ユーノが作ったデヴァイスを基礎に、なのはのレイジングハートと同型のデヴァイスへと創り直したのです」

「ということは、ゆきちゃんもなのはちゃんと同じように変身できるって事？」

「はい。 ゆきが望めばの話ですが」

リニスの言葉にすずかちゃんがそう訊ねると、リニスはそう返事をして私の方を向きます。 それにつられて皆が私を見つめてきました

私はお爺さんが持っている宝石を見つめながら考えていきます。私はどうしたいのかを・・・・・そして、決まりました。 私は・・・・・今まで一番近くについて見守ることしかできなかったから、

魔法使いになりたいと思います

「……………私も、お姉ちゃんとユーノ君のお役に立ちたい……
……だから、私も魔法使いになりたい」

「……………今回のようなことがあるかもしれんぞい？　それでも、なりたいのかい？」

その考えを皆に伝えと、お爺さんが真剣な目で私を見つめ、そう訊ねてきました

正直言つて、怖くないと言つのは嘘になるけど、お姉ちゃんを助けられる能力が自分にあるのに何もしないのは間違つてると思うの！

だから、私は魔法使いになりたい……………！

「うん……………!!」

「そうかい。　士郎くん……………」

私が想いをこめて頷くと、お爺さんは微笑んでお父さんの方を向きます。　お父さんは頷くと、私の方を見つめてきて口を開きました

「……………ゆき、お前の決意、ちゃんと伝わったよ。　私は反

対はしない。 皆もそうだろ？」

『『『『『 ああ（ええ）』』』』』

「ゆきちゃん、良かったね」

「うん」

「私たちも応援するからね！！」

「頑張ったね、二人とも！！」

「「うん！！」」

こうして、私はお父さん達の許可を得て、お姉ちゃんと一緒に魔法使いとして歩むことになりました。 が、頑張るの……！！

……SIDE END……

「旦那様、そろそろはやて様達が到着する時間です」

「む？ もうそんな時間かい？」

「はい」

喜びあうなのは達を見つめているとライトからはやての到着の時間が迫っている旨を告げてきた。 はやてにあっても良いのじゃが、

説明するのも面倒なのでここいらで身を隠した方がいいな

「<士郎くん、ワシはこれでお暇させていただくよ>」

「<そうですか？　なら、お見送りを>」

「<いや、良い。ではのう>」

「<はい。　お気をつけて>」

そう思ったワシは士郎くんに声をかけてから、座敷を出ていく。
もちろん、ゆき達に気付かれないようにしながらじゃ

そして、廊下を歩きながらリニスに念話を入れる

「　リニスよ。　ゆきの事、頼むぞい　」

「　はい。　魔宮さんもお気をつけて　」

「　うむ。　では、またのう　」

「　はい　」

リニスとの念話を切り、変身を解いてはやと俺の分身が到着する
のをロビーで待つ。　そう言えば、魔法の事ははやと俺には説明
するか否か聞くのを忘れていたな……。まあ良い。　その時

はその時だ。 さて、どうやって入れ替わるか……

俺は入れ替わるタイミングを考えながら、ソファで寛ぐのだった

はやてと俺の分身が旅館へと到着した。俺は隠れながら、分身がトイレに向かったタイミングで入れ替わる。そして、座敷に戻ってみるとリニスがいなかった。どうやら、はやてと俺には魔法の事は知らせないことにしてみたんだ

まあ、どの道、はやては魔法の事を知るから、別にいいんだね。

さて、事件も一段落したし、今日一日はダラダラするぞ

そう思った俺は恭也さんと土郎さんとともに温泉へと向かったのだ
った

第二十三話 「温泉旅行、そして……（完結編）」（後書き）

雪「雪と！」 は「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「「「座談会！」「」」

雪「雪と！」 は「はやてと！」 信「信慈の！」

雪&はやて&信慈

「「「座談会！」「」」

雪

「まずは……すいませんでした————っ！！ m（
——）m」

はやて

「（無視）今回はいろいろありすぎてどれから取りあげていくのか
悩むわ」

信慈

「（無視）そうだな。 まあ、主だったところから行けば良いんじゃないか？」

はやて

「そつやな。 まずはお爺さんの戦いはどうなったんや？ あたし
は信慈君に目隠しされてて見えなかったわ」

信慈

「知らなくても良い事だ。　今、言えるのはコウキという輩も実は被害者だったってとこだな」

はやて

「うゝん。　ジンという神は神さま失格やな」

信慈

「そうだな。　まあ、その上司の神さまによって肅清されたから、今後は多分大丈夫じゃないかな」

はやて

「そうあってほしいもんやな。　で、ゆきちゃんの所に新たな仲間が登場や」

信慈

「リニスだな。　こいつの説明は都合上省くぞ」

はやて

「ええゝ、何でなん？」

信慈

「ほぼ原作と同じだからだ。　違うのはゆきの稀少技能の管理者と
いうところだけだ」

はやて

「それなら仕方ないわ。　で、あたしの出番がないんやけどゝ」

信慈

「仕方がない」

はやて

「むむむ、納得できんわ!!」

信慈

「落ち着け、はやて。はやての活躍はきっと来るからな……・多分」

はやて

「多分って何や~~~~~~~~!!」

信慈

「では、この辺で座談会を終わりたいと思います」

はやて

「無視!？」

雪

「やれやれ（苦笑） この小説を読んでくださる方々に感謝を」
勝手に復活

はやて

「もうええわ……感想・質問などがあれば送ってください」
「

雪

「お願いします。次回は次元震が起きるかも？」

信慈&はやて

「「お楽しみに」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1814p/>

魔法少女リリカルなのは～ツインズ～（改訂版）

2011年9月28日22時57分発行